

2024 年 1 月

食料安全保障月報

(第 31 号)



令和 6 年 1 月 31 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2024 年 1 月食料安全保障月報（第 31 号）

目 次

概要編

I	2024 年 1 月の主な動き	1
II	2024 年 1 月の穀物等の国際価格の動向	6
III	2023/24 年度の穀物需給（予測）のポイント	6
IV	2023/24 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	6
V	今月の注目情報「南米の穀物等の生産・輸出動向」	7

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	1 1
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 2
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	1 3
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	1 5
5	食品小売価格の動向	1 9
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	2 0
7	FAO 食料価格指数	2 2

今月のコラム

「インドの食料事情（3）：食文化（インド食）①」	2 3
--------------------------	-----

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞	2024/25 年度の冬小麦の播種面積は前年度比で 6.2%の減少
	＜カナダ＞	2024/25 年度の生産量は 33.3 百万トンの見込み(AAFC)
	＜豪州＞	2023/24 年度の輸出量は、0.5 百万トン上方修正
	＜EU27＞	2023/24 年度の生産量は過去 5 年平均を上回る 133.8 百万トン
	＜中国＞	2023 年 1 月から 11 月までの輸入量は前年に比べ 20.2%増加
	＜ロシア＞	2023/24 年度の輸出量は史上最高でブラジル等への輸出も増加
	＜ウクライナ＞	2023/24 年度の輸出量は前月予測から 1.5 百万トン上方修正
	（参考 1）	黒海穀物イニシアティブ履行停止後の輸出状況
	（参考 2）	東欧諸国へのウクライナ産農産物の過剰流入問題と輸入規制の状況
2	とうもろこし	1 1
	＜米国＞	収穫面積の増加により、生産量は史上最高の見通し
	＜ブラジル＞	2023/24 年度の生産量は大豆等への転換により減少
	＜アルゼンチン＞	2023/24 年度の生産量は、前年度から回復する見通し
	＜中国＞	単収及び収穫面積の増加を受け、生産量は史上最高
	＜ウクライナ＞	2023/24 年度の生産量は、侵攻前の 2021/22 年度より 27.6%減

3 コメ	17
＜米国＞	長粒種、中・短粒種の輸出価格はともに高止まり
＜インド＞	ラビ米の生育が進展
＜中国＞	2023/24 年度は播種面積が減少し、生産量が対前年比 0.9%減少
＜タイ＞	雨季米は干ばつ、乾季米は灌漑用水不足からいずれも減産見込み
＜ベトナム＞	南部メコンデルタ地域の冬春作の播種を開始

II 油糧種子

大豆	23
＜米国＞	収穫面積の減少により、生産量は前年度より 2.5%減
＜ブラジル＞	2023/24 年度の生産量(CONAB)は前年度より 0.4%増で史上最高
＜アルゼンチン＞	2023/24 年度の生産量は、前年度より倍増
＜中国＞	2023/24 年度の生産量・消費量・輸入量は史上最高
＜カナダ＞	収穫面積増により、2023/24 年度の生産量は前年度から 6.7%増

(参考1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について(2023/24 年度)・・・	29
(参考2) 単位換算表・・・	29
(参考3) 各国のクロップカレンダー一覧(主要品目毎)・・・	30

特別分析トピック

「FAO 食料価格指数」

【利用上の注意】

表紙写真：アルゼンチン大豆圃場（サンタフェ州、2023 年 12 月 31 日）

干ばつの影響を受けた 2022 年とは打って変わって、降雨に恵まれ生育状況は良好

(概要編)

I 2024 年 1 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2023/24 年度の作況について、北半球では収穫が終了した一方、南米では大豆等が生育期を迎えている。

品目別にみると、1 月の米国農務省（USDA）の需給報告によれば、小麦については、前年度高温乾燥の影響を受けたインドや米国等で増産となるものの、前年度史上最高の豊作だった豪州等で減産となり、世界の生産量は前年度を下回る見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、2022 年 3 月に過去最高を更新した小麦の国際相場は侵攻時の水準を下回ったものの、ウクライナの穀物輸出に関する 4 者合意については 2023 年 7 月にロシアが離脱し停止。黒海の臨時回廊からの輸出や EU 経由での代替輸出の進捗も含め注視が必要。

とうもろこしについては、ブラジル等で減産見通しであるものの、米国や中国で史上最高の生産量となり、世界の生産量は前年度を上回る見通し。大豆については、米国で減産となるものの、現在生育期のアルゼンチンで増産見通しとなり、世界全体の生産量は前年度を上回る見通し。いずれの品目も、旺盛な消費により期末在庫は依然としてタイトな状況の中で、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数については、11 月の 120.3 から、12 月(最新値)は 118.5 と下落（参考：2022 年 12 月 131.8、2021 年 12 月 133.7、2020 年 12 月 108.6）。

海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近 5 カ年の平均値より約 1 割低い水準で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2024 年 1 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

米国農務省（USDA）の1月見通しによれば、2023/24年度の小麦は収穫が終了し、生産量は、前月から上方修正され2,340万トン（対前年度比9%増）。とうもろこしは収穫がほぼ終了し、生産量は前月から変更なく3,050万トン（同13%増）。輸出量は黒海沿岸を通る臨時回廊からの輸出が増加し、小麦は前月から上方修正され1,400万トン（同18%減）、とうもろこしは前月から変更なく2,100万トン（同23%減）（参考1）。

一方、ウクライナ農業政策食料省の2023年12月8日時点の予測によると、2023/24年度の穀物・油糧種子の生産量は天候に恵まれ8,130万トンと、10月時点の7,910万トンから上方修正された。ただ、ロシア侵攻以前において過去最高だった2021/22年度（1億600万トン）と比較すると23%減。

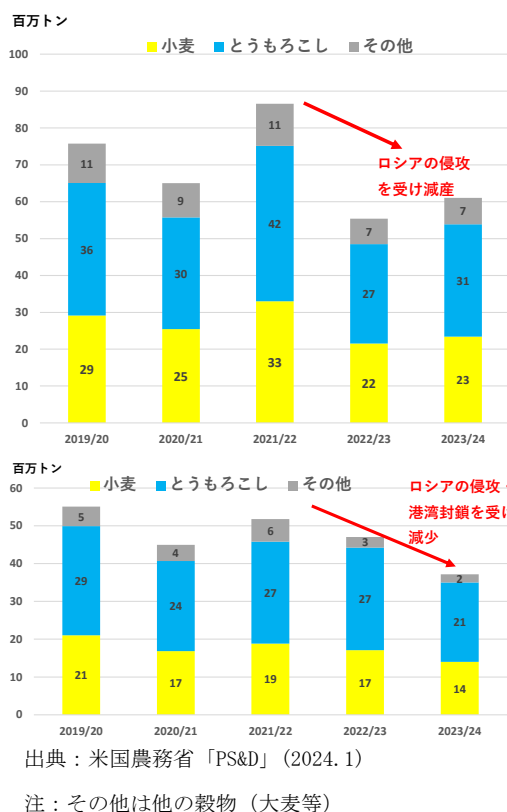
ウクライナ農業政策食料省によれば、2024年1月11日時点で小麦は収穫が終了し、2,248万トンを収穫済み。とうもろこしは収穫終盤で同日時点で2,837万トンを収穫済。

黒海穀物イニシアティブ停止後の動向（2023年7月にロシア離脱で停止）

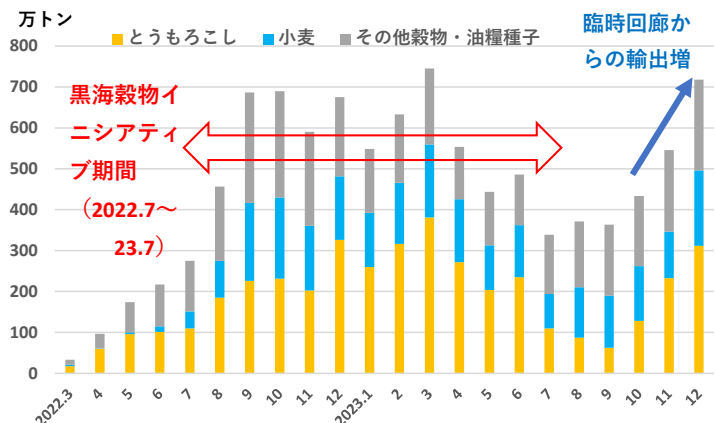
2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（黒海穀物イニシアティブ）により、これまで穀物等3,283万トンが輸出された。しかし、2023年7月17日にロシアの離脱で履行が停止され、その後、再開の目途は依然として立っていない。

一方、代替輸出ルートとして、臨時回廊からの輸出や、運河等を利用しルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出が行われている。その他のルートについても港湾整備等が開始されているが、内陸の輸送コストが高い等の課題もある。前年10月以降輸出量は伸びているが、ロシアの侵攻や中東情勢の影響等引き続き注視が必要。

（参考1）小麦ととうもろこしの生産量(上)、輸出量(下)の推移（年度）



（参考2）ウクライナの輸出量の推移（月毎）（2022.8～23.12）



1 ウクライナ：臨時回廊からの輸出が増加

2022年7月22日に合意した「黒海穀物イニシアティブ」は、2023年7月17日にロシアの離脱により停止し、2024年1月現在、ロシアの復帰に向けた進展はない。

このため、ウクライナは、ルーマニアとの国境に面したドナウ川沿いの港からの出荷や、EU 経由の陸路等による代替輸出ルートの拡充を試みてきた。ロシアの攻撃がドナウ川沿いの穀物輸出施設まで及んでいるほか、鉄道の軌道幅がウクライナと EU で異なる等のインフラの制約も課題となっている。このため、ウクライナは黒海沿岸を通る新ルートを IMO(国際海事機関)に通報し、前年8月以降「臨時回廊」の運用が開始された。

これらの代替ルートを利用した輸出に関し、港湾からの穀物や油糧種子の輸出量は7～9月に毎月230万トン前後で推移していたが、10月は313万トン、11月は430万トン、12月は614万トンと増加傾向にある。

EU 向け輸出については、EU による東欧5か国向けのウクライナ産穀物輸入禁止措置が前年9月15日以降解除されたが、トランジットを除き、ポーランド、ハンガリー及びスロバキアは独自の輸入規制を継続している。一方、ルーマニアは前年10月13日、在庫の積増しなどに限定しウクライナ産穀物の輸入を許可した。ウクライナ産穀物等の流入に関し、ポーランド、スロバキア及びハンガリーでは農業団体やトラック運転手の反発が強く、前年11月6日以降、国境検問所の封鎖等の抗議活動が断続的に行われ、本年1月にはルーマニアにも広がった。今のところ影響はトラック輸送に限られており、ウクライナの穀物輸出への影響は軽微。

東欧5か国の農相は1月15日には、欧州委員会に対し、ウクライナ産穀物への輸入関税の賦課を求めた。

※黒海穀物イニシアティブ停止後、代替輸出ルートとして、以下に掲げるものが実施又は検討。

- 1 臨時回廊 ウクライナのオデーサ港など黒海港湾から、ルーマニア、ブルガリア沖経由で輸出
- 2 トラックや鉄道輸送、ドナウ川の運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港経由で輸出
⇒ルーマニアのブカレストからウクライナ国境まで高速道路建設中。

コンスタンツァ港でウクライナ産農産物専用ふ頭の運用が3月に開始予定。

- 3 ポーランドを経由し、バルト海沿いのグダニスク港、ラトビアのリガ港等経由で輸出
⇒グダニスク港をウクライナ産穀物の輸出向け港湾として整備することに合意。
- 4 クロアチアを経由し、アドリア海から輸出



(出典:France Agrimer 他より)

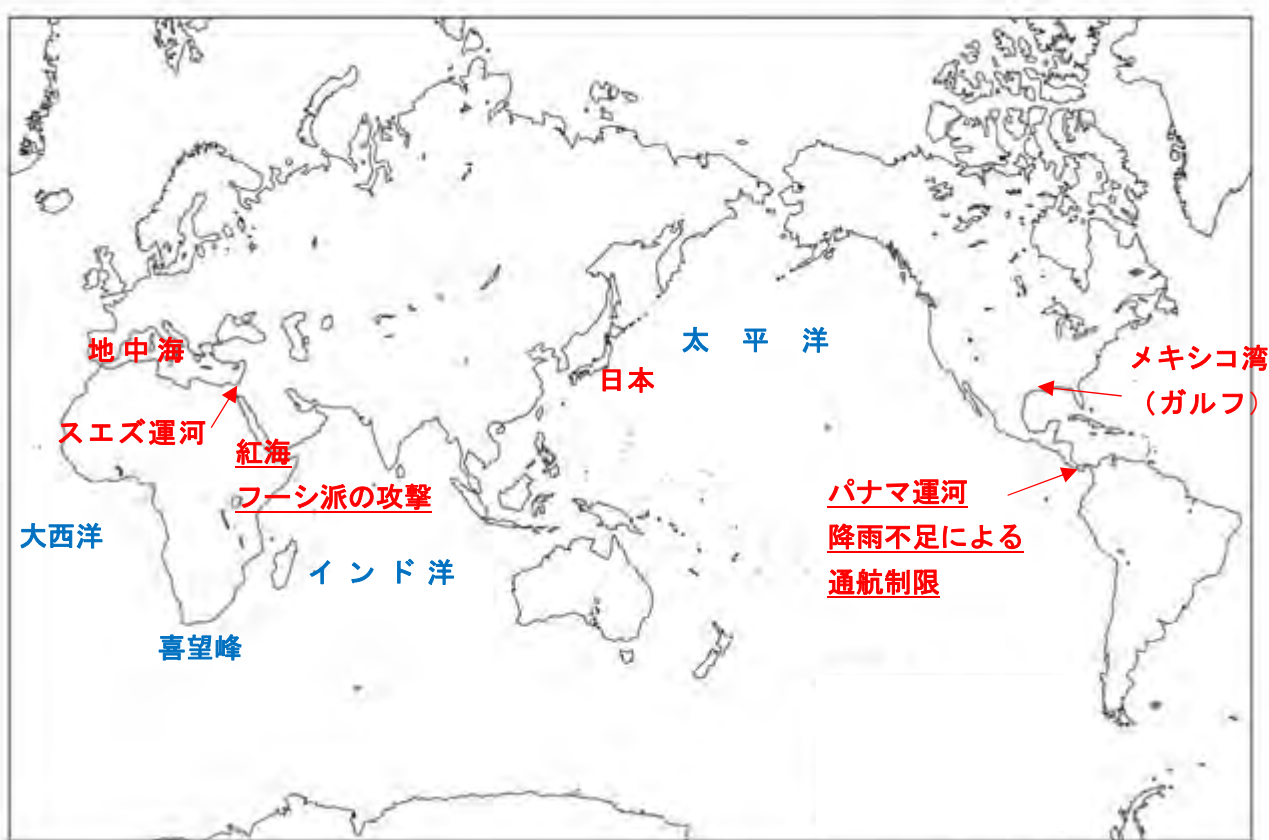
2 中東：紅海における船舶航行の安全確保が困難なため回避

報道等によれば、イスラエルとハマスの戦闘が継続する中、前年 12 月以降、イエメンの親イラン武装組織フーシ派が、地中海とインド洋をスエズ運河経由で結ぶ紅海を航行する商船を攻撃しており、運送各社は貨物輸送をアフリカ喜望峰経由等に迂回させている。

また、パナマ運河については、降雨不足による水位低下に伴う運航制限が、1 月以降 1 日当たり 20 隻から 24 隻に緩和されたものの、依然として制限を継続している。

我が国の穀物輸入に関し、小麦は主に米国・カナダ太平洋岸及び豪州から輸入しており、上記 2 つのルートを通過しない。また、ブラジル産穀物等の多くを喜望峰経由で輸入している。

一方、米国産のとうもろこし及び大豆は、通常、メキシコ湾（ガルフ）からパナマ運河経由で輸入している場合が多い中、最近のパナマ運河の水位低下により地中海→スエズ運河→紅海→インド洋経由のルートを選択したケースもあり、再度、喜望峰や米国西海岸経由に切り替えざる得なかったとみられる。紅海経由から喜望峰経由への切替えにより、中国から欧州への農産物輸出でトン当たり 100 ドル以上のコスト増となったり、航海日数にして 15 日以上延長となるとの報道もあり、その影響について注視が必要である。なお、1 月 19 日には、フーシ派の幹部から、中国やロシアの商船については安全を保障するとの発言があった模様。（2024 年 1 月 20 日時点）



3 米国：2023/24 年度のとうもろこし生産量は史上最高も、大豆は減産見通し

米国農務省の1月穀物等需給報告によると、とうもろこしの生産量は、前月見通しから単収が上方修正され、史上最高の11.1トン/ヘクタールとなり、史上最高の3億8,969万トン（前年度比12%増）となった。また、小麦の生産量は、前月見通しから変更なく4,931万トン（前年度比10%増）となった。一方、大豆の生産量は、イリノイ州等で単収が上方修正されたものの、収穫面積が前年度より減少することから1億1,334万トン（前年度2%減）となった。

国内需要については、とうもろこしは飼料用、エタノール向け需要増の見通しを受け、需要量が前年度比3%増の3億1,663万トン。また、小麦は飼料向け需要増見通しから前年度比3%増の3,141万トン。さらに、大豆はジェット燃料向け需要増加などにより前年度比5%増の6,597万トンの見通し。

輸出については、史上最高の生産量のとうもろこしは、輸出量も対前年度26%増の5,334万トン。他方で、小麦は増産にも関わらず輸出競争が厳しいため、対前年度4%減の1,973万トン。また、大豆も減産と国内需要が旺盛なため、12%減となる4,776万トンの見込み。

4 インドネシア：2022/23 年度及び 2023/24 年度のコメ減産に伴う備蓄回復のため輸入増

インドネシアでは、エルニーニョ現象の影響を受けて降雨不足となり、米国農務省によると、コメ生産量は、前年度比50万トン（1.5%）減の3,350万精米トンで、過去20年間で最低の水準となるとみられている。

これを受け、政府は、コメ輸入による国家備蓄の積増しを決定し、2023年末までに、タイ、ベトナム等から300万トン以上と推計されるコメを輸入した。また、ジョコ大統領は前年12月中旬に、2024年はタイから200万トン、輸出規制を実施しているインドとも交渉し100万トンの計300万トンを輸入すると公表した。ここ数年のコメ輸入量は40万トン程度であったが、2022/23-2023/24年度は、大幅に増加する見通し。

インドネシアによる輸入増を受け、2023年8月中旬以降、タイのコメ国際価格は上昇を続け、同年12月末には2008年10月以来、15年ぶりに650ドル/トンを超え、本年1月17日時点で682ドル/トンとなった。

インドネシア産米の2023年の減産率は、現時点では、2018年のエルニーニョ現象による減産率（前年度比7.6%減）と比較して小さいものの、当時と異なり、世界最大の輸出国であるインドがコメの輸出規制を実施していること等から、引き続き注視が必要である。

II 2024 年 1 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、12月末、240ドル/トン台後半で推移。1月に入り、上旬までは中国からの需要期待も、米国中西部の冬小麦地帯での降雨や降雪を受け、230ドル/トン台半ばから240ドル/トン台前半で上下した。その後、米国農務省需給報告で米国産の在庫量が上方修正されたことや、低調な輸出需要から220ドル/トン台後半に値を下げたものの、輸出需要の回復から値を上げ、1月中旬現在、230ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、12月末、180ドル/トン台半ばで推移。1月に入り、南米の降雨予想や米国の低調な週間輸出成約高から170ドル/トン台後半まで下落。その後、米国農務省需給報告に向けたポジション調整等で180ドル/トン台前半まで値を上げたものの、1月の米国農務省需給報告において米国産の生産量の上方修正により値を下げ、1月中旬現在、170ドル/トン台半ばで推移。

コメは、12月末、670ドル/トン台前半で推移。1月に入り、年始の休場等による低調な需要から一時660ドル/トン台前半まで値を下げたものの、インドネシアの追加輸入などASEAN諸国からの需要増加等から値を上げ、1月中旬現在、680ドル/トン台前半で推移。

大豆は、12月末、470ドル/トン台半ばで推移。1月に入り、ブラジルでの降雨等を受け450ドル/トン台前半までに値を下げた。その後、原油高に連動する形で値を上げたものの、1月の米国農務省需給報告における米国産の生産量の上方修正、ブラジルの降雨等から値を下げ、1月中旬現在、440ドル/トン台半ばで推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、コメはタイ国家貿易委員会価格

III 2023/24 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度より 2.3%増の 28.12 億トン。消費量は、前年度より 1.7%増の 28.11 億トンとなり、4年ぶりに生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は前年度より増加するものの、需要量との関係から、期末在庫率は前年度を下回り 27.7%となる見込み（資料2参照）。

生産量は、前年度より、小麦で減少も、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.12 億トンの見込み。

消費量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.10 億トンの見込み。

貿易量は、前年度より、とうもろこしで増加も、小麦、コメで減少し、穀物全体で増加し、5.01 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.79 億トンと前年度より増加、期末在庫率は、前年度より減少する見込み。

(注：数値は1月のUSDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

IV 2023/24 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.60 億トン。消費量は前年度を上回り 6.45 億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率は前年度を上回る 20.4%となる見込み。

(注：数値は1月のUSDA「Oilseeds: World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報：南米の穀物等の生産・輸出動向

南米は夏の生育期を迎えているが、2023年から継続しているエルニーニョ現象を受け、アルゼンチンは降雨に恵まれ前年度の干ばつから生産量が回復する一方、ブラジルでは乾燥による減産が見込まれている。アルゼンチンでは新政権が誕生し穀物輸出政策への影響が懸念されている。両国の生産・輸出に関する最新の動向をまとめた。

注：文中の「2023/24 年度」等は穀物年度で、ブラジルのとうもろこしは 2024 年 3 月から 2025 年 2 月。国や作物によって異なる(品目別需給編 P. 29 参照)。

1 ブラジルの穀物・大豆の生産・輸出動向

図1 ブラジルの穀物・油糧種子生産量の推移

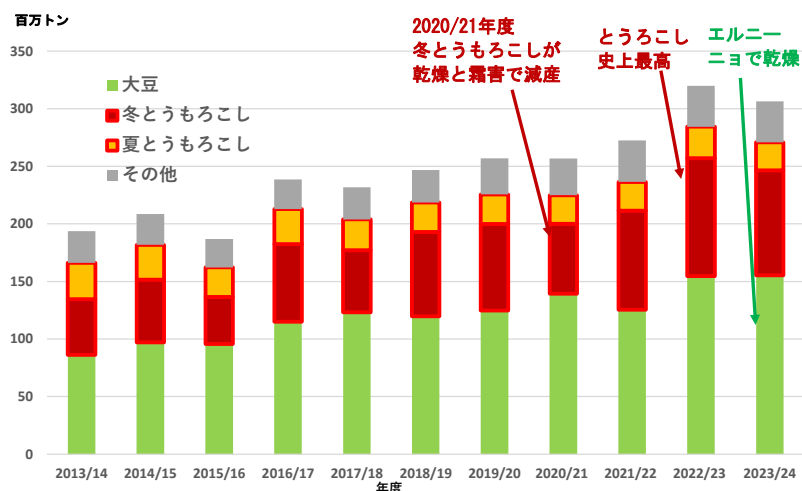
(1) 生産動向

ブラジル食料供給公社 (CONAB) が公表した穀物レポート (2024. 1. 10) によれば、2023/24 年度の穀物と油糧種子の生産見通しは、中部の高温と降雨不足、南部の降雨過多による作付け遅れ等から 12 月より 593 万トン下方修正され 3 億 637 万トン。

穀物・油糧種子の中で最大の生産量を占める大豆は、生育期を迎え、過去最高の前年度をわずかに上回る 1 億 5,527 万トン (対前年度 0.4%増) の見通し。な

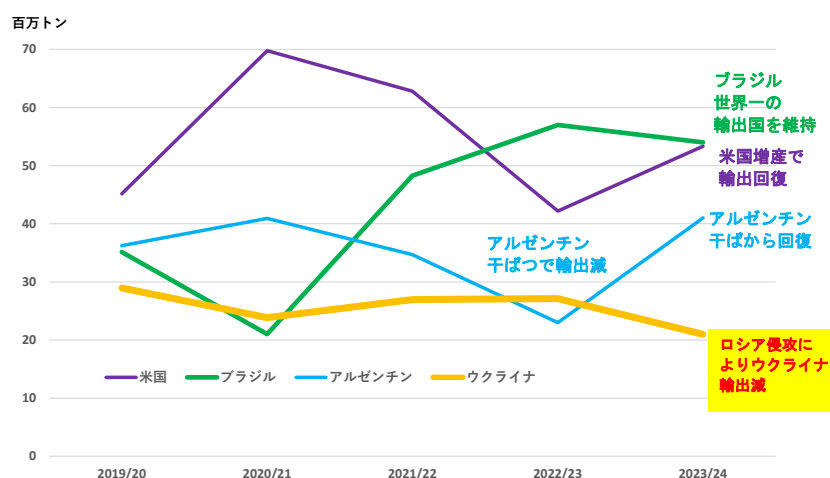
お、作付面積は前年より 2.7%増加も、エルニーニョ現象の影響による中西部の高温乾燥や南部の降雨過多を受けた生育期における作付け遅れから、単収は前月見通しから下方修正され、前年度を 2.2%下回る 3.4 トン/ヘクタールとなっている。

他方、とうもろこしは、生産量は 1 億 1,760 万トン (対前年度 11%減) の見通し。他の作物より収益性が悪いため作付面積が 5.6%減少するとともに、乾燥の影響により単収が 5.6%低下することが要因である。1 月見通しでは、大豆と同時期に作付けされる夏とうもろこしの生産量は、乾燥の影響を受け、単収が下方修正され、2,438 万トン (対前年度 11%減) となった。なお、大豆収穫後に作付けされる冬とうもろこしの生産量は 9,322 万トン (対前年度 11%減) に据え置かれている。



出典：ブラジル食料供給公社「GRAOS」(2024.1) による。

図2 世界のとうもろこしの主要輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2024.1) による。

(2) 輸出動向

2023/24 年度の大豆の輸出量は、米国農務省（USDA）の 1 月見通しによれば、豊作だった前年度からの持越しもあり、中国の需要も旺盛なことから 9,950 万トン（対前年度 4 % 増）となり、世界最大の輸出国を維持する見通し。

また、2023/24 年度のとうもろこしの輸出量は、USDA によれば、生産量の減少を受け

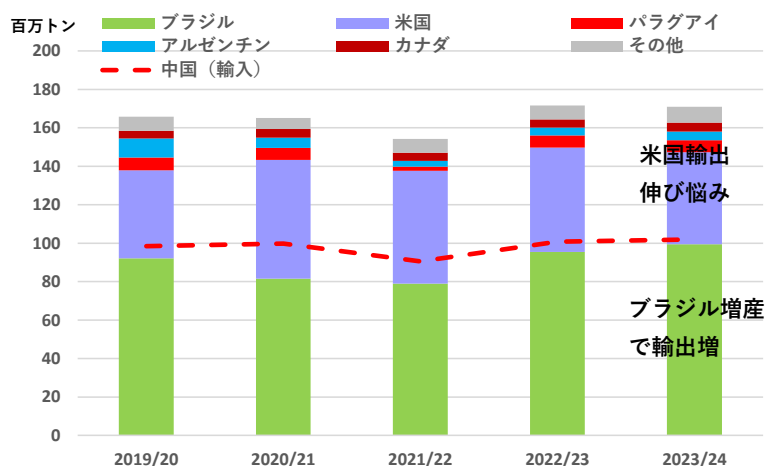
5,400 万トン（対前年度 5 % 減）と減少するも、史上

最高の豊作となった米国をわずかに上回り、世界最大の輸出国を維持する見通し。2022 年末から対中国向けとうもろこし輸出が開始されたことも輸出増加の背景にある。

ブラジルの穀物輸出は、従来、サントス港やパラナグア港など南部からが多かった。他方で、生産量の増加や、特にマツグロソ州等内陸部での大豆やとうもろこしの増産に伴い、アマゾン川の水運などを利用した北部のイタキ港などからの輸出も増えてきている。2019 年 11 月には、ブラジルを南北に貫く国道 163 号線が完全舗装され、2023 年 6 月には南北鉄道の開通などを受け北部からの輸出増が期待されてきた。ただ、2023 年後半にエルニーニョによる降雨不足を受けアマゾン川の水位が低下したことから、アマゾン川の水運を利用した輸送は減少し、南部からの輸出が増加しているとみられる。

主要輸出港のサントス港には、主要輸出先の中国が投資して、1 バースを所有し、今後更に 1 つ追加される見通しである。生産地においても、中国企業は穀物メジャーと同様、農家に種子等の貸付けや融資を行い、大豆等の農産物を引き取る契約を行うケースもあり、今後の動向には注視が必要である。

図 3 世界の大豆の主要輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2024.1）による。

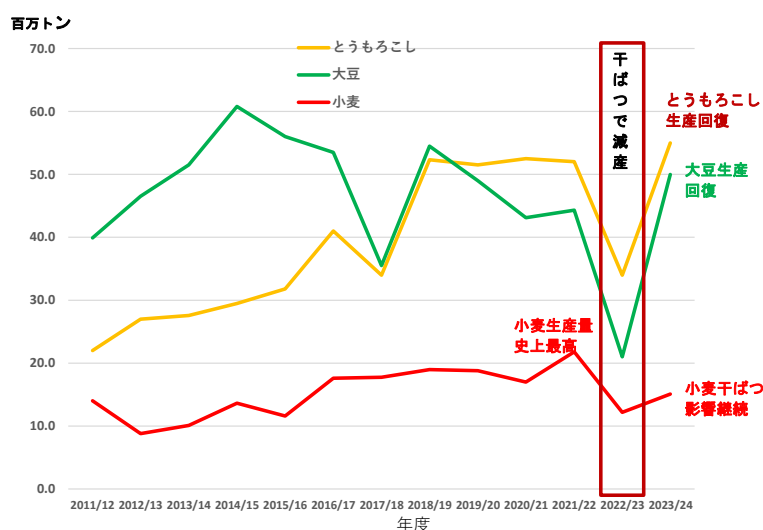
2 アルゼンチンの穀物・大豆の生産・輸出動向

(1) 生産動向

ラニーニャ現象による干ばつで大幅に減産となった 2022/23 年から一転し、2023/24 年度はエルニーニョ現象による降雨を受け増産が見込まれている。ブエノスアイレス穀物取引所週報

（2024.1.18）によれば、小麦は、収穫が終盤で、生産量は対前年度 24% 増の 1,510 万トンの見込み。ただ、生育期も乾燥傾向が残っていたことから過去 5 年平均でみると 15% 減となっている。

図 4 アルゼンチンの小麦、とうもろこし、大豆生産量の推移



出典：ブエノスアイレス穀物取引所週報による。

とうもろこしは、作付予定面積 710 万ヘクタールで作付進捗率が 93%と終盤を迎え生育期を迎えており、降雨に恵まれ、生産量は対前年度 62%増の 5,500 万トンの見込み。

大豆についても、作付予定面積 1,730 万ヘクタールのうち作付進捗率が 97%と終盤となり生育期を迎え、降雨に恵まれ、生産量は対前年度 138%増の 5,000 万トンの見込み。

(2) 輸出動向

輸出については、国家財政の補填のため主要農産物に関し輸出税が課せられており、小麦やとうもろこしは 12%、大豆は最大 33%、大豆油や油粕にも 31%の輸出税が課せられている。前年 12 月に就任したミレイ新政権では当初、輸出税の引下げの可能性が示唆されていたものの、12 月 12 日に経済相が発表した案では小麦等について 15%までの引上げが示された。大豆油や油かすも、大豆と同じ 33%に引き上げられる見通しである。ただし、本案については議会での承認手続等を今のところ経ておらず、今後の動向について注視が必要である。

輸出状況については、前年度は干ばつによる減産で大きく落ち込んだが、USDA によれば、2023/24 年度は回復が見込まれている。小麦は 1,000 万トン（対前年度 173%増）、とうもろこしは 4,100 万トン（対前年度 78%増）、大豆は 460 万トン（対前年度 10%増）の見込みである。なお、大豆の輸出が少ないのは、付加価値のついた大豆油や大豆油かすの輸出が主流となっていることが要因である。

**写真 アルゼンチンのとうもろこし、
降雨を受け順調に生育
(サンタフェ州、前年 12 月 31 日撮影)**



3 世界の穀物・大豆の貿易に与える影響

2023/24 年度の南米の穀物・大豆生産に関しては、ブラジルは乾燥で減産見通しになっていたが、12 月以降降雨があり、乾燥の影響が緩和するとみられている。一方、アルゼンチンは豊作で増産見通しとなっている。

穀物・大豆の輸出に関しては、主要輸出先の中国の需要動向の影響も受ける。1 月 17 日に公表された国家統計局の 2023 年の公表データによると、中国の人口は 208 万人減と前年に続き減少したが、経済成長率は 5.2%（前年 3.0%）となり、豚肉を始めとする食肉生産量は前年を 4.5%上回る 9,641 万トンとなった。中国の足元の穀物・油糧種子需要は堅調であるとみられる。他方で、中国国内の穀物や油糧種子の生産量が史上最高を更新してもなお需要量を賄いきれていないため、輸入による安定的な調達が必要となっている。

2022 年 2 月のロシアによるウクライナ侵攻を受けた世界の穀物需給への影響が継続する中、2023 年 10 月 7 日のイスラム組織ハマスとイスラエルとの紛争とこれに関連した 12 月以降のフーシ派による紅海での商船への攻撃等の緊迫した中東情勢に加え、前年から続くエルニーニョ現象の影響を受け、東南アジアや南半球のブラジル、豪州での穀物生産への影響懸念、パナマ運河の水位低下など、穀物貿易に影響を与える要素が多い。

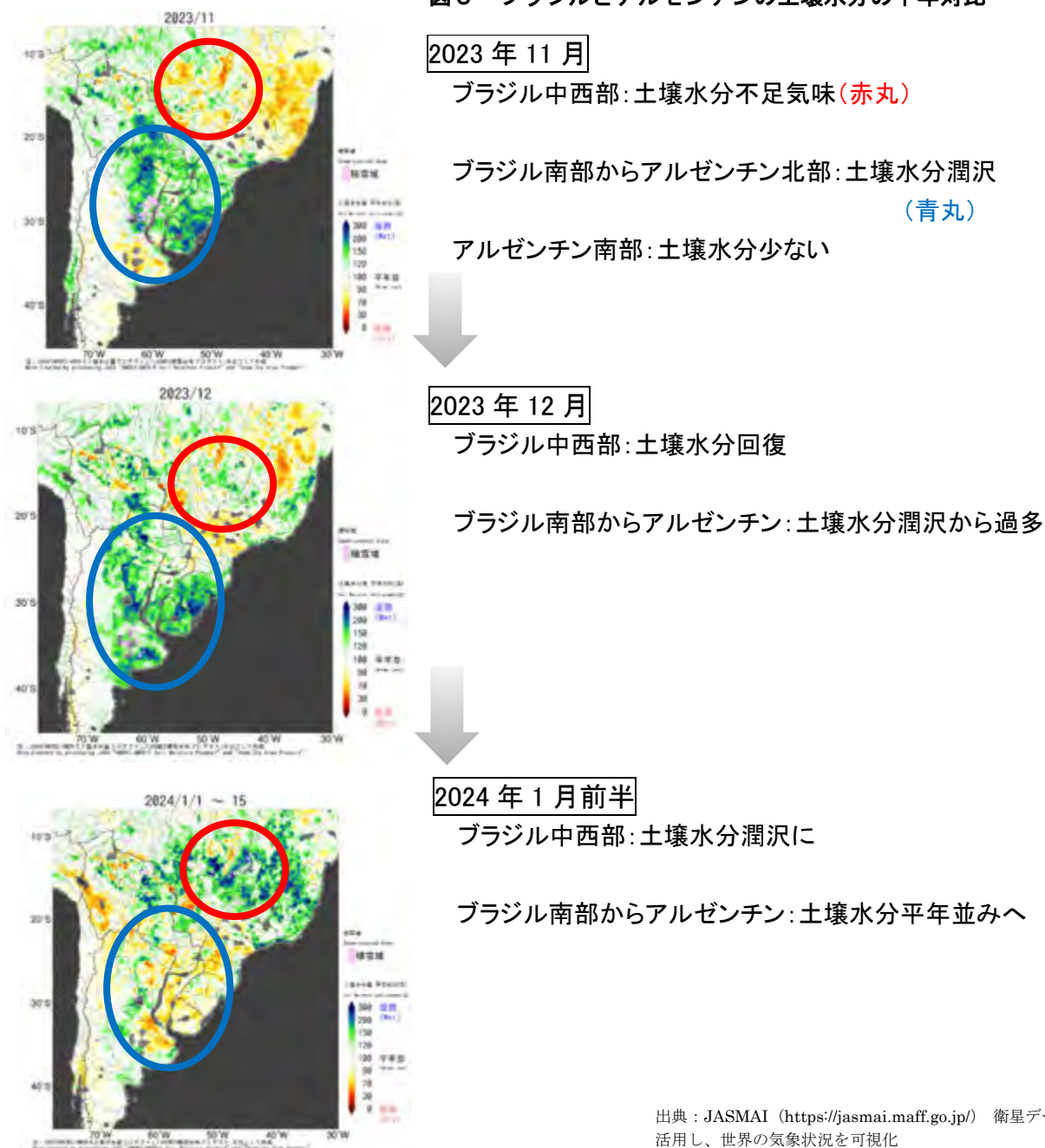
穀物のシカゴ相場は、前年 10 月以降のブラジル中西部での乾燥懸念や中国の米国産小麦買付けなどで一時上昇したが、南米での 12 月以降の降雨によるブラジルの乾燥影響の緩和期待や、アルゼンチンの豊作見通しがあったことに加え、本年 1 月の米国農務省需給報告で米国産とうもろこしは史上最高の豊作、大豆も減産ながら生産量が上方修正されたこと等か

ら、落ち着いた動きをみせている。

一方、パナマ運河の水位低下については、本年4月頃の雨季開始以降まで継続するのではないかとの見方があるほか、スエズ運河・紅海経由のルートではフーシ派による商船攻撃で安全航行への懸念もあることから、南アフリカの喜望峰経由など他ルートへの迂回による航海日数の増加による輸送コストの増加や遅延なども想定されている。また、今後、中東情勢が悪化し、その影響を受け原油価格が高騰した場合、バイオ燃料向け穀物・大豆等への需要が増加し、穀物相場へ影響する可能性もある。

こうしたパナマ運河の水位低下やフーシ派による紅海での商船攻撃を受けた世界的な航行ルートの変更はあるものの、南米産穀物・大豆アジア向け輸出に関しては、従来からパナマ運河や紅海を経由せず、喜望峰経由での輸出が多くを占めているため、大きな影響が出ることは今のところ考えにくい。こうした中で輸出上の支障が比較的小さい南米産の穀物・大豆に対し、中国や東南アジア諸国等の世界の穀物等需要が集中する可能性も十分に考えられることから、今後も南米の穀物生産・輸出動向に注視が必要である。

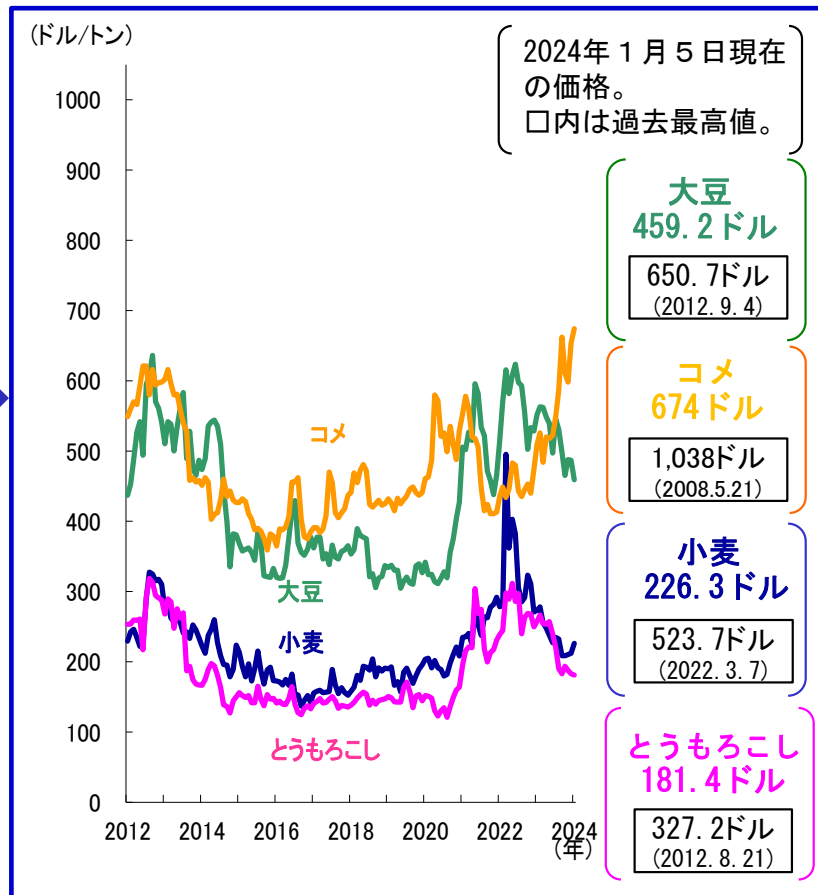
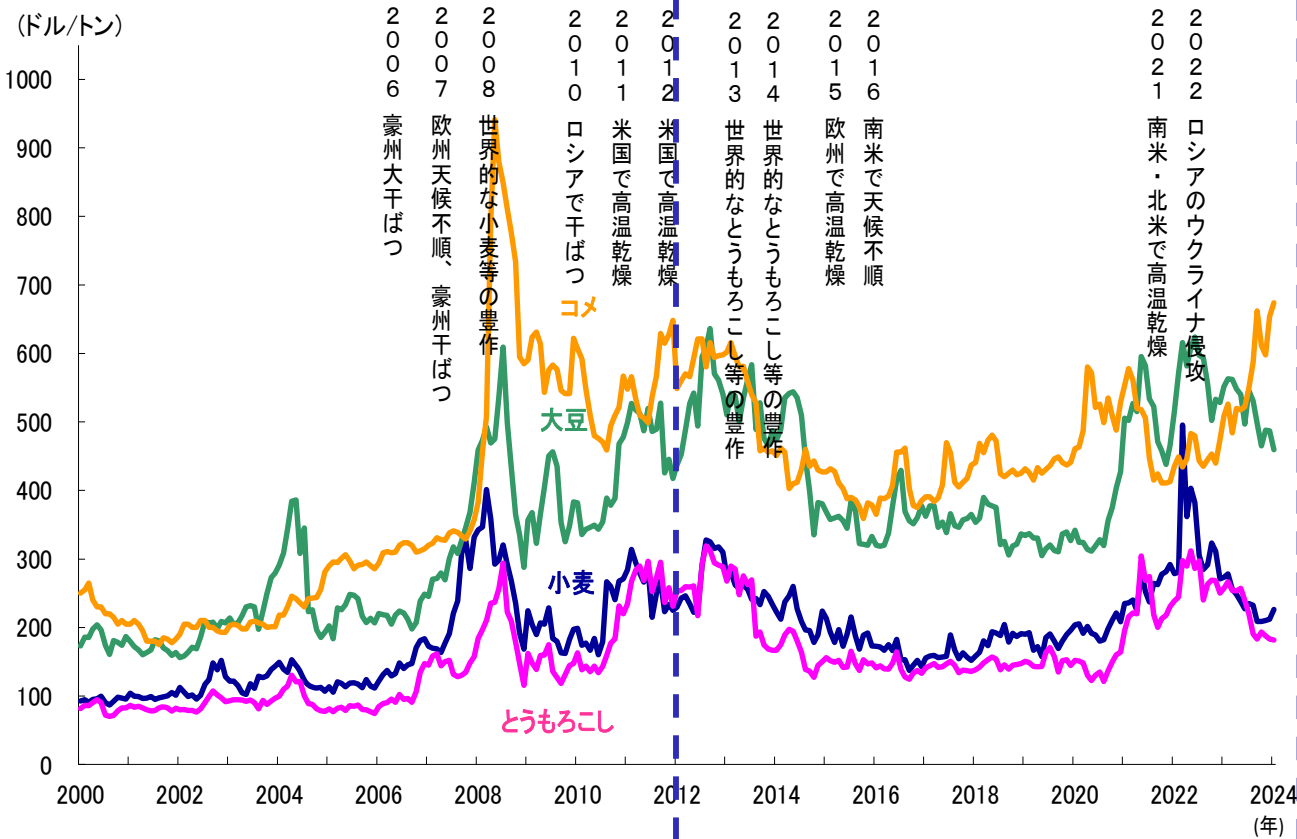
図5 ブラジルとアルゼンチンの土壌水分の平年対比



資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、4者協議による黒海からの一時的な輸出再開などもあり侵攻前の水準まで低下。一方で、とうもろこし、大豆はウクライナ侵攻時の高騰から低下も、南米の乾燥等から侵攻前と比較し依然として高水準。コメは、2013年以降低下で推移も、2022年9月以降、インドの輸出規制導入と強化、インドネシアのエルニーニョによる減産を受けた需要増等から上昇。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



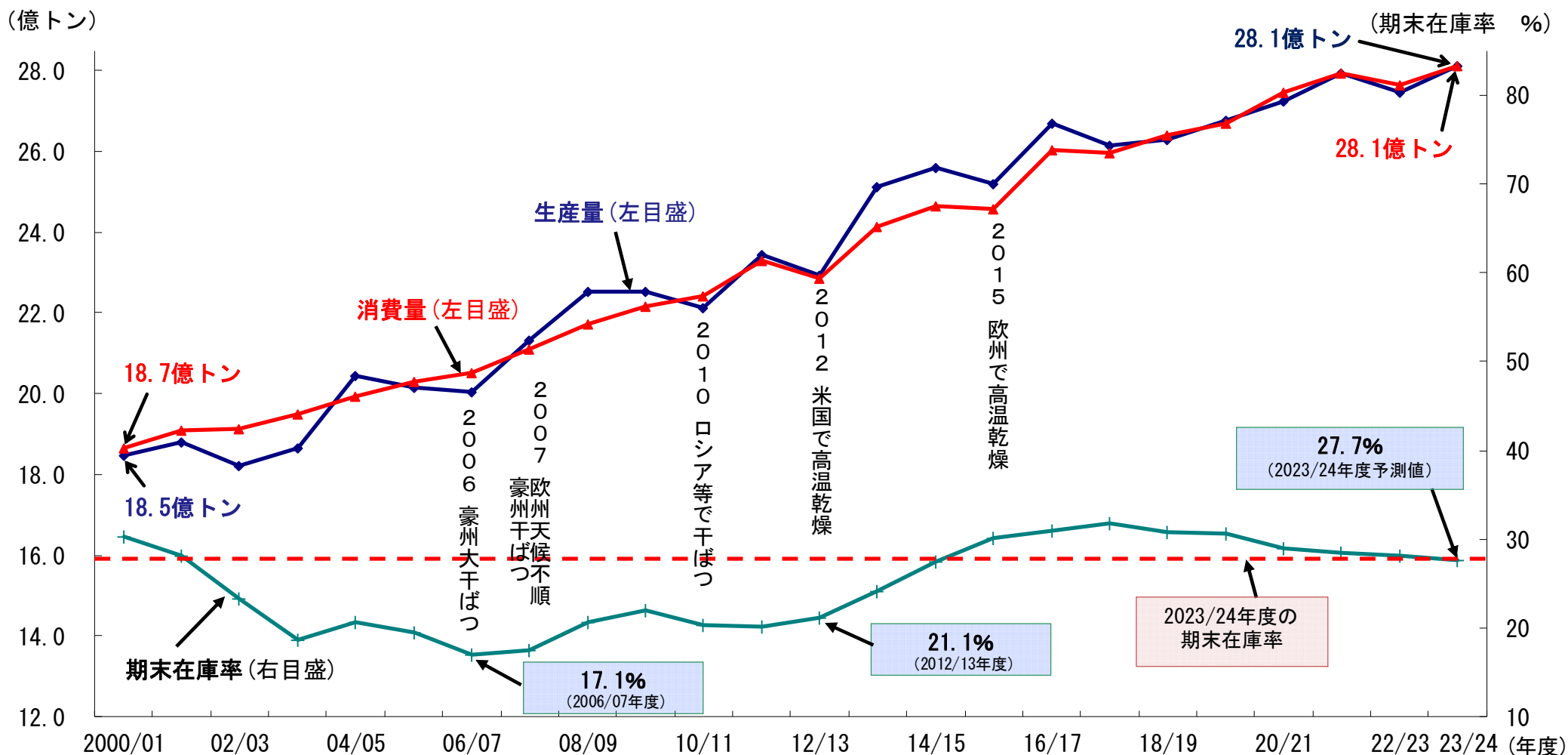
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。
なお、コメ価格は2023年12月27日の価格。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2023/24年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2023/24年度の期末在庫率は、生産量が消費量を上回ったものの、消費量が増加したことから、前年度より減少し、27.7%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.1%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

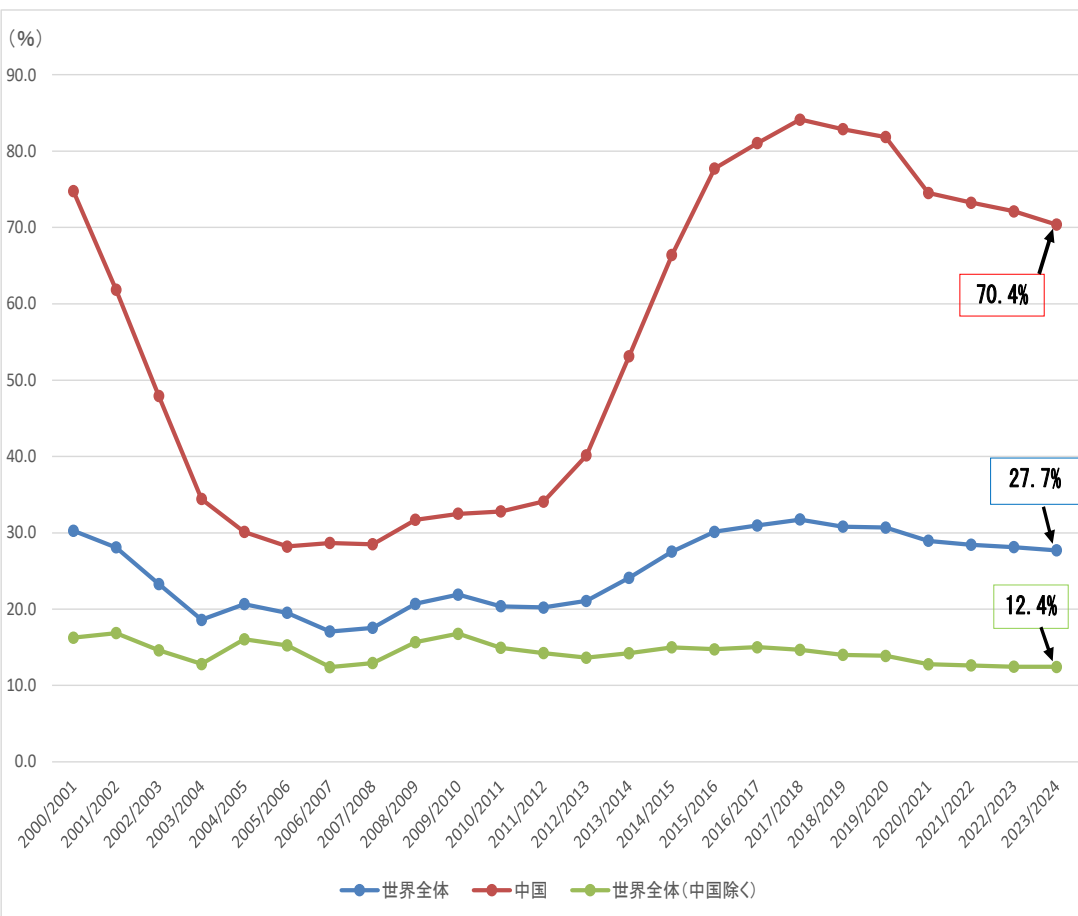


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(January 2024)、「PS&D」

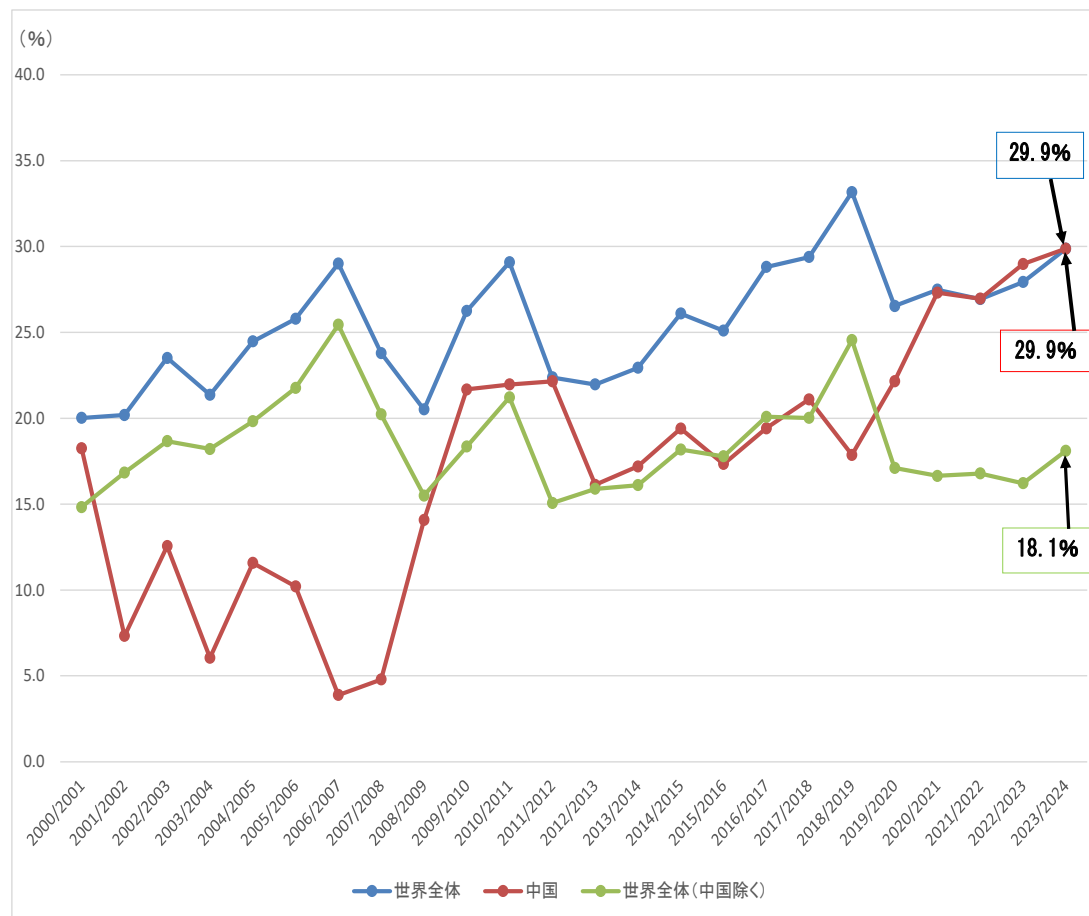
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(January 12, 2024)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

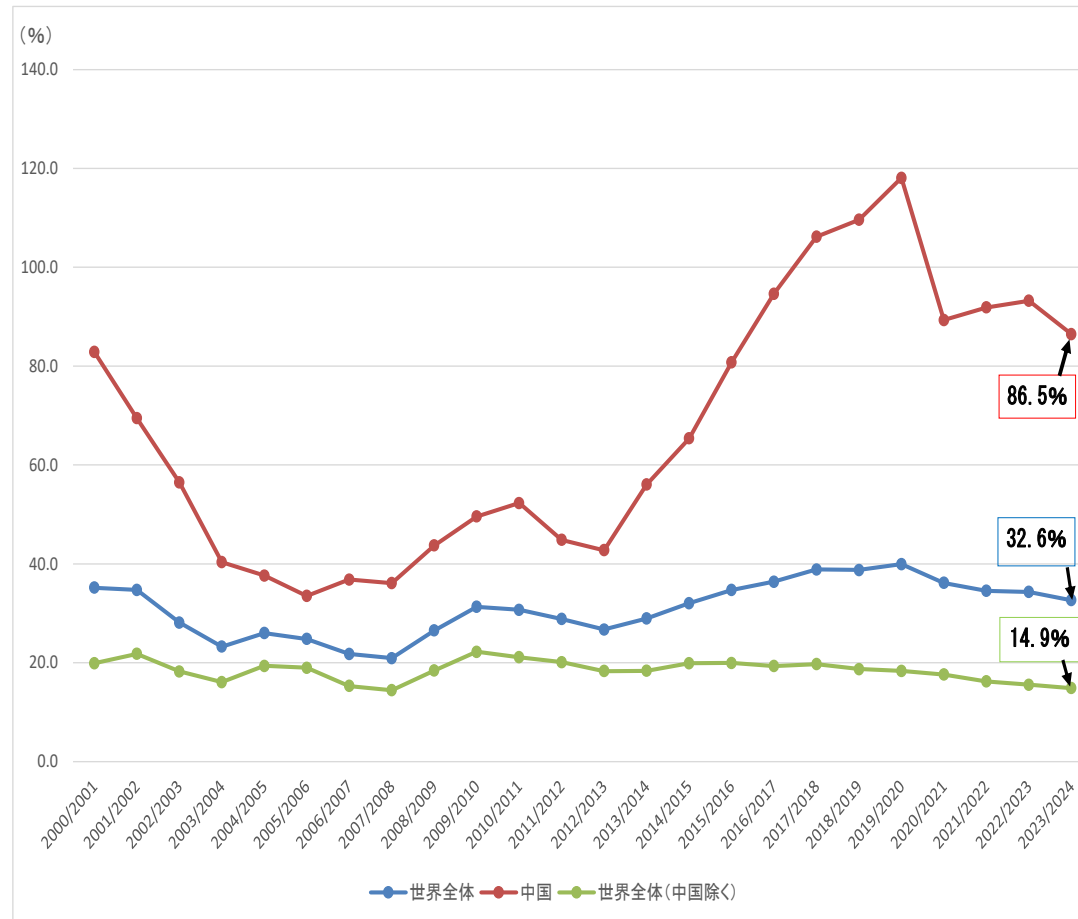
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

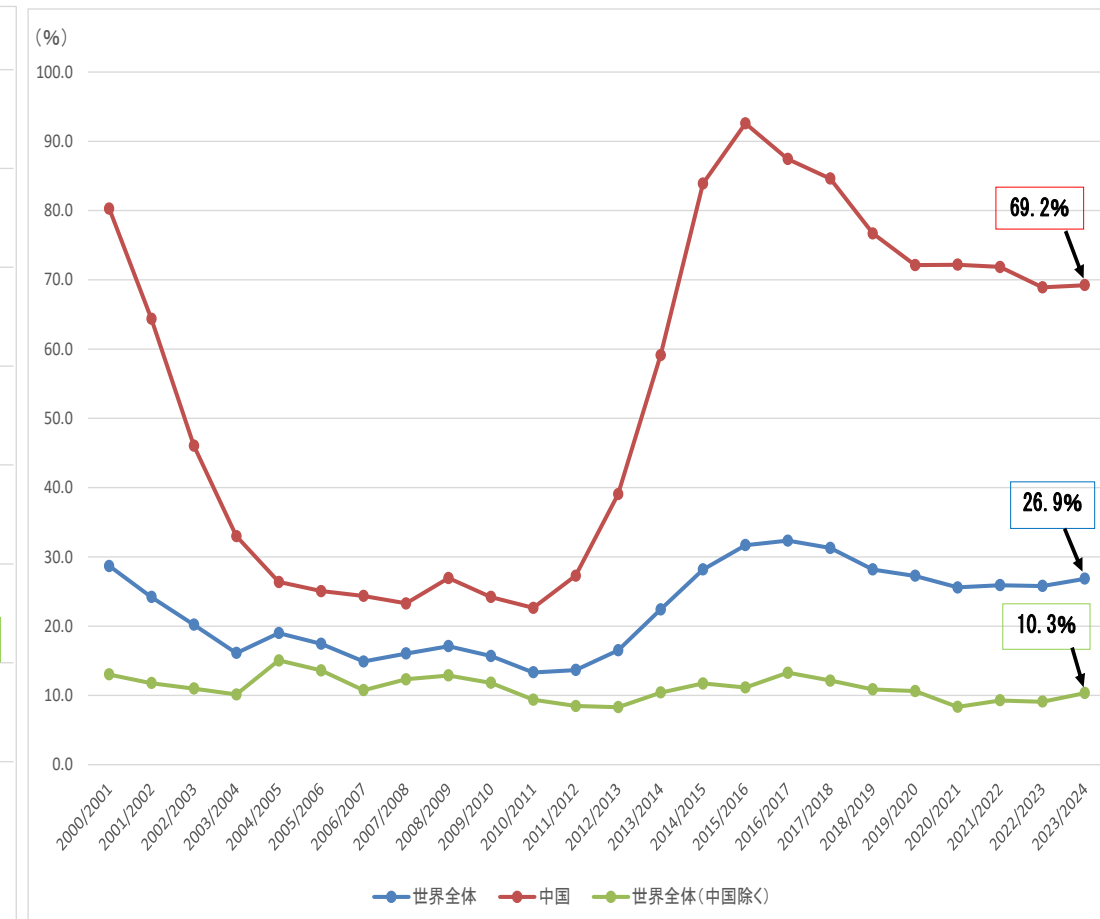
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(January 12, 2024)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

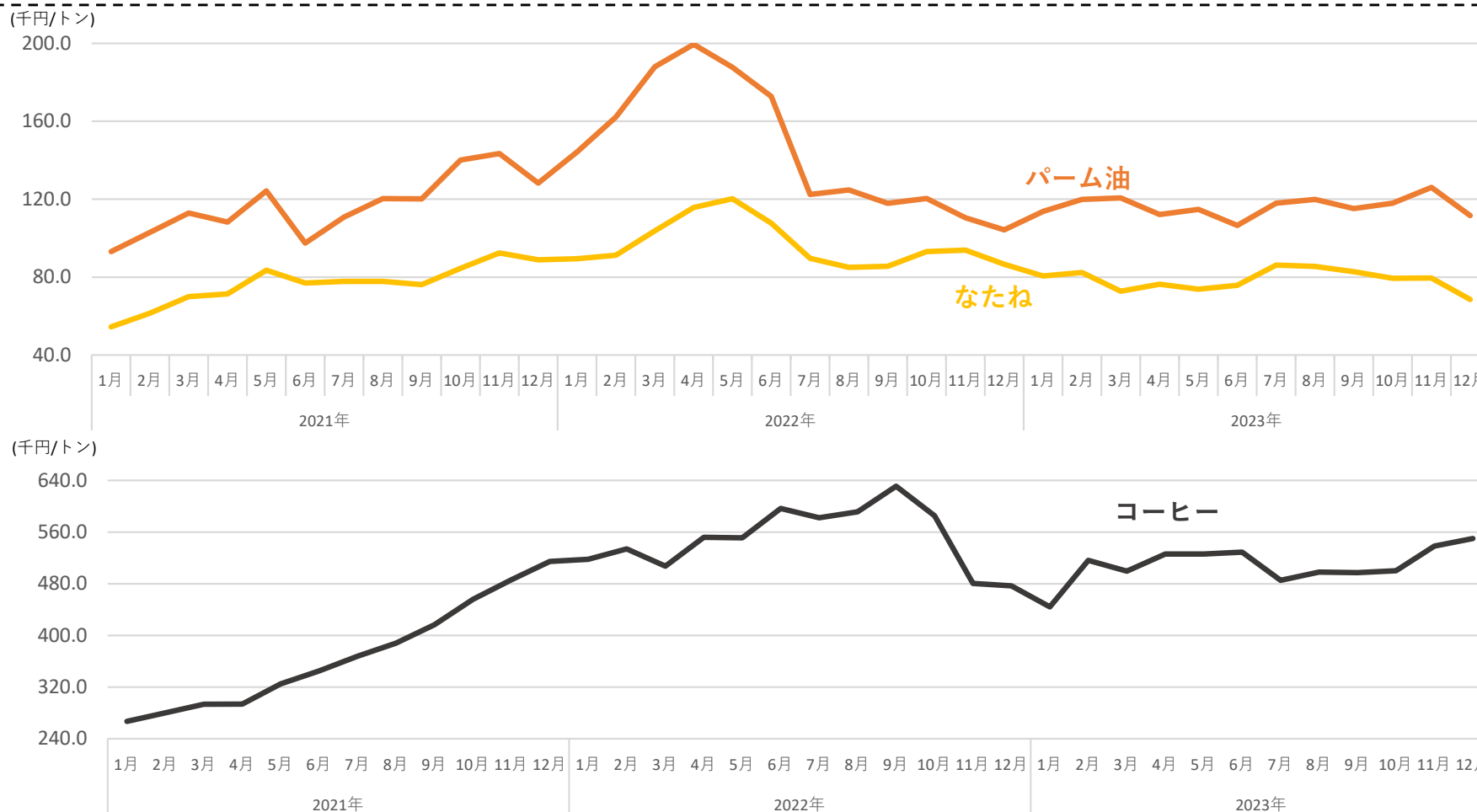
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などが市場価格上昇の要因であった。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでは**2021年**に熱波による減産があったが、**2022年**は回復基調から平年並みの収量に近づいた。また、パーム油について、インドネシアの輸出禁止措置（**2022年5月23日**解除）があったが、マレーシアの生産量の増加によって供給不足の懸念が払拭された。いずれも**2022年**の高値からは落ち着きが見られるものの、依然高止まりしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面では、従来はアメリカやヨーロッパが消費の中心であったが、近年は中国やインドといった人口の多い国での消費の拡大等により、コーヒー消費量が増加したことを受け市場価格が上昇した。その後、消費地のインフレによる景況感の悪化やブラジルでの生産の回復によって市場価格は下降したが、高値が続いている。



2024年1月19日現在
□内は2020年4月以降
の最高値。

パーム油
116.1 千円/トン
199.5千円/トン
(2022.4)

なたね
68.6千円/トン
120.3千円/トン
(2022.5)

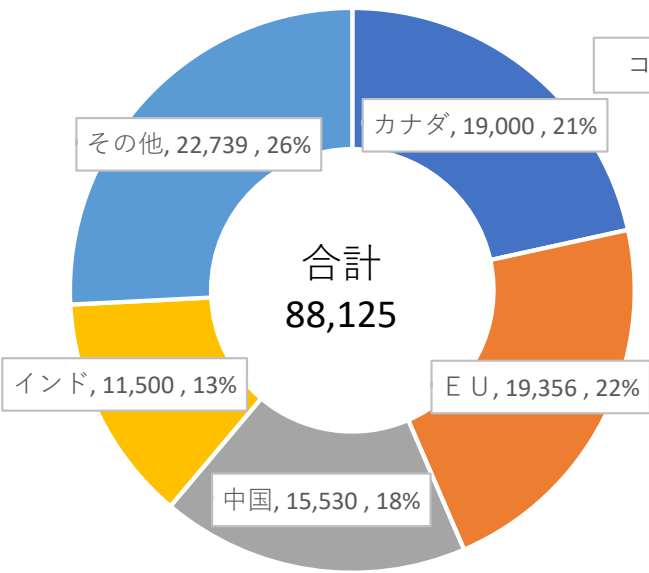
コーヒー
550.2千円/トン
631.1千円/トン
(2022.9)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィネベグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4－2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

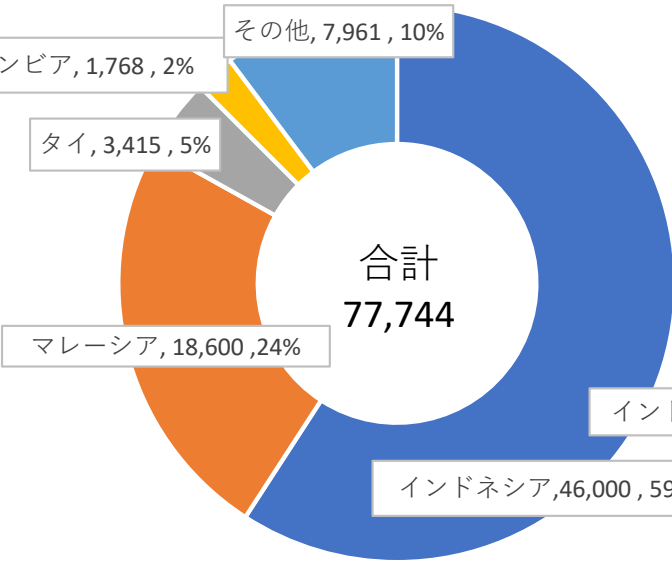
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2022/23）
（単位：千トン）



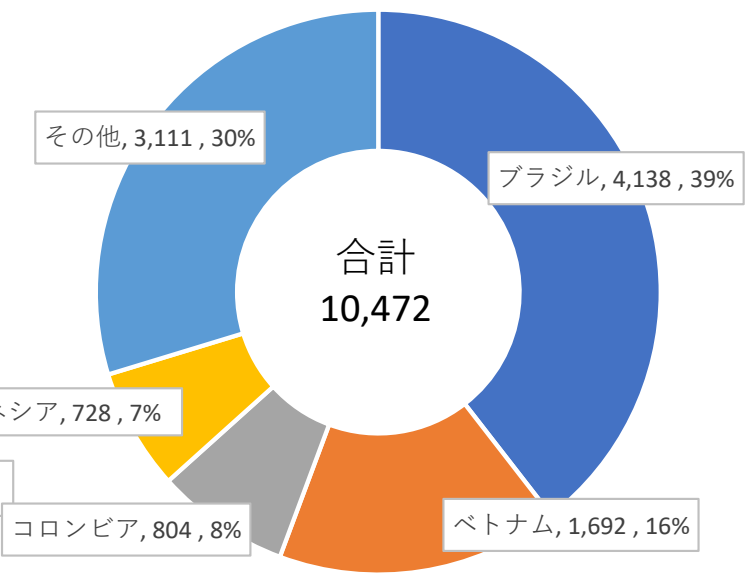
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2022/23）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2022年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	1,248	59.4%
オーストラリア	853	40.6%
その他	0	0.0%
合計	2,101	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	500	78.7%
インドネシア	135	21.3%
その他	0	0.0%
合計	635	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	112	28.7%
ベトナム	106	27.2%
コロンビア	47	12.1%
その他	125	32.1%
合計	390	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料 4－3 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2021年												2022年												2023年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
なたね	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1	93.8	86.6	80.6	82.4	72.8	76.4	73.8	75.9	86.2	85.5	82.8	79.4	79.6	68.6
前月比	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9	100.8	92.3	93.1	102.2	88.3	105.0	96.7	102.7	113.6	99.2	96.9	95.9	100.2	86.1
前年同月比	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1	101.5	97.5	90.2	90.4	70.1	66.0	61.4	70.5	96.1	100.6	96.9	85.3	84.8	79.2

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2021年												2022年												2023年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
パーム油	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4	110.4	104.2	113.7	119.9	120.6	112.1	114.7	106.5	117.9	119.8	115.1	118.0	126.1	111.6
前月比	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1	91.7	94.4	109.1	105.4	100.7	93.0	102.3	92.9	110.7	101.6	96.1	102.4	106.9	88.5
前年同月比	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9	77.0	81.3	78.8	73.9	64.2	56.2	61.1	61.7	96.3	96.1	97.7	98.0	114.2	107.1

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 マレーシヤパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③コーヒー

単位（千円/トン）

	2021年												2022年												2023年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
コーヒ	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	477.0	444.4	516.3	499.6	526.2	526.1	529.1	485.5	498.1	497.4	500.3	538.5	550.2
前月比	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	99.2	93.2	116.2	96.8	105.3	100.0	100.6	91.8	102.6	99.9	100.6	107.6	102.2
前年同月比	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	92.7	85.8	96.7	98.5	95.3	95.4	88.7	83.4	84.2	78.8	85.5	112.0	115.4

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出
2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和5年12月の国内の加工食品の消費者物価指数は111.0～154.7（前年同月比で-5.7%～17.0%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和5年7月～令和5年12月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	7月	8月	9月	10月	11月	12月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	100.2	101.1	100.0	99.2	110.3	121.3	122.9	122.5	122.7	123.2	122.7	7.5%
即席めん	95.3	98.5	100.0	100.1	107.6	125.5	125.8	123.3	125.7	122.9	122.2	9.5%
豆腐	98.8	99.1	100.0	101.3	105.3	115.1	115.9	116.3	117.2	117.0	117.2	6.7%
食用油 (キャノーラ油)	101.5	100.9	100.0	106.9	144.4	160.3	158.8	157.7	156.6	154.8	153.2	-5.7%
みそ	97.4	99.1	100.0	99.3	101.3	108.0	107.5	108.8	110.8	111.4	111.0	6.3%
マヨネーズ	100.8	100.7	100.0	105.6	125.6	153.9	155.7	154.7	154.2	153.9	154.7	12.6%
チーズ	100.9	101.3	100.0	98.7	107.5	134.7	136.2	135.0	135.2	135.0	131.3	11.8%
バター	99.5	99.9	100.0	99.9	99.2	112.3	112.2	111.5	111.6	111.3	115.5	17.0%
生鮮食品を 除く食料	97.9	99.0	100.0	100.2	104.1	113.4	113.8	114.3	114.8	115.2	115.1	6.2%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】 食品価格動向調査（農林水産省） （令和5年7月～令和6年1月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5						R6		
品目	平均	平均	平均	平均	平均	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.9	101.3	100.0	98.6	107.8	116.5	118.6	118.2	118.0	117.1	118.6	117.6	-0.8%	5.5%
即席めん	92.4	97.9	100.0	99.2	105.6	122.8	122.8	121.6	122.2	122.2	121.6	119.8	-1.5%	7.7%
豆腐	100.1	100.9	100.0	100.6	103.7	114.6	114.6	114.1	114.6	114.1	114.6	114.6	0.0%	5.6%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	103.5	100.0	104.1	140.7	160.0	158.7	158.7	156.8	155.5	153.3	153.3	0.0%	-5.5%
みそ	96.6	100.4	100.0	99.2	100.1	105.0	105.2	105.6	109.4	110.0	110.6	110.2	-0.4%	7.7%
マヨネーズ	97.9	103.1	100.0	102.2	117.7	144.1	143.7	144.1	144.8	143.7	143.7	144.1	0.3%	11.2%
チーズ	98.6	100.9	100.0	98.1	105.7	130.3	130.7	130.7	130.3	130.7	122.3	125.8	2.9%	7.6%
バター	99.0	99.5	100.0	99.8	99.1	111.4	111.4	110.7	111.4	110.5	115.0	118.3	2.9%	20.0%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2024年2月号（1月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）23年12月のフィードロット飼養頭数、3カ月連続で前年を上回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003079.html

（豪州）と畜頭数および牛肉輸出量は高水準で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003080.html

（ブラジル）2023年の肥育牛価格は前年を下回る水準で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003081.html

◆豚肉

（米国）23年1～10月の豚肉輸出量は前年同期比6.9%増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003082.html

（メキシコ）24年の豚肉生産量、輸出量ともに前年をわずかに上回る見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003083.html

（EU）豚肉生産量は引き続き減少、枝肉価格は下落するも高値で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003084.html

（中国）豚と畜頭数は増加、豚肉価格は安値で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003085.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（EU）23年10月の生乳出荷量は減少、乳価は上向く

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003087.html

（豪州）生乳生産量は前年同期をわずかに上回る水準で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003088.html

（NZ）GDT価格が続伸、23/24年度生産者支払乳価は引き上げ

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003089.html

※GDT価格…グローバルデイリートレード価格

◆飼料穀物

（世界：トウモロコシ）世界のトウモロコシ生産量は上方修正、引き続き過去最大の生産見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003090.html

（世界：大豆）世界の大豆期末在庫は下方修正も、引き続き前年度を上回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003091.html

（米国）米国のトウモロコシ生産量は過去最大、輸出量も前年度から大幅増の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003092.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

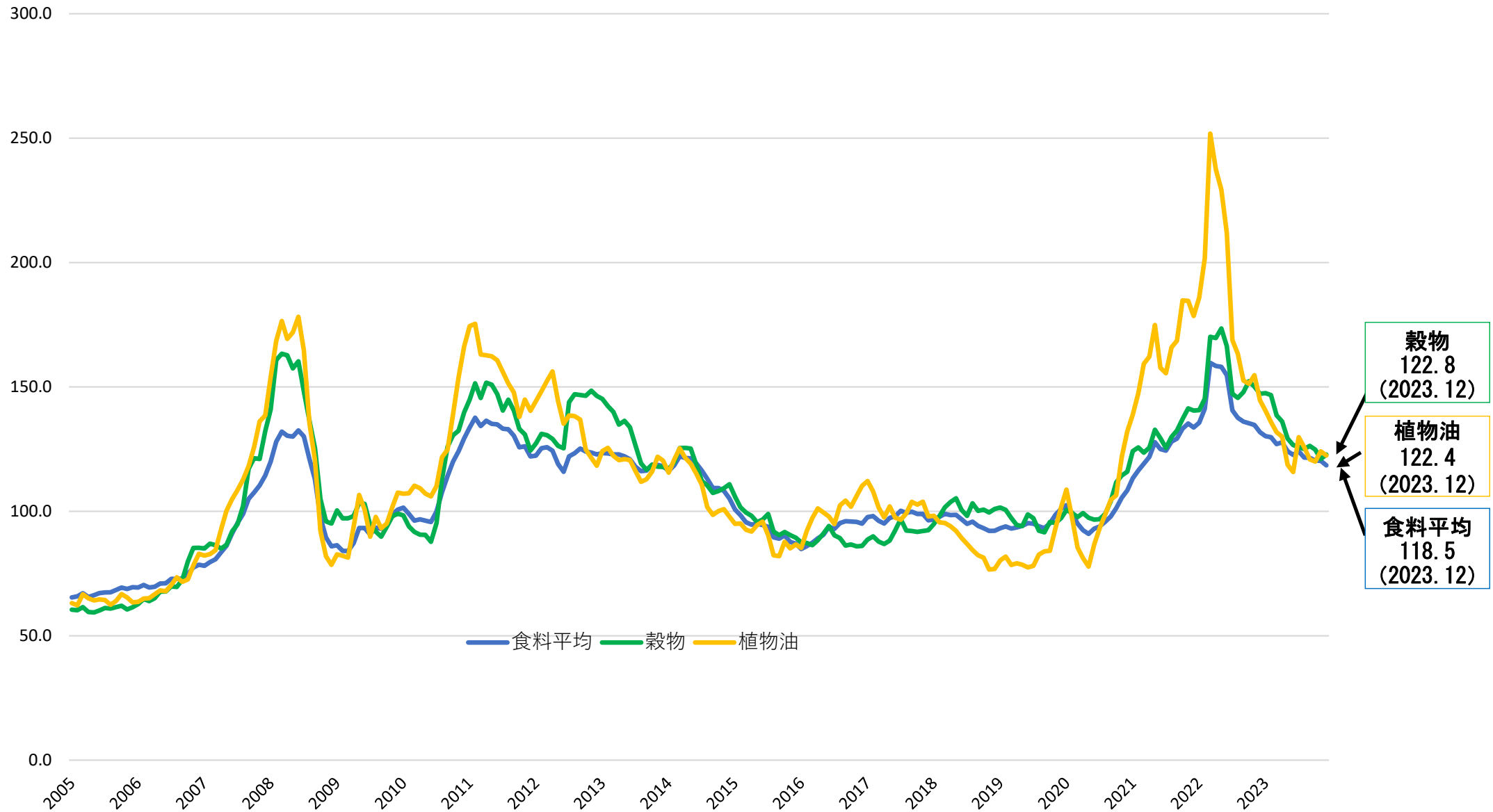
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003093.html

（ブラジル）エルニーニョ現象による異常気象がトウモロコシおよび大豆生産に影響

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003112.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2024.1)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

【今月のコラム】

インドの食料事情（３）：食文化（インド食）①

1 はじめに

前回・前々回では、インドの基本的な農業構造と農業政策の概要を紹介しました。今回は、広大な農地、多様な気候から生み出された農産物がどのように消費されているのか、という観点からインドを紹介します。

「インドといえばカレーだろう」という先入観があるかと思いますが、インドの食・食文化は多様であり、歴史・社会情勢とともに変化してきています。香辛料栽培の適地であり、香辛料交易で繁栄してきた土地であり、スパイスが多用されていることは事実ですが、香辛料が多用されているだけで「カレー」であると定義づけるわけでもなく、日本人の知っている「カレー」がそこにあるのか、というお題だけでも、インドの食談義が盛り上がる論点かと思っています。こうした点については、昨年出版された笠井亮平氏の『インドの食卓—そこに「カレー」はない—』において解説されておりますので、是非ご覧ください。

以下では、筆者が特に関心を持ったという観点から、インドの食文化と、インドにおいて日本食・食文化がどのように受け入れられているかについて紹介します。

2 インドの食文化

（１）食と宗教

インドの食事情を考察する際、宗教事情に触れておく必要があります。2011年のセンサスでは、インド人口の8割がヒンドゥー教であり、次いでイスラム教（14.3%）、キリスト教（2.3%）、シク教（1.7%）、仏教（0.7%）、ジャイナ教（0.3%）となります。現在の人口14億人に当てはめるとヒンドゥー教11.4億人、イスラム教2億人、キリスト教33百万人、シク教25百万人、仏教10百万人、ジャイナ教5百万人となっています。インド人のイメージとして「ターバンを巻いた男性」を連想する人も多いかもしれませんが、そのイメージはシク教徒の男性であり、上記の宗教人口のとおり、決してインドを代表するものではありません。

①ヒンドゥー教と食

まず、人口のほとんどを占めるヒンドゥー教について、日本でもよく知られている特徴としては「牛（コブウシ）を神聖視し、牛を殺さない（⇒牛肉を食さない）」ということかと思っています。実際、このヒンドゥー教の影響もあり、インドにおいて、牛肉製品（エキス類を含むものを含む）は商工省によって禁輸品に指定されています。

また、ヒンドゥー教徒の方は多くはベジタリアン（菜食主義者）のことが多い。モディ首相も厳格なベジタリアンとして有名で、酒も嗜みません。他方で、この「ベジタリアン」については、人（個人の考え方）によって、その禁忌の範囲が異なります。例えば、肉食は一切しないという人もいれば、火曜日と木曜日だけは「ベジタリアンだ」という人もいるといったように、食物だけではなく、日によって禁忌が異なるといったことがあります。こうした事情もあり、インドの食品表示ではベジタリアン・ノンベジタリアンの表記が義務付けられています。

ところで、肉食の人は何肉を食べるのかという疑問もあるかもしれません。よく食されているのは鶏肉であり、鶏肉の生産量・消費量は近年、顕著に増加しています。ちなみに、鶏肉を使ったインド料理といえば「バターチキン」を思い浮かべるかもしれませんが、これは伝統的なインド料理ではなく、インド独立後に生まれた人気料理とのことです（詳しい経緯は笠井亮平（2023）『インドの食卓：そこに「カレー」はない』早川書房）を参照）。

②イスラム教、キリスト教等のヒンドゥー教以外の宗教と食

鶏肉に次いでよく食べられているのは「マトン」（羊肉又は山羊肉）で、豚肉はほとんど食べられていません。ヒンドゥー教で禁忌とされているわけではありませんが、イメージとして「不浄」と見られているからとする考えもあるようです。いずれにしても、豚肉は食されていないので、売られているところも限られています。デリーでは、大きな市場である INA マーケットの精肉店、外国人向けの食品店、あるいは、オンラインデリバリー（ちなみに、日本企業が出資し話題になった Licious（肉製品デリバリーのスタートアップ）は残念ながら取扱いがありませんでした）等で入手します。

他方で、キリスト教徒の割合の多い州においては、豚肉は街中でもよく見かけます。また、牛肉（水牛の場合も多い）も食されています。キリスト教徒の多い州としては、メガラヤ、ミゾラム、ナガランド等の北東部の州やゴア州・ケララ州（南インドの西岸の州）に限られています。

南インドの中でカルナータカ州はヒンドゥー教徒の割合が高く、州都ベンガルールは「インドのシリコンバレー」とも呼ばれており、トヨタのインド拠点があるほか、日本の IT 企業も進出しています。ベンガルールでは「牛肉が食べられる」ということが駐在員の間では有名で、ベンガルール出張の際はステーキハウスに行くことが一つの目的にもなっています。このカルナータカ州において、2021 年に牛のと殺や牛肉の取引を禁止する規制を州政府が導入しましたが、実際は、州外からの輸入や一定年齢以上の牛は対象外となっていることもあり、引き続き、ベンガルールで牛肉が食べられているようです。余談ではありますが、この規制を導入した時のベンガルール州の与党は、ヒンドゥー教至上主義とするインド人民党 (BJP、中央政府の与党) だったため、ヒンドゥー教至上主義に沿った政策の一環で牛肉禁止が導入されたと考えられます。しかしながら、ベンガルール州は長年与野党が拮抗しており（どちらかと言えば野党優勢）、直近の 2023 年の選挙では野党（国民会議派（コングレス））が勝利したため、更なる保守的政策は採られないだろうと考えられます。

ヒンドゥー教以外の宗教のトピックとして、最後に、ジャイナ教に触れたいと思います。ジャイナ教は、殺生を徹底して禁忌しているため、豆類、葉菜類、茎野菜中心の食事をしています（食生活の詳しい様子は、岡根谷実里（2023）『世界の食卓から社会が見える』大和書房で紹介）。このジャイナ教は、人口割合でいえばわずか 0.3% ですが、インドの飲食店では、ジャイナ教向けのメニューが用意されていることが多いです。こうしたところから、多様な宗教が共存しており、それぞれの食事情に配慮することが当たり前になっている様子が見えます。

なお、インドの富裕層には、マイノリティの宗教に属する人も少なくなく、官庁のカウンターパートはシク教徒の人と会うことが多い印象です。また、インドの大手財閥のタタの創業家

はパールシー（インドに住むゾロアスター教徒）であることは有名です。インド人のカウンターパートと食事をする際には、遠慮せずに相手の食の嗜好を確認した方がよいでしょう。

（２）具体的な食シーン ～家庭料理～

繰り返しになりますが、多くの方は「カレー」バイアスが強いと思いますので、インドの日常の食シーンを紹介していきたいと思います。

（社）農山漁村文化協会の発刊している『世界の食文化』シリーズの第8巻（小磯千尋・小磯学著『世界の食文化8－インド』）には、インドの食・食文化が詳細に収められています。ここでは、次のように紹介されています。

「インドの人は毎日カレーを食べていてよく飽きませんね」という言葉をよく耳にする。こういう方には是非一度家庭料理を味わって欲しい。それもお客さん向けの特別料理ではなく、普通にインド人が食べている料理を。インドの日常的な料理は素材の味を十分生かし、シンプルな料理でもびっくりするほどおいしい。肉を食べる家庭でも、普段の食事は野菜料理が主である。メインの野菜料理が一、二品にダール（豆のスープ）、新鮮なチャトゥニーやサラダ、常備のピクルスやパーパド、それにヨーグルトなどがつく。ここに熱々のチャパーティーやご飯がついて出来上がる。

（『世界の食文化8－インド』「第二章—インド料理の神髄は家庭料理にあり」8頁より抜粋）

残念ながら、筆者自身は重たい「お客さん向け」のものしか食べたことがありませんが、近所に住む大家から家庭料理のおすそわけに預かっていたりした日本人の同僚、弁当を持参している現地職員、また、台所探検家の岡根谷実里氏の話も、同じような情景であり、家庭料理は「あっさり」したものもあり、多くの日本人がイメージするインド料理とは異なります。

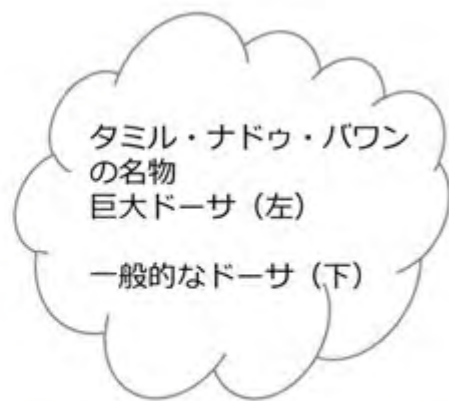
また、こうした料理の味付けの傾向は、地域によって大きく異なっています。観光や出張でインドを訪問した際に、こうした家庭料理を味わうことや各地方の料理を楽しむことは難しいと思われるかもしれませんが、デリーには、各州政府の出先の庁舎（〇〇州バワン（Bhawan。庁舎の意味。）、〇〇州ハウス等の名称）があり、そこにある食堂は一般利用できるところがほとんどのため、これらの食堂を利用することで、多少なり味わうことができるので、是非訪ねてみていただきたいです。

（写真：バワンの定食の例（違いが分からない…と言われてしまいそうですね））





(写真：パワンの名物メニュー)



3 小括

今回はインドの食文化①のレポートでしたが、次回はインドの主食における具体的な食シーンとフードサービスについて紹介します。

文責：渡辺 一行

(元・在インド日本国大使館 一等書記官)

本稿は、世界各国・地域の駐在員の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介しますものです。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴や考え方、また、日本の食料品や文化等に対するイメージなどについてもご紹介したいと思います。

[参考]

小磯千尋・小磯学 (2006)『世界の食文化 8 - インド』農山漁村文化協会

笠井亮平 (2023)『インドの食卓：そこに「カレー」はない』早川書房

岡根谷実里 (2020)『世界の台所探検：料理から暮らしと社会がみえる』青幻舎

岡根谷実里 (2023)『世界の食卓から社会が見える』大和書房

パンカジ・シャルマ 文, アリス・シャルバン 絵, サンドラ・サルマンジー レシピ, 関根光宏 訳 (2023)

『知っておきたい!インドごはんの常識:イラストで見るマナー、文化、レシピ、ちょっといい話まで』原書房

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2023/24 年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

- ・中国等で下方修正されたものの、ロシア、ウクライナ等で上方修正され、前月から上方修正された。

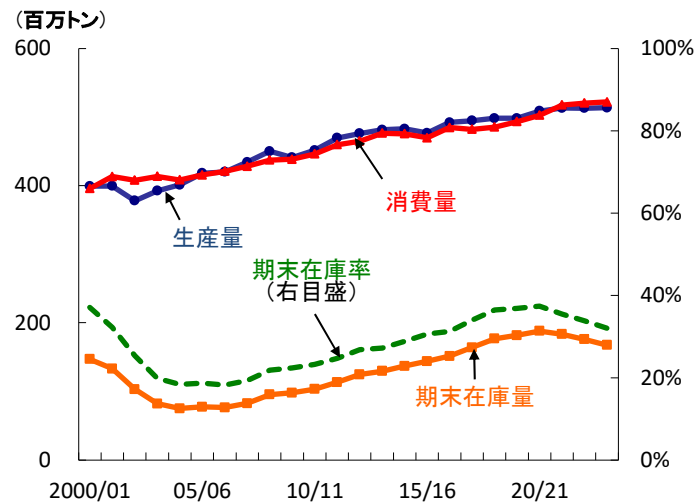
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

- ・ウクライナ等で下方修正されたものの、インド、EU 等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

- ・EU 等で下方修正されたものの、ウクライナ、ロシア、カナダ、豪州等で上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↑



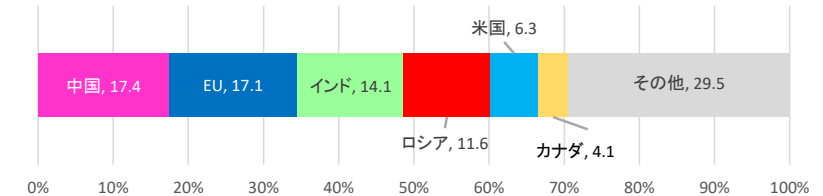
◎世界的小麦需給

(単位: 百万トン)

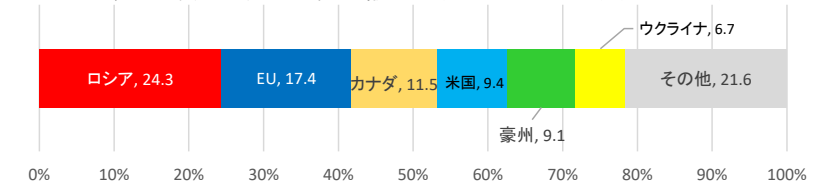
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	780.1	789.2	784.9	1.9	▲ 0.5
消 費 量	791.2	790.9	796.4	1.8	0.7
うち飼料用	160.2	153.7	161.1	2.2	4.8
輸 出 量	202.8	220.2	209.5	2.3	▲ 4.8
輸 入 量	199.9	211.5	209.2	2.4	▲ 1.1
期末在庫量	273.3	271.6	260.0	1.8	▲ 4.2
期末在庫率	34.5%	34.3%	32.6%	0.2	▲ 1.7

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (12 January 2024)

○ 2023/24年度の世界の小麦の生産量(784.9百万トン) (単位: %)



○ 2023/24年度の世界の小麦の輸出量(209.5百万トン) (単位: %)



○ 2023/24年度の世界の小麦の輸入量(209.2百万トン) (単位: %)



(2) 国別の小麦の需給動向

< 米国 > 2024/25 年度の冬小麦の播種面積は前年度比で 6.2%の減少

【生育・生産状況】米国農務省(USDA)によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく 49.3 百万トンと、前年度に比べ 9.8%増、過去 5 年平均(48.6 百万トン)に比べ 1.4%増となる見込み。

USDA「Crop Production 2023 Summary」(2024.1.12)によれば、冬小麦、春小麦及びデュラム小麦の生産量は、いずれも前月予測からの変更はなく、それぞれ 34.0 百万トン(前年度比 13.1%増)、13.7 百万トン(同 4.6%増) 及び 1.6 百万トン(7.3%減)の見込み。

同「Winter Wheat and Canola Seedings」(2024.1.12)によれば、米国の 2024/25 年度の冬小麦播種面積は、小麦の市場価格が高く播種面積が増加した 2023/24 年度(14.85 百万ヘクタール)に比べ、市場価格の低下を受け 13.93 百万ヘクタールと 6.2%減少したものの、2022/23 年度に比べ 3.4%増加した。

州別作付面積では、主要生産州のカンザス州、テキサス州及びオクラホマ州で、前年度に比べそれぞれ 7%減、8%減、5%減となった。品種別では、ハード・レッド・ウインター(HRW)が 9.71 百万ヘクタールと前年度に比べ 5%減少、ソフト・レッド・ウインター(SRW)が 2.78 百万ヘクタールで同 13%減少。

冬小麦の生育状況は、一部で干ばつ状況であるものの、降雨と降雪があり良好であった。干ばつモニターによれば、2024 年 1 月 9 日時点で冬小麦播種面積の 33%が干ばつであったものの、2023 年 10 月のピーク時の 49%から縮小した。作柄評価である「良い」から「非常に良い」の割合は、11 月 26 日から 12 月末にかけて、オクラホマ州で 53%から 67%に、カンザス州で 32%から 43%に増加した。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく 19.7 百万トンと、前年度に比べ 4.5%減少し、1972/73 年度以降で最低の見込み。また、2023/24 年度のうち 2023 年 6 月～11 月の輸出量は、ロシアやウクライナからの予想を上回る小麦供給量や、国際市場で価格競争力が乏しいことから、8.7 百万トンと、前年度同期(11.4 百万トン)を 23.9%下回っている。

米国産の輸出価格(FOB)は、2024/25 年度の前年度見通しの改善と海外需要の低迷を受け、1 月 10 日時点で 285 ドル/トンと前月より 9 ドル/トン低下したものの、主要輸出 6 か国(米国のほか、ロシア、EU、カナダ、豪州、アルゼンチン)では、カナダ(315 ドル/トン)、豪州(303 ドル/トン)に続き高い水準。

2023/24 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.3 百万トン下方修正され、17.6 百万トンとなる見込み。期末在庫量は 2017/18 年度から低下傾向となったが、2023/24 年度は前年度を 13.7%上回る見込み。

小麦－米国（冬小麦が全体の 7 割、春小麦は 3 割）

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年6月～24年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	44.8	44.9	49.3	-	9.8
消費量	30.4	30.4	31.4	▲ 0.0	3.3
うち飼料用	2.4	2.1	3.3	-	56.5
輸出量	21.7	20.7	19.7	-	▲ 4.5
輸入量	2.6	3.3	4.0	-	19.0
期末在庫量	18.4	15.5	17.6	▲ 0.3	13.7
期末在庫率	35.3%	30.4%	34.5%	▲ 0.6	4.1

(参考)

収穫面積(百万ha)	15.03	14.36	15.08	-	5.0
単収(t/ha)	2.98	3.13	3.27	-	4.5

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(12 January 2024)

図 米国の冬小麦の播種面積の推移

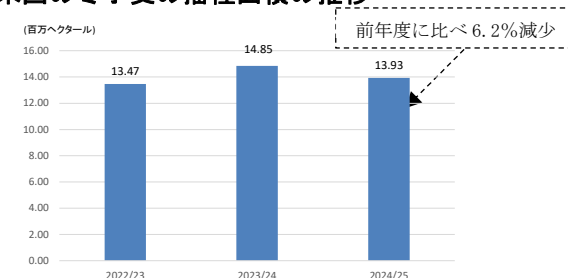


表 2024/25 年度の銘柄別播種面積

(百万ヘクタール)

銘柄	HRW	対前年度 増減	SRW	対前年度 増減	WW	対前年度 増減
播種面積	9.71	▲5%	2.78	▲13%	1.43	▲5%

資料：USDA「Winter Wheat and Canola Seedings」(2024.1.12)

図 米国の冬小麦生産地(緑の部分の生産量が多い)



資料：USDA「Crop Production Maps」

＜ カナダ ＞ 2024/25 年度の生産量は 33.3 百万トンの見込み(AAFC)

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2024.1.22)によれば、2023/24 年度の小麦全体の生産量は、前月予測からの変更はなく、32.0 百万トンと、前年度に比べ、6.9%減少するものの、過去 5 年平均に比べ 1.6%増加の見込み。

種類別の生産量は、普通小麦は収穫面積が増加したものの、干ばつによる単収の低下を受け 27.9 百万トンと前年度比で 2.2%減少となるも、5 年平均比では 6.5%増加。デュラム小麦は、平原西部の干ばつによる収穫面積の減少と単収の低下を受け 4.0 百万トンと前年度比 30.1%減、5 年平均比 22.7%減の見込み。

品質は、12 月 20 日時点のサンプル調査の結果、普通小麦は非常に良好で、サンプル数の 67%が 1 等、30%が 2 等に格付けされ、平均タンパク質含有量は 13.8%と過去の平均(13.7%)をわずかに上回った。また、デュラム小麦も非常に良好で、サンプル数の 51%が 1 等、31%が 2 等に格付けされ、平均タンパク質含有量は 14.9%と過去平均(14.1%)を上回った。

2024/25 年度の小麦全体の生産量は、例年並みの単収と仮定すると、作付面積が 1.9%減少するものの 33.3 百万トンと、2023/24 年度に比べ 4.2%増加する見込み。種類別の生産量は、普通小麦は世界的に潤沢な供給と価格低下による収益の低下を受け作付面積が減少し、27.9 百万トンと前年度に比べ 0.2 %減少する一方、デュラム小麦は作付面積が増加し 5.4 百万トンと、同 34.4%増加する見込み。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく 23.2 百万トンと、生産量の減少を受け前年度比 9.6%減の見込み。種類別の輸出量は、普通小麦は前月予測からの変更はなく 20.0 百万トンと、前年度に比べ 3.0%減少。デュラム小麦は前月予測からの変更はなく 3.2 百万トンと、生産量減少による輸出余力低下とトルコとの競合の強まり等を受け前年度に比べ 36.7%の減少。

なお、2023 年 8 月から 11 月までの輸出量は、普通小麦が 6.9 百万トンと前年度同期比 10%増加し、デュラム小麦は 1.0 百万トンと前年度同期に比べ 38%の減少となった。また、同期間の輸出先国は、前年度同期に比べ、普通小麦はインドネシア(48%増)、米国(58%増)で増加も、中国(31%減)で減少した。デュラム小麦はイタリア(75%減)、米国(24%減)で減少した。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、11 月の輸出量は、普通小麦が 197.9 万トン、デュラム小麦が 31.3 万トン。主な輸出先国は、普通小麦が中国(23.1%)、インドネシア(11.3%)、コロンビア(9.3%)の順。デュラム小麦はアルジェリア(27.5%)、モロッコ(26.2%)、イタリア(15.0%)の順。

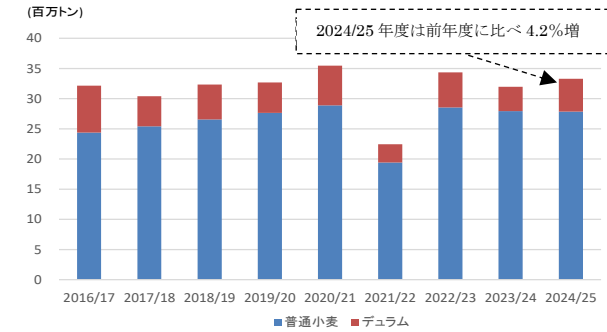
小麦－カナダ（春小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年8月～24年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	22.4	34.3	32.0 (32.0)	-	▲ 7.0
消 費 量	10.2	9.3	8.7 (8.6)	-	▲ 6.7
うち飼料用	5.2	4.2	3.5 (4.1)	-	▲ 16.1
輸 出 量	15.1	25.6	24.0 (23.2)	0.5	▲ 6.2
輸 入 量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	-	9.1
期末在庫量	3.7	3.6	3.5 (4.0)	▲ 0.5	▲ 3.8
期末在庫率	14.5%	10.4%	10.7% (12.4%)	▲ 1.7	0.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	9.20	10.08	10.68 (10.68)	-	6.0
単収(t/ha)	2.44	3.41	2.99 (2.99)	-	▲ 12.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2024)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(22 January 2024)

図 カナダ産普通小麦とデュラム小麦の生産量の推移



資料：AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(2024.1.22)のデータを基に農林水産省で作成

図 カナダ産普通小麦の輸出量と輸出先国

2023/24年度 (2023年11月)			2022/23年度 (2022年8月～2023年7月)			2021/22年度 (2021年8月～2022年7月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
中国	45.7	23.1	中国	296.8	15.1	日本	159.2	13.8
インドネシア	22.3	11.3	インドネシア	213.8	10.9	インドネシア	128.1	11.1
コロンビア	18.4	9.3	日本	167.3	8.5	コロンビア	102.4	8.9
バングラデシュ	18.1	9.1	ペルー	148.3	7.5	ペルー	79.2	6.9
メキシコ	9.4	4.7	バングラデシュ	144.4	7.3	中国	69.4	6.0
日本	9.2	4.6	コロンビア	109.9	5.6	エクアドル	65.8	5.7
その他	74.8	37.8	その他	886.1	45.1	その他	548.0	47.6
計	197.9	100.0	計	1,966.6	100.0	計	1,152.1	100.0

資料：「Canadian Grain Commission」のデータを基に農林水産省で作成

＜ 豪州 ＞2023/24 年度の輸出量は、0.5 百万トン上方修正

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、25.5 百万トンの見込み。史上最高であった前年度に比べ、単収の低下と収穫面積の減少から、2023/24 年度の実生産量は 37.1%減少するものの、10 年平均(26.5 百万トン)に比べ 3.7%の減少に留まり、ほぼ平年並みの見込み。なお、エルニーニョ現象の影響は、播種以降に乾燥天候が生じたものの、播種時に十分な土壌水分が保たれていたことや、前年 10 月以降の成熟に適した降雨を受け当初予測より軽減された。

また、豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Australian Crop Report」(2023.12.5)によれば、2023/24 年度の実生産量は、25.5 百万トンと史上最高の前年度から 38.0%減少するものの、過去 10 年平均比(26.5 百万トン)で 3.9%減に留まる見込み。主要生産州の実生産量は、ウェスタンオーストラリア(WA)州で、同州北部での乾燥の継続を受け単収が低下し 8.2 百万トンと、前年度比で 44%減少するものの、過去 10 年平均比で 17%の減少。ニューサウスウェールズ(NSW)州で、6.6 百万トンと前年度比で 38%減少するものの、過去 10 年平均比で 11%の減少となる見込み。同州では北部で降雨量不足等から生産量が低下する一方、南部で生育初期の十分な土壌水分と成熟期の降雨から生産量は平均から平均以上の見込み。

2023/24 年度の収穫状況は、現地情報会社によれば、収穫が終盤となり、各州の 1 月 4 日時点の収穫進捗率は、WA 州 100%(前年度同期 63%)、クイーンズランド(QLD)州 100%(同 99%)、NSW 州 98%(同 79%)、サウスオーストラリア(SA)州 95%(同 69%)、ヴィクトリア州(VIC 州)95%(同 45%)となった。WA 州では、早めに播種を行った地域が多く、予定より早く収穫が完了。SA 州では 12 月に降雨があり収穫が遅れ、VIC 州とともに 2024 年 1 月まで収穫が続く見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、これまでの輸出実績が比較的好調であることに加え、2023/24 年度の実小麦の品質が予想より良好であることから、前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、19.0 百万トンの見込み。過去最高の前年度の輸出量に比べ、乾燥天候による生産量の減少から、40.3%減となるものの、10 年平均(18.9 百万トン)に比べ 0.5%増とほぼ平年並みの見込み。

現地情報会社によれば、2023/24 年度(2023 年 10 月～2024 年 9 月)の 11 月の輸出量は 117.6 万トンと前年度に比べ 31.6%の減少。輸出先国は、インドネシア(18.5%)、中国(15.8%)、ベトナム(10.5%) の順で、中国のシェアは前月の 19.0%から 15.8%に低下。現在、豪州産は米国産に比べ割高のため、大量に豪州産小麦を輸入していた中国は相対的に安価な米国産の輸入にシフトする傾向もみられる。

小麦－豪州(冬小麦を主に栽培)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年10年～24年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	36.2	40.6	25.5 (24.4)	-	▲ 37.1
消 費 量	8.5	8.0	7.5 (7.6)	-	▲ 6.3
うち飼料用	5.0	4.5	4.0 (3.9)	-	▲ 11.1
輸 出 量	27.5	31.8	19.0 (18.0)	0.5	▲ 40.3
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 (0.3)	-	-
期末在庫量	3.5	4.4	3.6 (2.2)	▲ 0.5	▲ 18.3
期末在庫率	9.6%	11.0%	13.5% (8.7%)	▲ 2.2	2.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	12.73	13.05	12.50 (12.60)	-	▲ 4.2
単収(t/ha)	2.85	3.11	2.04 (1.94)	-	▲ 34.4

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2024)
IGC 「Grain Market Report」(16 November 2023)

写真 収穫が進む小麦圃場(ウェスタンオーストラリア州)



写真：Profarmer Australia

表 豪州の小麦輸出量と輸出先国

2023年11月			2023年10月～2023年11月			2022年10月～2023年9月		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
インドネシア	21.7	18.5	中国	45.2	17.5	中国	756.7	23.8
中国	18.6	15.8	インドネシア	42.6	16.5	インドネシア	504.2	15.8
ベトナム	12.4	10.5	フィリピン	30.3	11.7	フィリピン	308.2	9.7
フィリピン	10.8	9.2	ベトナム	20.0	7.7	ベトナム	285.0	9.0
イエメン	10.8	9.2	日本	10.6	4.1	韓国	270.3	8.5
韓国	9.5	8.1	イエメン	7.6	2.9	タイ	200.8	6.3
その他	33.8	28.7	その他	102.5	39.6	その他	859.1	27.0
計	117.6	100.0	計	258.8	100.0	計	3,184.3	100.0

資料：「Australian Crop Forecasters S&D Export Report」 (2024.1)を
もとに農林水産省で作成

< EU27 > 2023/24 年度の生産量は過去5年平均を上回る 133.8 百万トン

【生育・生産状況】欧州委員会(2023.12.21)によれば、2023/24 年度の実生産量は、前月予測から 0.3 百万トン上方修正され 133.8 百万トンと、前年度比で 0.4%減少も、過去5年平均比で 0.9%増加する見込み。

小麦全体のうち普通小麦は、前月予測に比べ 0.1 百万トン上方修正され 126.7 百万トンと、前年度比で 0.1%減少も、5年平均比で 1.6%増加。また、デュラム小麦は、0.1 百万トン上方修正され 7.1 百万トンと、前年度比で 6.3%減少し、5年平均比でも 10.2%減少見込み。デュラム小麦の実生産量は、2016/17 年度に 9.7 百万トンに達した後、2021/22 年度に 8.2 百万トンに一時回復したものの減少傾向にある。

2024/25 年度の普通小麦の播種は、フランス北部、ベネルクス三国及びドイツ西部では、降雨や降雪の影響を受けて妨げられ、播種面積は播種予定面積を下回り、春穀物への切替えが予想されている。特に、フランスでは播種予定面積の 10%が未播種となっている。冬小麦の生育状況は、11 月末から 12 月初旬にかけ、ヨーロッパの大部分で気温が急激に低下したため、ドイツ北部、デンマーク及びポーランド北部では霜害を受けたとみられる。スペイン地中海沿岸とイタリア南部では降雨不足に見舞われているものの、東欧地域では干ばつ状況が緩和され作物への影響はほぼなかった。

【貿易情報・その他】USDA によれば、1 月 10 日時点の輸出価格(フランス産 1 等、FOB)は、ロシア産との厳しい競合により前月から 5 ドル/トン低下し、ロシア産の小麦輸出価格と同じ 245 ドル/トンとなった。EU 産及びロシア産価格は、ともに主要輸出 6 개국(米国の項を参照)のうちで最低の水準となった。

2023/24 年度の輸出量は、ロシア等の黒海からの輸出と競合し輸出が低調となったため、前月予測から 1.0 百万トン下方修正され 36.5 百万トンとなるものの、前年度に比べ 4.0%増加。また、輸入量はウクライナからの輸入が堅調なため、前月予測から 2.5 百万トン上方修正され 11.0 百万トンと、前年度を 9.1%下回るものの、過去5年平均の 6.7 百万トンを上回る。

欧州委員会によれば、10 月の輸出量は普通小麦が 299.4 万トン(5年平均比 14.2%増)、デュラム小麦は 3.5 万トン(同 50.0%減)。輸出先国は普通小麦がエジプト(19.0%)、インドネシア(10.7%)、アルジェリア(10.3%)の順で、アフリカ諸国向けが多いが、10 月は特にエジプト向けが増加した。デュラム小麦はサウジアラビア(23.4%)、モロッコ(21.8%)、コートジボワール(18.0%)の順。なお、EU は 2022/23 年度にカナダに次ぎ世界 2 位のデュラム小麦の輸出シェアを占めたが、2023/24 年度のうち 2023 年 7 月～10 月の輸出量は 13.2 万トンと、生産量の減少から 5 年平均に比べ 50.7%の減少となっている。

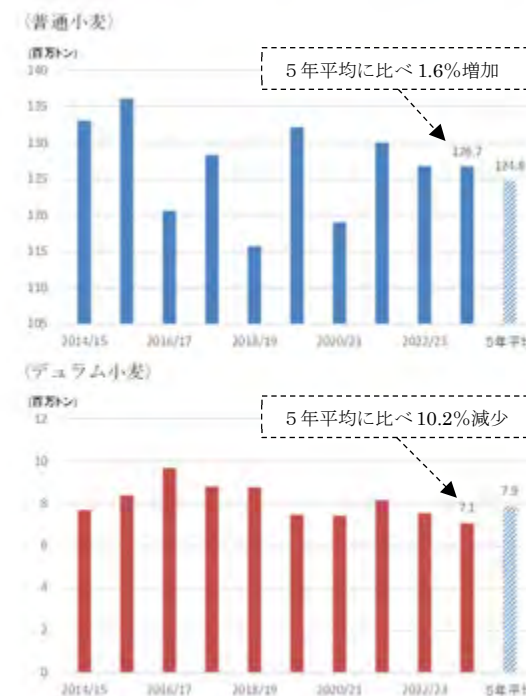
小麦—EU27 (冬小麦を主に栽培)

(単位: 百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年7月～24年6月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	138.2	134.2	134.3 (133.2)	-	0.1	
消 費 量	108.3	108.0	110.0 (109.2)	1.0	1.9	
うち飼料用	45.0	44.0	45.5 (44.7)	1.0	3.4	
輸 出 量	31.9	35.1	36.5 (34.8)	▲ 1.0	4.0	
輸 入 量	4.6	12.1	11.0 (7.7)	2.5	▲ 9.1	
期末在庫量	13.3	16.5	15.3 (15.3)	2.5	▲ 7.3	
期末在庫率	9.5%	11.5%	10.5% (10.7%)	1.7	▲ 1.1	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	24.29	24.38	24.22 (23.96)	-	▲ 0.7	
単収(t/ha)	5.69	5.50	5.55 (5.56)	-	0.9	

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2024)
IGC 「Grain Market Report」(16 November 2023)

図 EUの普通小麦、デュラム小麦別生産量の推移



資料: EU 委員会「EU Crops Market Observatory」(2023.12.21)をもとに農林水産省で作成

＜ 中国 ＞ 2023 年 1 月から 11 月までの輸入量は前年に比べ 20.2%増加

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、中国国家统计局の生産量データの公表を受け前月予測から 0.4 百万トン下方修正され、136.6 百万トン。史上最高の前年度に比べ、収穫面積は増加したものの単収の低下から、生産量は 0.8%減少したものの、過去 5 年平均の 134.8 百万トンを上回る。

なお、中国国家统计局「2023 年糧食生産量データ」(2023.12.11)によれば、2023 年の小麦生産量は 136.6 百万トンで、収穫期の降雨の影響を受け単収が低下し、前年度に比べ 0.8%減少した。

中国農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 11 月号」(2023.12.20)によれば、2024/25 年度の冬小麦の生育状況は、主要生産地域で成長に適した天候に恵まれ、北部の大部分の土壌水分は適切であった。中国国家気象センター「中国気象農業報道」(2024.1.4)によれば、12 月末までの冬小麦の生育段階は、河北省や山西省では休眠期、河南省、安徽省等では分けつ期に達し、湖北省、貴州等で三葉期に入っている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の消費量のうち飼料用消費量は、2023 年 5 月の降雨被害による品質低下に伴う飼料用グレードの増加を受け、飼料メーカーが、低品質小麦と発芽小麦の配合率を増加させるとみられることから、37.0 百万トンと前年度に比べ 12.1%増加する見込み。

2023/24 年度(2023 年 7 月～24 年 6 月)の輸入量は、前月予測からの変更はなく 12.5 百万トンの見込み。前年度に比べ 5.9%減少するものの、中国は 2 年連続の世界第 1 位の小麦輸入国となっている。なお、用途別では、中国国内の飼料用小麦比率の増加を受け、不足する食用に米国産等の製粉用小麦が輸入された。

同「中国農産品供需形勢分析月報」によれば、2023 年 1 月から 10 月の累計では、国際小麦価格が中国産の国内価格に比べ相対的に低いことや、国内市場での需要が堅調であることから、中国の小麦及び小麦製品の輸入量は前年同期間に比べ増加した。

中国税関統計によれば、2023 年 1 月から 11 月までの輸入量合計は 1,149.3 万トンで前年に比べ 20.2%増加した。同期間の輸入先国のシェアは、豪州が 59.1%(前年同期 61.2%)、カナダが 19.1%(同 14.9%)、米国 7.8%(同 6.4%)、フランスが 7.2%(同 16.5%)の順で、前年に比べカナダ及び米国のシェアが増加した一方、豪州及びフランスのシェアが低下した。

なお、同「中国農産品供需形勢分析月報」によれば、とうもろこし価格の下落で小麦の飼料用需要は減少するものの、元旦や春節により小麦粉の需要が回復するとみられること、供給面では製粉企業の在庫が十分なことや小麦が大量に輸入されていることから、国内価格は安定している。

小麦－中国（冬小麦を主に栽培）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	137.0	137.7	136.6 (136.5)	▲ 0.4	▲ 0.8
消 費 量	148.0	148.0	153.5 (149.5)	-	3.7
うち飼料用	35.0	33.0	37.0 (32.0)	-	12.1
輸 出 量	0.9	1.0	0.9 (1.2)	-	▲ 5.3
輸 入 量	9.6	13.3	12.5 (11.7)	-	▲ 5.9
期末在庫量	136.8	138.8	133.5 (137.9)	▲ 0.4	▲ 3.8
期末在庫率	91.9%	93.2%	86.5% (91.6%)	▲ 0.3	▲ 6.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	23.57	23.52	23.63 (23.70)	▲ 0.07	0.5
単収(t/ha)	5.81	5.86	5.78 (5.76)	-	▲ 1.4

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2024)
IGC 「Grain Market Report」(16 November 2023)

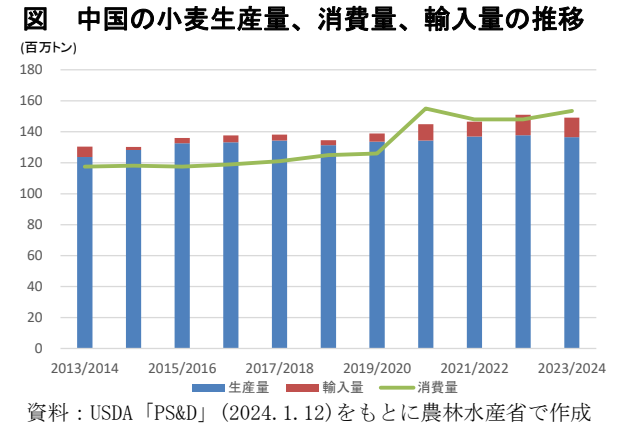


図 中国の小麦輸入量及び輸入先国

2023年11月			2023年1月～2023年11月		
国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア
豪州	27.8	41.9	豪州	678.7	59.1
カナダ	19.4	29.2	カナダ	219.9	19.1
米国	11.9	17.9	米国	89.5	7.8
カザフスタン	2.8	4.2	フランス	82.3	7.2
ロシア	4.0	6.0	カザフスタン	49.1	4.3
その他	0.5	0.8	その他	29.8	2.6
計	66.4	100.0	計	1,149.3	100.0

資料：中国農業農村部資料をもとに農林水産省で作成

＜ ロシア ＞ 2023/24 年度の輸出量は史上最高でブラジル等への輸出も増加

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量(クリミア地域分を含まず)は、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、91.0 百万トンの見込み。史上最高であった前年度(92.0 百万トン)に比べ、1.1%減少するものの、過去 5 年平均(79.6 百万トン)を 14.4%上回り史上 2 位となる見込み。

種類別の生産量は、冬小麦は収穫面積が増加したものの、単収が低下したことから、前月予測に比べ 0.5 百万トン下方修正され 64.0 百万トン。春小麦は乾燥天候により収穫面積が減少したものの、単収は当初の予想ほど乾燥天候の影響を受けずに上昇し、1.5 百万トン上方修正され 27.0 百万トンの見込み。

ロシア農業省の速報値によれば、12 月 26 日時点の 2023/24 年度の実生産量(品質調整前重量)は、92.8 百万トンと前年度(104.2 百万トン)を 11.0%下回るものの、過去 5 年平均を 12.4%上回る見込み。

2024/25 年度の冬小麦の播種は終了し、播種面積は前年度同期(17.72 百万ヘクタール)を上回る 18.60 百万ヘクタールに達した。ロシア気象センターによれば、2024/25 年度の冬穀物の越冬状況は、ロシアヨーロッパ南部で概ね並み、ウラル連邦管区等のロシアアジア部では概ね良好となっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は好調な輸出ペースを受け、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され 51.0 百万トンと、これまで史上最高であった前年度(47.5 百万トン)を更に 7.4%上回る見込み。同年度は、特にブラジルやメキシコへの輸出が好調で、輸送距離が長くコストをより要するものの、ロシア産の価格が相対的に安価となっている分で輸送コストをカバーしている。なお、ブラジルは従来、地理的に近くメルコスール加盟国として貿易の特恵条件があるアルゼンチンから小麦を輸入していたが、アルゼンチンの生産量減少を受け、2023 年 7 月から 12 月までは安価なロシア産の輸入量がアルゼンチン産を上回った。1 月以降は、アルゼンチン産の新穀の輸出が本格化し、ブラジル市場での競合が激化すると見られる。また、メキシコへの輸出は 2022/23 年度は 60 万トンであったが、2023/24 年度は最初の 5 か月で 40 万トンに達し、ロシア産が米国の市場であったメキシコ市場で輸出量を伸ばしている。

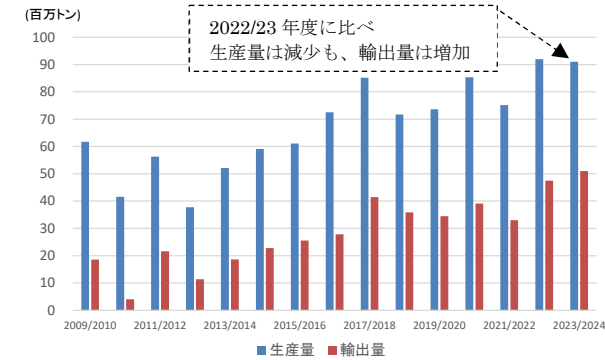
2023/24 年度のうち 2023 年 7 月～12 月のロシアの輸出量は 2,682.6 万トンと、過去最高の輸出量であった 2022/23 年度の同期間(2,384.3 万トン)を 25.2 %上回った。一方、12 月は 382.3 万トンと過去 3 年平均(388.3 万トン)を 1.5%下回った。なお、12 月の輸出先国は、トルコ(15.5%)、バングラデシュ(10.7%)、パキスタン(10.6%)の順。現地情報会社によれば、輸出経路では、今年度は EU 向けとみられるバルト海経由の穀物輸出が伸びており、前年度同期に比べバルト海経由は 2.6 倍の輸出量となった。

小麦ーロシア (主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)
(単位: 百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	75.2	92.0	91.0 (90.0)	1.0	▲ 1.1	
消 費 量	41.8	42.3	43.0 (43.6)	-	1.8	
うち飼料用	18.5	19.0	20.0 (19.0)	-	5.3	
輸 出 量	33.0	47.5	51.0 (50.1)	1.0	7.4	
輸 入 量	0.3	0.3	0.3 (0.1)	-	-	
期末在庫量	12.1	14.6	11.9 (11.4)	-	▲ 18.4	
期末在庫率	16.2%	16.3%	12.7% (12.2%)	▲ 0.1	▲ 3.6	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	27.63	29.00	28.80 (29.00)	▲ 0.20	▲ 0.7	
単収(t/ha)	2.72	3.17	3.16 (3.10)	0.06	▲ 0.3	

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2024)
IGC 「Grain Market Report」(16 November 2023)

図: ロシアの小麦の生産量と輸出量の推移



資料: USDA 「PS&D」(2024. 1. 12) をもとに農林水産省で作成

図: ロシア産小麦の輸出量と輸出先国

2023/24年度 (2023年12月)			2023/24年度 (2023年7月～2023年12月)			2022/23年度 (2022年7月～2023年6月)			2021/22年度 (2021年7月～2022年6月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
トルコ	59.3	15.5	トルコ	385.5	14.4	エジプト	836.8	17.4	トルコ	669.7	20.5
バングラデシュ	40.9	10.7	エジプト	284.7	10.6	トルコ	682.1	14.2	イラン	626.6	19.2
パキスタン	40.6	10.6	バングラデシュ	168.5	6.3	バングラデシュ	199.2	4.1	エジプト	500.5	15.4
カザフスタン	28.0	7.3	アルジェリア	135.8	5.1	パキスタン	155.2	3.2	サウジアラビア	97.3	3.0
インドネシア	25.9	6.8	パキスタン	89.4	3.3	イラン	149.6	3.1	ナイジェリア	73.5	2.3
エジプト	25.7	6.7	インドネシア	87.6	3.3	アゼルバイジャン	136.9	2.8	スーダン	71.2	2.2
アルジェリア	12.2	3.2	イラン	79.6	3.0	カザフスタン	125.5	2.6	アゼルバイジャン	69.7	2.1
その他	149.7	39.2	その他	1,451.5	54.1	その他	2,521.5	52.5	その他	2,521.5	77.3
計	382.3	100.0	計	2,682.6	100.0	計	4,806.8	100.0	計	3,260.2	100.0

＜ウクライナ＞ 2023/24 年度の輸出量は前月予測から 1.5 百万トン上方修正

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、収穫時の単収が良好であったことから、前月予測から0.9百万トン上方修正され23.4百万トンの見込み。前年度に比べ、収穫面積の減少も、良好な天候による単収の上昇を受け、前年度(21.5百万トン)を8.8%上回るものの、5年平均(26.8百万トン)に比べ12.8%下回る。なお、ウクライナ農業政策食料省によれば、収穫量は1月11日現在で22.5百万トンと、前年度同期(20.2百万トン)を11.4%上回る。

2024/25年度の冬小麦の11月27日現在の播種面積は、4.16百万ヘクタールと前年度同期(3.64百万ヘクタール)を14.3%上回り、作付け進捗率は95.6%となった。なお、ロシアのウクライナ侵攻前の2021年11月15日現在の播種面積は、6.25百万ヘクタール。生育状況は、8月下旬から降雨不足となり、9月に干ばつ状態が深刻化し出芽が遅れた。10月下旬から南部の一部を除き降雨に恵まれ生長が活発化し、11月中旬に気温の低下により生長が停止した。12月は降雨もあり良好な天候となった。ウクライナ全体の冬穀物の12月初旬の作柄評価は、「良好」が50%、「並み」が34%、「不良」が16%となった。

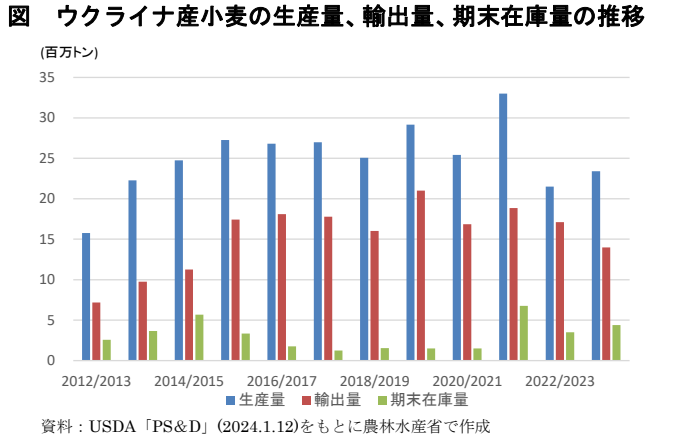
【貿易状況・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、EU向けの輸出が堅調なことから、前月予測から1.5百万トン上方修正され14.0百万トンとなるものの、前年度に比べ18.2%減少、5年平均(18.0百万トン)に比べ22.1%減少の見込み。前年度比での減少は、黒海のオデーサ港等の主要輸出港からのアフリカ及びアジア向け輸出が黒海穀物イニシアティブの履行停止の影響を受けたためである。その後、ウクライナによる人道回廊(臨時回廊)の設置で輸出は増加している。

また、ウクライナ政府等によれば、2023/24年度のうち7月から12月までの輸出量は762.7万トンで、輸出先国はスペイン(33.9%)、ルーマニア(13.0%)、エジプト(8.0%)の順。この間、EU向けの輸出は前年度同期比で29%の増加となった。特にスペインは生産量の減少と飼料用小麦の需要増からウクライナ産小麦の主要輸入国である。また、ウクライナとEUとの間で2022年6月に締結された「自動車道による貨物輸送の自由化」やルーマニアのコンスタンツァ港への輸送を促進するドナウ川河川港の能力拡大、鉄道の軌道幅の統合等がEUへの輸出に寄与した。加えて、2023/24年度のウクライナ生産量に占める飼料用グレードの割合が増加したこともその要因である。2023年12月の輸出量は、171.5万トンと前年度同期比4.3%増加。黒海イニシアティブの履行停止後に減少した輸出量は、臨時回廊の利用等で回復し7月以降で最大となった。輸出先国は、スペイン(41.8%)、インドネシア(12.4%)、パキスタン(8.4%)の順。

小麦－ウクライナ（主に冬小麦を栽培）
(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	33.0	21.5	23.4 (28.7)	0.9	8.8	
消 費 量	9.0	7.7	8.6 (13.9)	▲ 0.2	11.7	
うち飼料用	3.0	2.7	4.0 (3.0)	▲ 0.2	48.1	
輸 出 量	18.8	17.1	14.0 (13.0)	1.5	▲ 18.2	
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	33.3	
期末在庫量	6.8	3.5	4.4 (4.8)	1.8	25.1	
期末在庫率	24.3%	14.1%	19.4% (17.7%)	7.3	5.3	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	7.41	5.60	5.05 (6.32)	0.05	▲ 9.8	
単収(t/ha)	4.45	3.84	4.63 (4.54)	0.13	20.6	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2024)
IGC 「Grain Market Report」(16 November 2023)



(参考1)黒海穀物イニシアティブ履行停止後の輸出状況

黒海穀物イニシアティブの履行停止により、その後の主要輸出ルートは、①鉄道、トラック等でウクライナのイズマイル港等に向かった後、はしけ等でドナウ川を経由し、ルーマニアの黒海港湾(コンスタンツァ港他)から「臨時回廊」を経由するルート、または、ウクライナの黒海港湾(オデーサ港他)から直接「臨時回廊」を経由する港湾ルート、②ポーランド等の欧州諸国を通過する陸路ルートの2つとなっている。

ウクライナ政府及び現地調査会社のデータによれば、これらの輸出ルートの主な手段別の小麦月平均輸出量は、港湾経由が、黒海穀物イニシアティブ履行期間中(2022年8月～2023年7月)では121.4万トンであり、同履行停止後(2023年8月～12月)では、113.7万トンに減少しているものの、6.3%の減少に留まっている。

鉄道は、黒海穀物イニシアティブ履行期間(2022年8月～2023年7月)で14.5万トンであったが、同履行停止後(2023年8月～12月)では17.4万トンと、20.5%増加。自動車は、黒海穀物イニシアティブ履行期間(2022年8月～2023年7月)では7.3万トンであったが、同履行停止後(2023年8月～11月)は2.7万トンと、63.4%減少した。

この結果、ウクライナ産小麦の月平均輸出量を黒海穀物イニシアティブ履行期間と履行停止後の期間で比較すると、同履行期間(2022年8月～2023年7月)の144.0万トンに対し、同履行停止後(2023年8月～12月)は、海上輸送能力の制限により、136.3万トンに減少しているものの、5.3%の減少に留まっている。

また、黒海穀物イニシアティブ履行停止後の月間輸出量に占める手段別輸出量割合を8月と12月で比較すると、港湾経由はドナウ川利用を含め黒海の臨時回廊での輸送が増加し、80.6%から93.8%に増加した。一方、鉄道、自動車ともに10月から12月にかけ減少し、鉄道は14.6%から4.6%に、自動車も3.9%から0.4%に低下した。

この背景には、港湾経由の輸送コストが陸上輸送より比較的安価なことや、ウクライナの銀行、英国の保険会社が参加する黒海回廊向け船舶保険メカニズムの始動による海上保険料コストの低下がある。加えて、ウクライナ産穀物の東欧5か国への過剰流入問題によるポーランド、ハンガリー等の独自規制の継続や、ポーランド等の運転手などのウクライナとの国境での道路封鎖の影響も一部あるとみられる。さらに、東南アジア向け輸出に関しては、中東情勢の影響に注視が必要である。

USDAによれば、黒海穀物イニシアティブ経由の輸出の停止から、期末在庫量は増加するとみられている。2023/24年度の期末在庫量は、前月予測より1.8百万トン上方修正され4.4百万トンと、前年度比25.1%の増加。

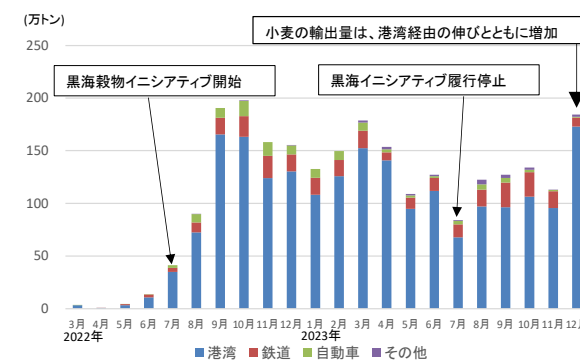
小麦の国際価格は、ロシアによるウクライナ侵攻を受けシカゴ相場は2022年3月7日に210.4ドル/トンと史上最高を記録。その後、臨時回廊による輸出等を受け、落ち着いた動きとなっている。

図 黒海穀物イニシアティブルートとその履行停止後のウクライナ産穀物の輸出ルート



出所：国連の地図に、ガーディアン紙(2023年8月9日付)を参考に調査会社が作成。

図 ウクライナ産小麦の輸送手段別輸出量の推移



資料：ウクライナ農業政策食料省及びインフラ省、現地情報会社のデータをもとに、農林水産省で作成

(参考2)東欧諸国へのウクライナ産農産物の過剰流入問題と輸入規制の状況

ウクライナ産農産物の東欧諸国への過剰流入問題に関し、2023年4月28日に欧州委員会は、5月2日から6月5日までの間、ポーランド、スロバキア、ハンガリー、ブルガリア、ルーマニアでのトランジットを除くウクライナ産の小麦、とうもろこし、菜種、ひまわり種子の輸入禁止を決定。輸入禁止措置は9月15日までに段階的に廃止されるよう取り決められた。9月15日に、EU委員会は輸入禁止の解除を決定したものの、ポーランド、ハンガリー及びスロバキアは、ウクライナ産穀物のトランジットを認めながらも、独自規制を継続。11月にはポーランドのウクライナ国境検問所が続く道路で、EUとウクライナ間の国際貨物輸送の自由化合意撤廃と輸出許可制の復活等を求めるための運送業者による道路封鎖が生じた。2024年1月15日には、ポーランド、スロバキア、ハンガリー、ブルガリア、ルーマニアの5か国の農業大臣が欧州委員会に対して書簡を送り、ウクライナ産穀物への輸入関税導入を求めた。

【輸入禁止解除】

【ルーマニア】

9月15日、独自の輸入禁止措置は導入しない方針とした。ライセンス制導入に合意しており、飼料需要等に用途が限定されている。

2024年3月までにコンスタンツァ港にウクライナ産農産物のバース（船舶が着岸する場所）を追加建設する計画が進行中と発表。

【ブルガリア】

9月14日、国民議会の投票により、ウクライナからの小麦、トウモロコシ、菜種、ヒマワリの種の輸入禁止を解除する決議が可決。

しかし、ブルガリアの農民による抗議があり、9月29日にはウクライナからのひまわりの種の輸入を11月末まで禁止することを発表。11月30日には、ウクライナからのヒマワリの種、菜種、とうもろこし、小麦の輸入に関するライセンス制度の適用について合意され、12月からウクライナ産穀物の輸入は解禁される。

【輸入禁止継続】

【ポーランド】

9月12日、ポーランドは、国内の市場を保護するため、小麦、トウモロコシ、菜種、ヒマワリの種の4つを対象に輸入禁止を決議。期間は、ポーランドとウクライナの間の農業関係が解決するまで。9月15日、とうもろこしのふすま、菜種かす等の派生製品も対象に含めることを決定。

【ハンガリー】

9月15日、穀物、菜種、ひまわりの種、小麦粉、食用油、蜂蜜、特定の肉類、卵など24品目を対象に輸入禁止を発表。期間については言及無し。10月11日、ハンガリー政府は、2023年9月15日以降ウクライナからの輸入を禁止していた24品目のうち、サトウキビとてんさい糖、およびショ糖の一部については、輸入禁止を解除した。

【スロバキア】

9月15日ポーランド、ハンガリーに続いて、小麦、トウモロコシ、菜種、ヒマワリの種の4品目を対象に年末までの穀物輸入禁止を発表。11月29日、スロバキア政府は、輸入禁止リストに、はちみつ、大麦、大豆、サトウキビ糖、ビート糖、ショ糖、大豆油のしぼりかす等を追加し、年明け以降も輸入を禁止すると発表。

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2023/24 年度

生産量 前年度比 前月比

・ブラジル等で下方修正されたものの、中国、米国等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

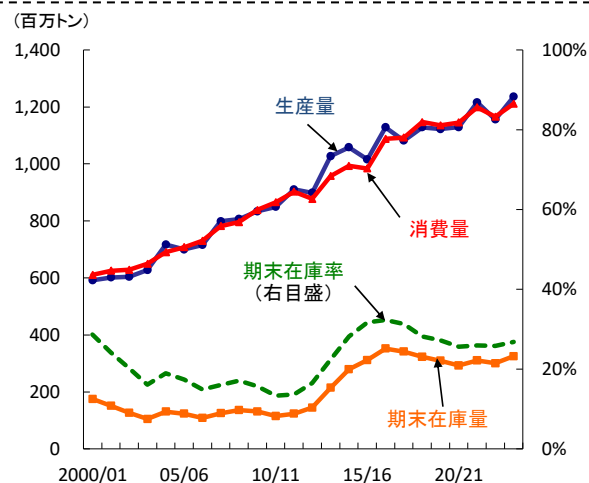
消費量 前年度比 前月比

・EU、バングラデシュ、トルコ等で下方修正されたものの、中国、米国、インド等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 前月比

・トルコ、パラグアイ等で上方修正されたものの、ブラジル、インドで下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 前月比



資料：USDA「PS&D」（2024. 1. 12）をもとに農林水産省にて作成

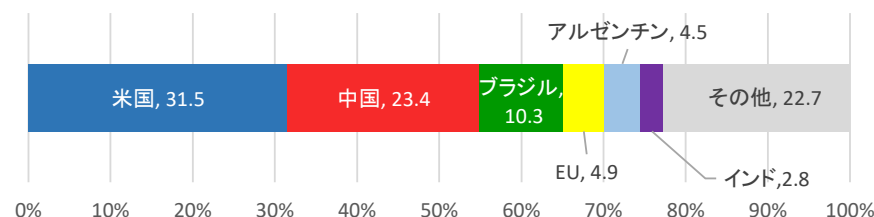
◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

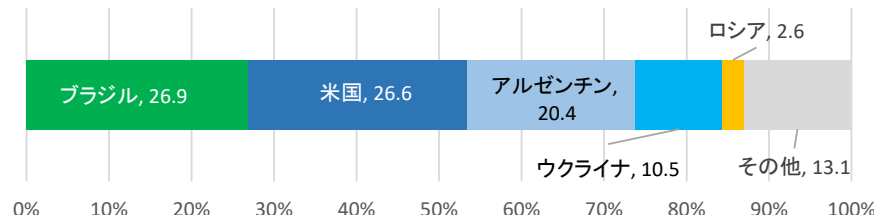
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	1,215.9	1,155.6	1,235.7	13.7	6.9
消 費 量	1,198.3	1,165.6	1,211.1	4.1	3.9
うち飼料用	743.2	728.3	763.7	2.4	4.9
輸 出 量	206.6	180.8	200.9	▲ 0.6	11.1
輸 入 量	184.5	172.2	190.8	▲ 0.8	10.8
期末在庫量	310.5	300.6	325.2	10.0	8.2
期末在庫率	25.9%	25.8%	26.9%	0.7	1.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（12 January 2024）

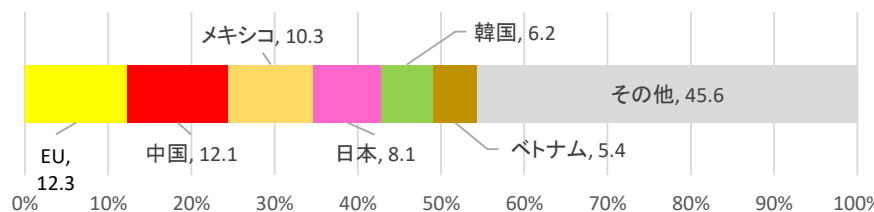
○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,235.7 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの輸出量(200.9 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの輸入量(190.8 百万トン) (単位：%)



（２）国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 収穫面積の増加により、生産量は史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、収穫面積の増加（対前年度比 9.9%増）や単収の増加（同 2.2%増）を受け、前年度より 12.4%増の 389.7 百万トンと史上最高の見通し。収穫面積が前月予測から 0.7%引下げられたものの、単収が前月から 1.4%引き上げられ史上最高の 11.13 トン/ヘクタールとなったことから、前月予測から 2.7 百万トン上方修正された。収穫面積の増加については、肥料価格の高騰が前年度から落ち着いたことを受けて、とうもろこしを選択した農家が増加したことも要因とみられる。米国穀物協会によると、品質は良好としている。

【需要状況】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、飼料用、エタノール用等の需要の増加により、前年度に比べ 3.5%増の 316.6 百万トンの見通し。前月予測から 1.9 百万トン上方修正されており、政府がジェット燃料（SAF）の税額控除の対象をとうもろこし由来のバイオエタノールにも広げたことも要因とみられる。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、国際的なとうもろこし価格の低下に伴う需要増加を受けた輸出の回復期待から、前年度より 26.4%増の 53.3 百万トンの見込み。他方で、2023/24年度に輸入が増加すると見込まれる中国への輸出をめぐり、前年度が史上最高の生産見通しとなったブラジル産等との輸出競争が激化する見通し。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2024.1.12）によれば、本年1月の米国産の輸出価格は、南米産の供給増の影響を受けた米国産需要の低下を受け、1月10日現在、前月から7ドル/トン低下し205ドル/トン。なお、2023年9～12月の輸出量は1,245万トンと、前年同時期の925万トンより35%増加。輸出先国の内訳は、メキシコ（612.4万トン）、コロンビア（192.8万トン）、中国（156.5万トン）の順となっている。飼料用需要増の一方、干ばつにより減産したメキシコ向けの輸出が増加しているが、この背景としては、航行制限のあるパナマ運河を経由せず米国から直接輸出できることもあるとみられる。

USDAによれば、2023/24年度の期末在庫量は、2023/24年の生産量が上方修正されたため前月予測から0.8百万トン上方修正され、増産により前年度より58.9%増の54.9百万トンの見込み。期末在庫率は前年度より4.9ポイント上昇し14.8%と、過去3年平均（9.2%）を上回っている。

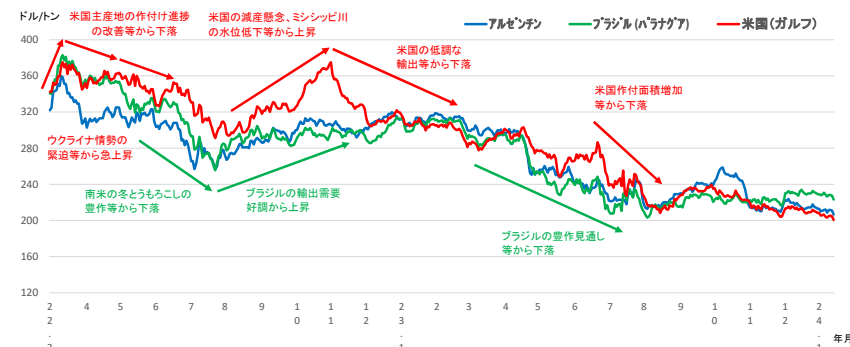
とうもろこしー米国

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 （見込み）	2023/24（23年9月～24年8月）		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	381.5	346.7	389.7	2.7	12.4
消 費 量	315.7	306.0	316.6	1.9	3.5
うち飼料用	144.0	139.4	144.2	0.6	3.4
エタノール用等	135.1	131.5	136.5	1.3	3.8
輸 出 量	62.8	42.2	53.3	-	26.4
輸 入 量	0.6	1.0	0.6	-	▲ 34.7
期末在庫量	35.0	34.6	54.9	0.8	58.9
期末在庫率	9.2%	9.9%	14.8%	0.1	4.9

（参考）
 収穫面積(百万ha) 34.39 31.85 35.01 ▲ 0.24 9.9
 単収(t/ha) 11.09 10.89 11.13 0.15 2.2
 資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
 「World Agricultural Production」（12 January 2024）

図：米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格（FOB）の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成。

＜ ブラジル ＞ 2023/24 年度の生産量は大豆等への転換により減少

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、一部で作付けが開始された冬とうもろこしの作付面積が減少する見込みから前月予測から 2.0 百万トン下方修正され、前年度より 7.3%減の 127.0 百万トンの見通し。ブラジル産の市場価格（1 月 10 日時点で 228 ドル/トン）は前年同時期（286 ドル/トン）から大幅に低下しており、収益減の見込みから、冬とうもろこしの作付面積は減少するとみられる。

ブラジル食料供給公社（CONAB）の月例報告（2024.1.10）によれば、2023/24 年度のとうもろこしの生産量は、前年度比 10.9%減の 117.6 百万トンの見込み（P.25 大豆－ブラジルのクロップカレンダー参照）。とうもろこしの市場価格の低下により作付けが大豆等へシフトし、生産量の減少につながったとみられる。南部での降雨過多による夏とうもろこしの作付け遅れを受けて、前月予測から下方修正された。

USDA によれば、夏とうもろこしが主に栽培されている南部において、12 月にかけて降雨過多が続いている。一方、冬とうもろこしが主に栽培される中西部のマット・グロッソ州において 12 月下旬、高温乾燥を和らげる降雨があったものの、高温が続いている。

南部のリオ・グランデ・ド・スール州における夏とうもろこしの作付進捗率は 1 月 11 日時点で 94%と前年同時期（93%）をやや上回っている。一方、中西部のマット・グロッソ州における冬とうもろこしの作付け進捗率は 1%と、作付けが前年より早く開始された。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用及び加工用ともに需要増加等から、前年度より 3.3%増の 77.5 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、供給減から前月予測から 1.0 百万トン下方修正され、史上最高となった前年度より 5.3%減の 54.0 百万トンとなるものの、引き続き高水準の実産量と競争力のある安価な輸出価格から、2 年連続で世界最大の輸出国となる見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2023 年 1～12 月の輸出量は 55.9 百万トンで、前年度比 29%増。内訳は、中国（16.2 百万トン）、日本（6.0 百万トン）、ベトナム（4.7 百万トン）の順。2022 年 11 月末以降に開始された中国向けとうもろこし輸出は、大豆の輸出が一巡した 2023 年 7 月以降本格化しており、一部の港で滞船が見られたものの概ね順調に輸出されている。2023 年 12 月の中国向け輸出量は 2.0 百万トンと、前月（2.7 百万トン）より減少も堅調。

とうもろこし－ブラジル

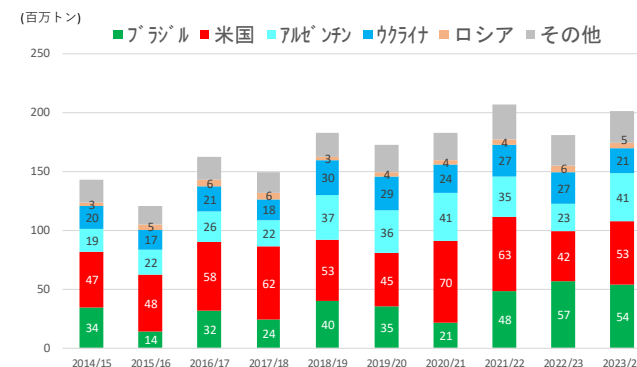
（大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが約 8 割、夏とうもろこしは約 2 割）

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（24年3月～25年2月）			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	116.0	137.0	127.0 (124.0)	▲ 2.0	▲ 7.3	
消 費 量	70.5	75.0	77.5 (80.0)	–	3.3	
うち飼料用	59.5	62.5	63.5 (54.8)	–	1.6	
輸 出 量	48.3	57.0	54.0 (50.0)	▲ 1.0	▲ 5.3	
輸 入 量	2.6	1.3	1.2 (0.5)	–	▲ 7.7	
期末在庫量	4.0	10.3	7.0 (4.8)	▲ 1.0	▲ 32.1	
期末在庫率	3.3%	7.8%	5.3% (3.7%)	▲ 0.7	▲ 2.5	

（参考）
収穫面積(百万ha) 21.80 22.40 22.40 (21.58) ▲ 0.50 –
単収(t/ha) 5.32 6.12 5.67 (5.74) 0.04 ▲ 7.4
資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2024)
IGC「Grain Market Report」(16 November 2023)

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移
（ブラジルが 2 年連続で世界第 1 位の輸出国となる見通し）



資料：USDA「PS&D」（2024.1.12）のデータをもとに農林水産省にて作成

＜ アルゼンチン ＞ 2023/24 年度の生産量は、前年度から回復する見通し

【生育・生産状況】 USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、高温・乾燥により生産量が激減した前年度に比べ降雨に恵まれ単収が増加することを受けて、大きく回復する見通しから、61.8%増の 55.0 百万トンで史上最高となる見込み。

一方、アルゼンチン政府によれば、1 月 11 日時点でとうもろこしの作付進捗率は 88%と、干ばつの影響を受けた前年同時期並みであるも、2021/22 年度同時期（85%）より進んでいる。

USDA によれば、12 月から 1 月上旬にかけて大部分の農業地域において降雨があり、土壌水分量は増加している。

【需要状況】 USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い需給が緩和し、飼料用需要が回復することから、前年度より 20.5%増の 14.1 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】 USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、高温・乾燥により減産した前年度から生産量が大きく回復し、供給余力が出てくる見通しから、前年度より 78.3%増の 41.0 百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2023 年 1～11 月の輸出量は 22.7 百万トンで、2022/23 年度産が減産となった影響を受け、前年度同期比（34.2 百万トン）で 34%減となった。輸出先の内訳は、ベトナム（297.7 万トン）、ペルー（267.6 万トン）、韓国（214.2 万トン）の順。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7%から 12%へ引き上げ、継続している。とうもろこしと小麦の輸出に関し、国内向け穀物供給不足の回避と食料品価格の上昇を抑制するため、輸出上限数量を設定しており、2022/23 年度のとうもろこし輸出上限数量は 20 百万トン。

2023 年 12 月 10 日、新大統領に右派のミレイ氏が就任した。同 12 日、カブート経済相は通貨ペソの公式レートを現行の 1 ドル＝350 ペソから 50%以上切り下げ、1 ドル＝800 ペソとした。なお、とうもろこしの輸出税を 12%から 15%に引き上げると発表した。議会での承認手続等を今のところ経ておらず、今後の動向に注視が必要である。

とうもろこしーアルゼンチン

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年3月～25年2月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	49.5	34.0	55.0 (61.0)	-	61.8
消 費 量	14.2	11.7	14.1 (20.4)	-	20.5
うち飼料用	10.1	7.5	9.8 (15.5)	-	30.7
輸 出 量	34.7	23.0	41.0 (40.9)	-	78.3
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	0.01	-
期末在庫量	1.8	1.1	1.0 (4.0)	0.02	▲ 7.2
期末在庫率	3.7%	3.2%	1.9% (6.5%)	0.04	▲ 1.3

(参考)

収穫面積(百万ha)	7.10	6.70	6.90 (8.20)	▲ 0.20	3.0
単収(t/ha)	6.97	5.07	7.97 (7.44)	0.22	57.2

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、

「World Agricultural Production」(12 January 2024)

IGC 「Grain Market Report」(16 November 2023)

写真：北部サンタフェ州の早植えとうもろこしの圃場風景 (2023 年 12 月 31 日撮影)



本圃場のとうもろこしの生育ステージは開花盛期から乳熟期にある。葉は濃い緑色で生育状態は良い。12 月の降雨により生育が急速に進んだ。
収穫作業は、3 月前半を予定している。

< 中国 > 単収及び収穫面積の増加を受け、生産量は史上最高

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、中国国家统计局による収穫面積及び単収の増加見込みを受けて前月予測から11.8百万トン上方修正され、前年度より4.2%増の288.8百万トンとなり、史上最高となる見込み。

中国国家统计局「2023年糧食生産量データ」（2023.12.11）によれば、2023/24年度の実生産量は前年より4.2%増の2億8,884万トン。播種面積が前年より2.7%増加したことに加え、単収が前年より1.5%増加したことが増産の要因。なお、東北地区の一部で降雨過多の影響があったものの、他の地域では天候に恵まれた。

【需要状況】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測から2.0百万トン上方修正され、とうもろこし国際価格の低下等から、前年度より2.3%増の306.0百万トンと史上最高の見込み。背景には国内の堅調な食肉需要があり、中国国家统计局（2024.1.17）によれば、2023年の食肉生産量は9,641万トンと、前年同時期比で4.5%増。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内の飼料用需要の増加を背景として、国内価格が国際価格を上回っているほか、特に2022年末から開始されたブラジルからの輸入が増加すると予想されていることもあり、前年度より22.9%増の23.0百万トンの見込み。

農業農村部によれば、2023年1～11月の輸入量は、前年同期より12.3%増の2,219.3万トン。内訳は、ブラジル（879.5万トン）、米国（649.7万トン）、ウクライナ（539.2万トン）の順。2023年11月のブラジル産輸入量は322.1万トンと前月比で78.8%増。2022年11月以降開始されたブラジル産とうもろこしの輸入が、2022/23年度のブラジル産の豊作による安価な輸出価格を受けて大幅に増加している。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023年11月号」によると、11月の国内価格は、新穀の豊作による供給増を受けて、2,720 元/トンと前月（2,900 元/トン）から下落した。

USDAによれば、2023/24年度の期末在庫量は、前月予測から9.8百万トン上方修正され、国内産の増産と輸入の増加により前年度より2.8%増の211.9百万トンの見込み。

とうもろこし—中国

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（23年10月～24年9月）			
			予測値、() はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	272.6	277.2	288.8	(280.6)	11.8	4.2
消 費 量	291.0	299.0	306.0	(305.5)	2.0	2.3
うち飼料用	209.0	218.0	225.0	(205.0)	2.0	3.2
輸 出 量	0.0	0.0	0.0	(0.1)	-	-
輸 入 量	21.9	18.7	23.0	(20.0)	-	22.9
期末在庫量	209.1	206.0	211.9	(171.0)	9.8	2.8
期末在庫率	71.9%	68.9%	69.2%	(56.0%)	2.8	0.3

（参考）

収穫面積(百万ha)	43.32	43.07	44.22	(43.30)	1.22	2.7
単収(t/ha)	6.29	6.44	6.53	(6.48)	0.09	1.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2024)
IGC「Grain Market Report」(16 November 2023)

表：中国のとうもろこし輸入量と輸入先国

（輸入量：万トン、シェア：%）

2023年11月			2023年1月～2023年11月			2022年1月～2022年11月		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
ブラジル	322.1	89.7	ブラジル	879.5	39.6	米国	1445.2	73.1
米国	14.7	4.1	米国	649.7	29.3	ウクライナ	497.7	25.2
ブルガリア	5.8	1.6	ウクライナ	539.2	24.3	ブルガリア	14.7	0.7
南アフリカ共和国	5.6	1.6	ブルガリア	69.2	3.1	ロシア	7.8	0.4
ウクライナ	5.1	1.4	ミャンマー	33	1.5	ミャンマー	7.3	0.4
ミャンマー	3.9	1.1	ロシア	26.6	1.2	ラオス	3.2	0.2
その他	1.9	0.6	その他	22.1	1.0	その他	0.7	0.0
計	359.1	100	計	2,219.3	100	計	1,976.6	100

資料：中国農業農村部資料をもとに農林水産省で作成。

< ウクライナ > 2023/24 年度の生産量は、侵攻前の 2021/22 年度より 27.6%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、前年度より収穫面積が減少（前年度比 1.2%減）も、天候に恵まれ単収が上昇（前年度比 15.1%増）したことを受け、前年度より 13.0%増となったものの、侵攻前の 2021/22 年度比では 27.6%減の 30.5 百万トンとなる見通し。

ウクライナ農業政策食料省によれば、1 月 11 日現在、収穫進捗率は 90%と、前年度同期（85%）より進んでいる。単収は 1 月 11 日時点で 7.79 トン/ヘクタールと、前年度より 19%増となる見通し。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 12.2%増の 5.5 百万トンの見込み。背景には、侵攻直後の 2022/23 年度と比較し、畜産物生産が回復することによる飼料用需要の増加があるとみられる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、2023/24 年度の期首在庫の減少、黒海穀物イニシアティブの停止、主要輸出先である EU での増産による輸入需要の減少の影響を受け、前年度より 22.6%減、侵攻前の 2021/22 年度からも 22.2%減の 21.0 百万トンの見込み。

ウクライナ政府等によれば、2023 年 10～12 月の輸出量は 693.9 万トン（海上輸送、陸路等での全ての輸出が含まれる）と、臨時回廊による輸出量が増加（2023 年 7～9 月比 158.2%増）したものの、黒海穀物イニシアティブが履行されていた前年同時期比では 11%減。輸出先国は、スペイン（203.9 万トン）、中国（115.8 万トン）、エジプト（84.0 万トン）、イタリア（74.6 万トン）、オランダ（69.8 万トン）の順。

USDA によれば、2023/24 年度の実在庫量は、前月予測からの変更はなく、増産による供給増から前年度より 143.6%増の 6.8 百万トンの見込み。2023/24 年度の実在庫率は、前年度から 17.0 ポイント増の 25.7%となる見込み。黒海穀物イニシアティブの履行停止後に減少した輸出量は、臨時回廊の利用等で回復しつつあるが、増産に伴い前年度より在庫は増加すると見られている。

とうもろこしーウクライナ

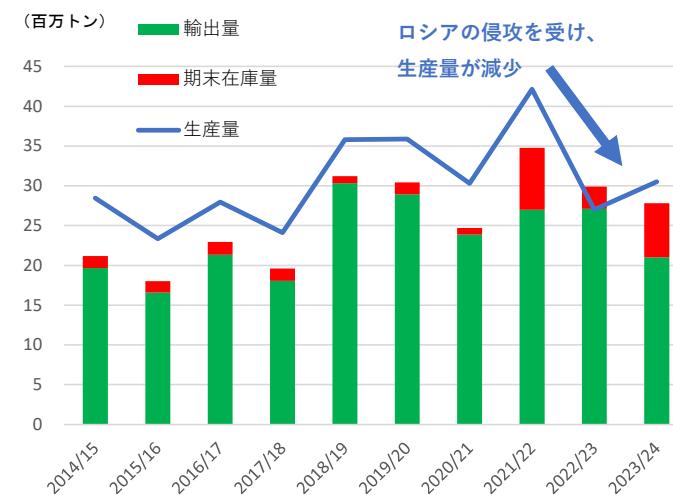
（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	42.1	27.0	30.5 (28.8)	-	13.0
消 費 量	8.2	4.9	5.5 (6.3)	-	12.2
うち飼料用	7.2	4.0	4.5 (4.5)	-	12.5
輸 出 量	27.0	27.1	21.0 (18.0)	-	▲ 22.6
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-
期末在庫量	7.8	2.8	6.8 (5.8)	-	143.6
期末在庫率	22.2%	8.7%	25.7% (24.0%)	-	17.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	5.49	4.05	4.00 (4.06)	-	▲ 1.2
単収(t/ha)	7.68	6.67	7.63 (7.10)	-	14.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2024)
IGC「Grain Market Report」(16 November 2023)

図：とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移

（2023/24 年度の実輸出量は、2017/18 年度以来の低水準の見通し）



資料：USDA「PS&D」(2024. 1. 12) をもとに農林水産省にて作成。

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

生産量

前年度比



前月比



2023/24 年度

・中国等で下方修正され、前月から下方修正された。ただし、史上最高の見込み。

消費量

前年度比



前月比



・中国等で下方修正され、前月から下方修正された。ただし、史上最高の見込み。

輸出量

前年度比



前月比



・インド、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量

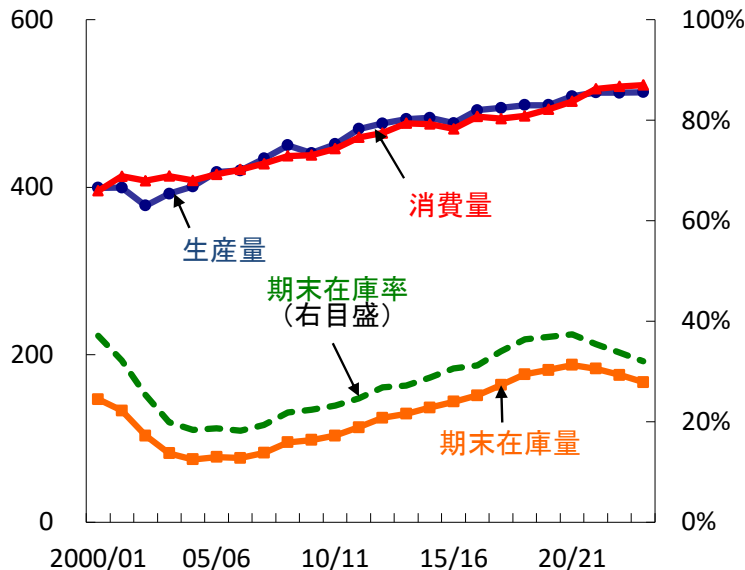
前年度比



前月比



(百万トン)



資料：USDA「PS&D」(2024.1.12)をもとに農林水産省にて作成

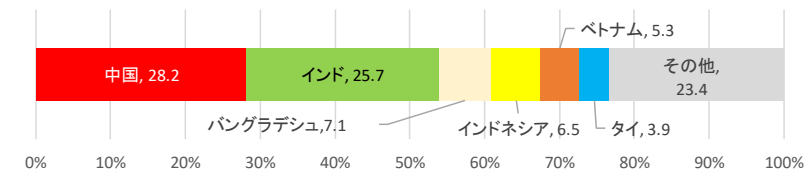
◎世界のコメ需給

(単位：百万精米トン)

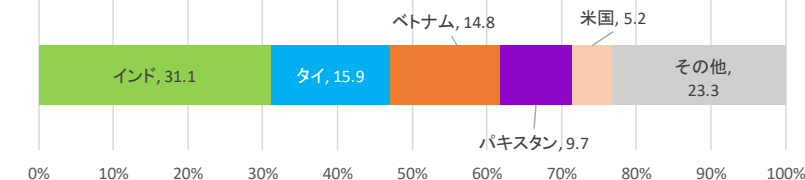
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	513.1	513.0	513.5	▲ 4.5	0.1
消 費 量	517.6	520.4	522.1	▲ 3.0	0.3
輸 出 量	56.9	54.4	51.5	▲ 0.5	▲ 5.3
輸 入 量	54.5	54.5	49.7	0.3	▲ 8.8
期末在庫量	183.3	175.8	167.3	▲ 0.5	▲ 4.9
期末在庫率	35.4%	33.8%	32.0%	0.1	▲ 1.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 January, 2024)

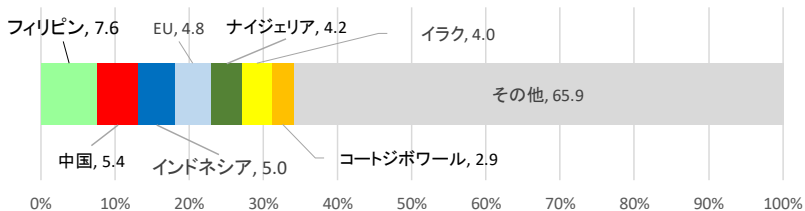
○ 2023/24年度 世界のコメの生産量(513.5百万トン) (単位：%)



○ 2023/24年度 世界のコメの輸出量(51.5百万トン) (単位：%)



○ 2023/24年度 世界のコメの輸入量(49.7百万トン) (単位：%)



(2) 国別のコメの需給動向

< 米国 > 長粒種、中・短粒種の輸出価格はともに高止まり

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、USDAの穀物生産統計で、カリフォルニア州等の単収がわずかに引き下げられたため、前月予測から0.1百万トン下方修正されたものの、前年度比36.4%増の6.9百万トンの見込み。特に2年連続の干ばつに見舞われ生産量が激減していた中・短粒種の生産量が2.0百万トンと、前年度比で119.8%に大きく回復することが要因。長粒種の生産量は4.9百万トンと、前年度比で19.8%増加。コメ全体の単収(8.64もみトン/ヘクタール)は、史上最高の2021/22年度に相当する水準。

なお、国立環境情報センターによると、12月は129年の間で最も暖かい冬となった。カリフォルニア州水資源部によると、シエラネバダ山脈の降雪量は1月12日現在、平年の50%程度に留まっており、2024年の灌漑用水の不足が懸念されることから、今後も注視が必要。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、増産による供給量増加の見込みから、前年度比11.5%増の5.1百万トンと、史上最高の見込み。

2023/24年度の輸入量は、本年8～10月にかけてタイ等アジア諸国から食用の香米の輸入が予想以上に増加したことにより、前月予測から0.1百万トン上方修正された。今後も一定の香米の需要が見込まれることから、1.3百万トンと前年度をわずかに上回り史上最高となる見込み。

2023/24年度の輸出量は、精米の輸出減少予測がもみの輸出増加予測をわずかに上回ったため、前月予測からわずかに下方修正されたものの、国内生産量の増加と、それに伴う価格競争力の改善から、前年度比32.4%増の2.7百万トンの見込み。2023/24年度(2023年8月1日～2024年1月4日)の主な輸出先国はメキシコ(48.0万トン)、ハイチ(18.4万トン)、イラク(16.7万トン)の順。

USDA「Rice Outlook」(2024.1.17)によれば、1月9日までの週のイラク向け長粒種(2等、碎米4%混入)の価格は765ドル/トンと、昨年11月以来維持しているも、インドの輸入規制やインドネシアの減産による輸入拡大等を受け、2008年11月初旬(772ドル/トン)以来の高値となっている(P.22

の「長粒種のFOB価格の推移」を参照)。他方、地中海向けカリフォルニア米(1等、碎米4%混入)である中粒種の価格は950ドル/トンと、前月からの変更はなく、生産量の増加見込を受け2023年9月初旬の史上最高値から700ドル/トン下落し、2021年5月以来の安値となっている。

期末在庫量は、香米の輸入増による輸入量の上方修正から、前月予測より0.1百万トン上方修正され、前年度より43.8%増の1.4百万トンの見込み。

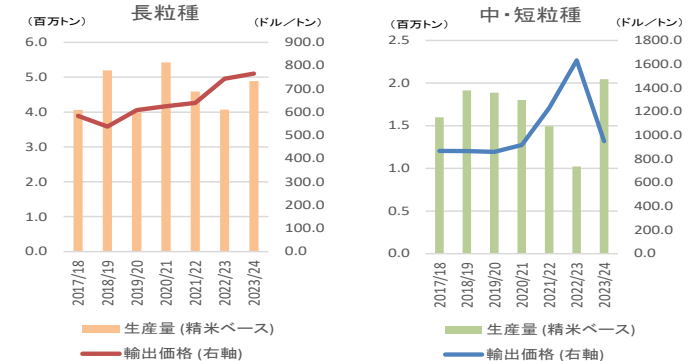
コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約2割

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年8月～24年7月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	6.1	5.1	6.9	▲ 0.1	36.4
消 費 量	4.7	4.6	5.1	-	11.5
輸 出 量	2.7	2.0	2.7	▲ 0.0	32.4
輸 入 量	1.2	1.3	1.3	0.1	4.7
期末在庫量	1.3	1.0	1.4	0.1	43.8
期末在庫率	17.1%	14.4%	17.6%	0.7	3.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	1.00	0.88	1.16	0.0	31.8
単収(もみt/ha)	8.64	8.28	8.57	▲ 0.1	3.5

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January, 2024)

図：米国の長粒種と中・短粒種の生産量・輸出価格の推移



資料：USDA「Rice Outlook」(2024.1.17)より。価格は年度内の平均価格。なお、2023/24年度は2024年1月の価格。

< インド > ラビ米の生育が進展

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、132.0百万トンと、前年度比で2.8%減も、過去5年平均比で5.6%増の見込み。8月の極度の降雨不足を受け、インドのコメ生産量の85%を占めるカリフ米の単収減少の予想が減産の要因。単収は4.21もみトン／ヘクタールと、前年度比で1.2%減も、過去5年平均比では2.3%増の見込み。

USDA及び現地情報によると、12月初旬に南東部でサイクロンによる豪雨があったものの、インド全土は乾季に入っており、十分な日光と温暖な気候の下で乾季米が生育している。2023年10月1日から2023年12月27日の降雨量は、例年と比較して7%減少したものの、インド全体ではほぼ平年並みとなった。12月28日時点で、灌漑用の貯水量は過去10年間の平均貯水量よりも6%少なく、ラビ米への影響を注視する必要がある。コメの二期作エリアでは現在、地域によって、移植から収穫期まで、様々な生育ステージにある。

インド農業農民福祉省によると、ラビ米の作付済面積は、1月19日時点で2.83百万ヘクタール、作付け進捗率は53.8%と、前年同期(2.93百万ヘクタール、55.9%)をやや下回る。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、11月初旬に政府が、2024年1月以降の穀物配給計画を5年間延長したことから、前年度比3.0%増の118.0百万トンの見込み。政府の配給プログラムは8.13億人が対象となっており、コメ等が低所得世帯向けに無償又は低価格で配給される見込み。調達量は、52～55百万トンの見込み（インド全体の消費量の半分に相当）。

2023/24年度の輸出量は、輸出規制強化による直近の輸出量減少で、前月予測から0.5百万トン下方修正され、前年度比21.0%減の16.0百万トンの見込み。ただ依然として世界第1位の輸出国で、世界の輸出量の約31%を占める。2023年10月までの主な輸出先国はベナン(145.7万トン)、サウジアラビア(102.8万トン)、セネガル(93.1万トン)の順。なお、サウジアラビア向けはバスマティ米の輸出が主流となっている。

なお、インドは、非バスマティ米を中心に、2022年9月9日以降、様々な輸出規制を発動・強化している。詳細は右表を参照のこと。

USDA「Rice Outlook」(2024.1.17)によれば、インド産米(碎米5%混入)の価格は、輸出規制強化後のデータが提示されていない。なお、規制前の2023年7月時点の輸出価格は485ドル/トンと、アジア主要輸出国の中で最低水準の価格となっていた(P.22の「長粒種のFOB価格の推移」を参照)。

2023/24年度の期末在庫量は、輸出量の下方修正から、前月予測から0.5百万トン上方修正されたものの、前年度比5.7%減の33.0百万トンの見込み。

コメーインド

雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ(小麦)の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

(単位: 百万精米トン)						
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	129.5	135.8	132.0	(133.0)	-	▲ 2.8
消 費 量	110.5	114.5	118.0	(113.2)	-	3.0
輸 出 量	22.0	20.3	16.0	(15.8)	▲ 0.5	▲ 21.0
輸 入 量	0.0	0.0	0.0	(0.0)	-	-
期末在庫量	34.0	35.0	33.0	(37.2)	0.5	▲ 5.7
期末在庫率	25.7%	26.0%	24.6%	(28.9%)	0.5	▲ 1.3
(参考)						
収穫面積(百万ha)	46.28	47.83	47.00	(47.70)	-	▲ 1.7
単収(もみt/ha)	4.20	4.26	4.21	(2.85)	-	▲ 1.2
資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、 「World Agricultural Production」(12 January, 2024) IGC「Grain Market Report」(16 November, 2023) (単収は精米t/ha)						

表:インドのコメ輸出規制(2022年9月9日～)

対象品目	措置内容	発動日
全ての種類のコメの粳 (HS 1006 10)	輸出税 (20%)	2022.9.9～
全ての種類のコメの玄米 (HS 1006 20)	輸出税 (20%)	2022.9.9～
バスマティ米・精米 (HS1006 30 20)	関税: 12,000ルピー/t (日本円で約2万円/t) 最低輸出価格導入 (1,200 ドル/トン→950ドル/トンに引き 下げ (2023.10.26～))	-
パーボイルド米・精米 (HS1006 30 10)	輸出税 (20%)	2023.8.25～ 2024.3.31
バスマティ米・パーボ イルド米以外の精米 (HS1006 30 90)	輸出禁止	2023.7.20～
碎米 (HS1006 40 00)	輸出禁止	2022.9.9～

※食料安全保障上の理由でインド政府が認める場合は、輸出を許可。
※有機米は本措置の対象外。
資料: インド政府の公示等をもとに農林水産省にて作成。

< 中国 > 2023/24 年度は播種面積が減少し、生産量が対前年比 0.9%減少

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24 年度の生産量は、中国国家统计局「2023 年糧食生産量データ」（2023.12.11）において、2023 年 7～9 月の豪雨等により東北部（特に吉林省、黒竜江省及び遼寧省）で播種面積が引き下げられたことから、前月予測から 4.4 百万トン下方修正され、前年度比 0.9%減の 144.6 百万トンの見込み。ただし、単収は史上最高の見込み。なお、東北部では、政府の大豆作付け推進政策の反動を受け、コメの作付面積が減少傾向にある。

中国国家统计局「2023 年糧食生産量データ」（2023.12.11）によれば、2023 年のコメの播種面積は 28.9 百万ヘクタールと、前年比 1.7%減少した。単収は、天候に恵まれたことも受け、7.1 トン/ヘクタールと前年比 0.8%増加した。生産量（もみベース）は 206.6 百万トンと、前年比 0.9%減少した。

なお、現地情報によると、一期作稲及び南部の二期作晩稲の収穫は 2023 年 11 月に終了した。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24 年度の消費量は、とうもろこし等飼料用作物の価格低下を受けた飼料用米の消費の減少から、前月予測より 2.0 百万トン下方修正され、前年度比 3.3%減の 149.9 百万トンの見込み。

2023/24 年度の輸入量は、国内コメ価格の下落や、史上最高の生産量となったとうもろこしの飼料用供給量の増加から、前月予測より 0.1 百万トン下方修正され、前年度比 38.4%減の 2.7 百万トンの見込み。中国は、もち米や香米に加え、特にとうもろこし等飼料用穀物の価格高騰を背景に、代替としてインド等から砕米を輸入してきたが、2022 年 9 月以降、インドの輸出禁止等により輸入量は規制前の年度（2021/22 年度、6.0 百万トン）と比較して 54.6%減少している。

中国海関統計によれば、2023 年 11 月の輸入量は 12.9 万トン（前年同月比 60.2%減）、1～11 月の輸入量は 240.0 万トン（前年同期比 59.2%減）となった。このうち、1 位がベトナム（38.2%）、2 位はミャンマー（20.3%）、3 位がタイ（15.9%）である。

一方、USDAによると、「一帯一路」政策における賛同国を拡大する目的から、同政策の関係国に対しコメの輸出促進を図っており、2023/24 年度の輸出量は、前年度比 14.9%増の 2.0 百万トンとなっている。主要輸出先には、同政策の賛同国であるエジプトやトルコが含まれている。

期末在庫量は、生産量の下方修正から前月より 0.8 百万トン下方修正され、前年度比 4.3%減の 102.0 百万トンの見込み。ただし、インドの期末在庫量（33.0 百万トン）と合計すると世界の期末在庫量の約 81%を占める。

コメー中国

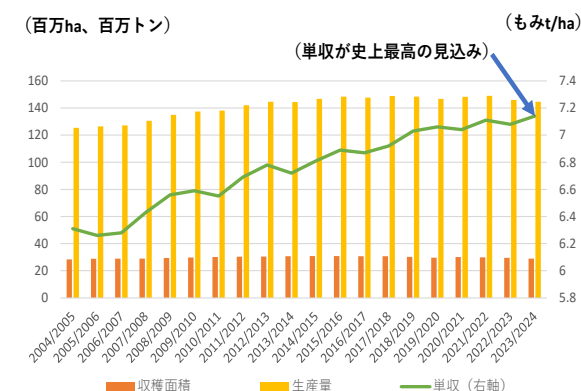
北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ(粳)米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは3割程度

(単位：百万精米トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	149.0	146.0	144.6 (148.9)	▲ 4.4	▲ 0.9
消 費 量	156.4	155.0	149.9 (150.1)	▲ 2.0	▲ 3.3
輸 出 量	2.1	1.7	2.0 (2.2)	-	14.9
輸 入 量	6.0	4.4	2.7 (3.3)	▲ 0.1	▲ 38.4
期末在庫量	113.0	106.6	102.0 (104.8)	▲ 2.5	▲ 4.3
期末在庫率	71.3%	68.0%	67.1% (68.8%)	▲ 0.8	▲ 0.9
(参考)					
収穫面積(百万ha)	29.92	29.45	28.95 (29.45)	▲ 0.90	▲ 1.7
単収(もみt/ha)	7.11	7.08	7.14 (4.96)	0.01	0.8

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January, 2024)
IGC「Grain Market Report」(16 November, 2023)（単収は精米t/ha）

図： 中国の生産量、収穫面積、単収の推移
(2004/05～2023/24 年度)



資料：USDA「PS&D」(2024. 1. 12)をもとに農林水産省にて作成

< タイ > 雨季米は干ばつ、乾季米は灌漑用水不足からいずれも減産見込み

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月からの変更はなく、2023年5～9月中旬の平年を下回る降雨量から、前年度比4.4%減の20.0百万トンの見込み。

現地情報によると、12月は乾期となり、米の主要産地である北部、東北部及び中部でも降雨量は僅かとなった。2023年1～12月の累計降雨量は、平年よりも6%減少した。米の主要産地である東北部の降水量は例年並みだったものの、北部では例年より5%少なく、中部では例年より20%以上減少した。

農業経済局によると、2022/23年度の雨期米の作付面積は、エルニーニョ現象による降雨の遅れ等から、2023年11月時点で9.9百万ヘクタール（前年度比1.5%減少）の見込み。収穫量は、降雨不足から2,557万もみトン（前年度比4.0%減）の見込み。また、2023/24年度の乾期米の作付面積は、降雨不足による灌漑用水不足から1.6百万ヘクタール（前年度比11%減）、収穫量は635万もみトン（前年度比12%減）の見込み。

アセアン食料安全保障情報システム(2024.1)によると、乾季米の作付け進捗率は96%で、概ね分げつ期にあり、適切な水管理から良好な生育状況。作付面積は1.3百万ヘクタールと、灌漑用水不足から前年より減少。

USDAによると、2022/23年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、タイ政府による収穫面積の増加見込み（11.07百万ヘクタールと史上最高）等を受け、2021/22年度比5.0%増の20.9百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、前月からの変更はなく、減産見込みから、前年度比5.7%減の8.2百万トンの見込み。

2022/23年度の輸出量は、2023年11月の東南アジア向け輸出が増加したことから、前月予測から0.2百万トン上方修正され、2021/22年度比13.0%増の8.7百万トン。

タイ米輸出業者協会によれば、2023年1～11月の輸出量は、前年同期比14.7%増の794.6万トンとなった。政府備蓄の不足に対処するため輸入を拡大しているインドネシアは、前年同期の4.7万トンから大幅増の127.4万トンと、最大の輸出先国となった。また、南アフリカが87.6万トン（前年同期69.2万トン）、検疫問題で7年間輸入を停止していたタイ産米の輸入を2022年に再開したイラクは81.5万トン（同145.9万トン）、米国は64.9万トン（同59.6万トン）を輸入した。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2024.1.12）によれば、1月9日までの週のタイ産米（長粒、2等精米）の輸出価格は、特にインドネシア及びフィリピンの需要増加から、前月から23ドル／トン上昇し、642ドル／トンとなった（P.22の「長粒種のFOB価格の推移」を参照）。2023年12月中旬以降、情勢が不安定な紅海を迂回することによる、欧州や中東向けの輸送コストの増加や輸送日数の増加が懸念されている。

期末在庫量は、2021/22年度在庫量の上方修正から前月より0.6百万トン上方修正されたものの、減産予測から前年度比16.7%減の3.2百万トンの見込み。

コメータイ

夏期の雨季作と冬期の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

(単位：百万精米トン)					
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年1月～24年12月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	19.9	20.9	20.0 (19.7)	-	▲ 4.4
消 費 量	12.5	12.5	12.5 (13.0)	-	-
輸 出 量	7.7	8.7	8.2 (8.3)	-	▲ 5.7
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	-
期末在庫量	4.1	3.9	3.2 (3.3)	0.6	▲ 16.7
期末在庫率	20.5%	18.3%	15.7% (15.7%)	2.9	▲ 2.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.70	11.07	10.65 (11.00)	-	▲ 3.8
単収(もみt/ha)	2.81	2.86	2.85 (1.89)	-	▲ 0.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January, 2024)
IGC「Grain Market Report」(16 November, 2023) (単収は精米t/ha)

表：タイの国別輸出量

(単位：万トン)			
国名	2022年 1～11月	2023年 1～11月	増減量
1 インドネシア	5.7	127.4	121.7
2 南アフリカ	69.2	87.6	18.4
3 イラク	145.9	81.5	-64.4
4 米国	59.6	64.9	5.3
5 中国	65.6	36.7	-28.8
6 マレーシア	13.0	36.5	23.5
7 日本	25.6	32.9	7.3
8 フィリピン	16.3	26.8	10.6
9 セネガル	22.4	24.2	1.8
10 カメルーン	15.1	19.4	4.3
計	692.5	794.6	102.1 (前年比14.7%増)

資料：タイ米輸出業者協会（2023.12）

< ベトナム > 南部メコンデルタ地域の冬春作の播種を開始

【生育・生産動向】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収が過去最高だった前年度の水準からわずかに減少も、収穫面積の増大により、前年度比 0.2%増の 27.0 百万トンの見込み。なお、肥料価格の高騰や高収益作物等（果物・野菜・養殖）への転換等により、生産量は史上最高となった 2014/15 年度（28.2 百万トン）を境に緩やかな低下傾向にある。

アセアン食料安全保障情報システム（2024.1）によると、①北部は、とうもろこし等の乾季作物の播種が行われているため、冬春作（乾季米）の作付けはまだ開始されていない。②南部のメコンデルタ地域の冬春作は播種期にあり、播種面積は 1.22 百万ヘクタール。2024 年第 1 四半期は、降雨の減少と高温が見込まれることから、灌漑用水不足が予想されている。

2022/23 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、2021/22 年度比 1.0%増の 26.9 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、アジア諸国等からの精米輸入需要が落ち着く見込みから、前年度比 9.5%減の 7.6 百万トンの見込み。

2022/23 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、フィリピンによる史上最高の輸入量の継続見込みや、インドネシアによる 2023 年中の追加需要見込みを受け、8.4 百万トンと前年度比 18.3%増の見込み。特にインドネシアは、エルニーニョ等によるコメの減産見込みや、燃料価格高騰による投入財費用の高騰から、国内コメ価格が上昇。価格抑制のための在庫放出に加え、低所得世帯へのコメ配給等を受け、政府が設定する最低水準以下に在庫が低下。これを補うため、2023 年 1～12 月までに合計 350 万トンを買付け見込み。2023 年 1～10 月までの輸入量(209.8 万トン)のうち、ベトナム産の輸入は 94.6 万トン。

ベトナム関税総局によれば、2023 年 1～12 月の輸出量は 813.2 万トンと、前年同期（710.5 万トン）に比べ 14.4%増加した。主な輸出先国は、フィリピン（313.5 万トン）、インドネシア（116.6 万トン）、中国（91.7 万トン）、ガーナ（58.7 万トン）の順。特に、インドネシア向けが前年度比 978.0%増加。またフィリピン政府は本年 1 月末にベトナム政府と今後 5 年間のコメ供給に係る覚書を締結予定。

USDA 「Grain: World Markets and Trade」(2024.1.12)によれば、ベトナム産米(長粒種、5 %砕米混入)の 1 月 9 日までの週の価格は、新穀の流入から、前月の価格より 19 ドル／トン下落し、668 ドル／トンとなった。

期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度比 25.0%減の 1.2 百万トンの見込み。

コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年 1 月～24年12月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	26.7	26.9	27.0 (28.0)	-	0.2
消 費 量	21.4	21.4	21.2 (21.9)	-	▲ 0.9
輸 出 量	7.1	8.4	7.6 (7.8)	-	▲ 9.5
輸 入 量	1.7	1.8	1.4 (1.5)	-	▲ 22.2
期末在庫量	2.7	1.6	1.2 (2.4)	-	▲ 25.0
期末在庫率	9.3%	5.4%	4.2% (8.2%)	-	▲ 1.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	7.10	7.10	7.15 (7.10)	-	0.7
単収(もみt/ha)	6.01	6.07	6.05 (3.90)	-	▲ 0.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January, 2024)
IGC 「Grain Market Report」(16 November, 2023) (単収は精米t/ha)

図：長粒種の FOB 価格の推移



資料：USDA 「Grain：World Markets and Trade」(2024.1.12)より。

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2023/24 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・ブラジル等で下方修正されたものの、アルゼンチン、米国、ロシア、中国等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

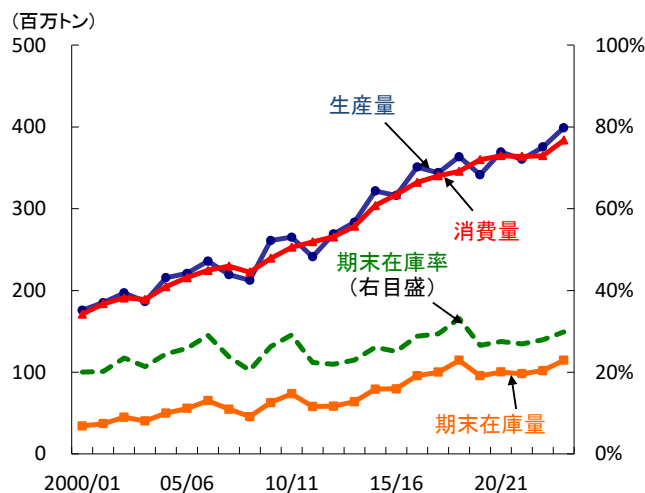
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・アルゼンチン、インド等で上方修正されたものの、ブラジル等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

・ロシア、パラグアイで上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↑



資料：USDA「PS&D」（2024. 1. 12）をもとに農林水産省で作成

◎ 世界の大豆需給

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生産量	360.4	375.4	399.0	0.1	6.3
消費量	363.9	364.7	383.7	▲ 0.3	5.2
うち搾油用	314.5	313.9	329.4	▲ 0.1	4.9
輸出量	154.2	171.7	170.9	0.7	▲ 0.4
輸入量	155.5	164.8	168.3	0.7	2.1
期末在庫量	98.0	101.9	114.6	0.4	12.5
期末在庫率	26.9%	27.9%	29.9%	0.1	1.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（12 January 2024）

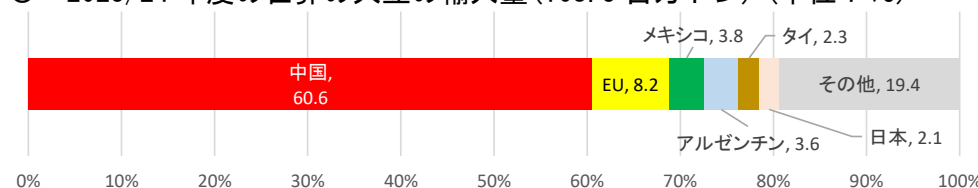
○ 2023/24 年度の世界の大豆の生産量 (399.0 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度の世界の大豆の輸出量 (170.9 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度の世界の大豆の輸入量 (168.3 百万トン) (単位：%)



（２）国別の大豆の需給動向

＜ 米国 ＞ 収穫面積の減少により、生産量は前年度より 2.5%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、イリノイ州等で単収が引き上げられたことから前月予測から 1.0 百万トン上方修正されたものの、収穫面積の減少を受け前年度より 2.5%減の 113.3 百万トンの見込み。大豆からとうもろこしへの作付転換により収穫面積が減少したことが背景としてあるとみられる。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測から 0.1 百万トン下方修正されたものの、バイオ燃料・飼料用需要増による搾油の収益改善の見通しから、前年度より 4.8%増の 66.0 百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく前年度より 11.9%減の 47.8 百万トンの見込み。史上最高の豊作見通しとなったブラジル産と比べ相対的な価格競争力が落ちていることが要因とみられる。また、米国内のバイオ燃料用消費量が増加していることも背景にあるとみられる。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、2023/24 年度の実産量が上方修正されることを受け、前月予測から 0.9 百万トン上方修正され、前年度より 6.0%増の 7.6 百万トンとなる見込み。ただし、期末在庫率は 6.7%で、引き続き低水準に留まる見通し。

USDA 「Oilseeds: World Markets and Trade」(2024.1.12) によれば、本年 1 月の米国の大豆価格は、1 月 10 日現在、南米の豊作を背景とした世界的な豊作基調を受けて、前月から 20 ドル/トン下落し 484 ドル/トン。

USDA によれば、2023 年 9～12 月の輸出量は 2,346 万トンと、前年度同時期の 2,817 万トンより 17%減。内訳は中国（1,458.6 万トン）、メキシコ（186.6 万トン）、ドイツ（105.9 万トン）の順となっている。

USDA によれば、米国政府は、温室効果ガス排出削減のため、様々な原料のバイオマス利用を奨励している。2022/23 年度における主要な植物油によるバイオマス生産量は前年度比 30.8%増の 8.7 百万トンであり、そのうち、大豆油によるバイオマス生産量は前年度比 20.2%増の 5.7 百万トンで史上最高。2022/23 年度の大豆油は増産したものの、国内のバイオマス利用に向けられ輸出量が歴史的な低水準に留まったため、今後も動向を注視する必要。

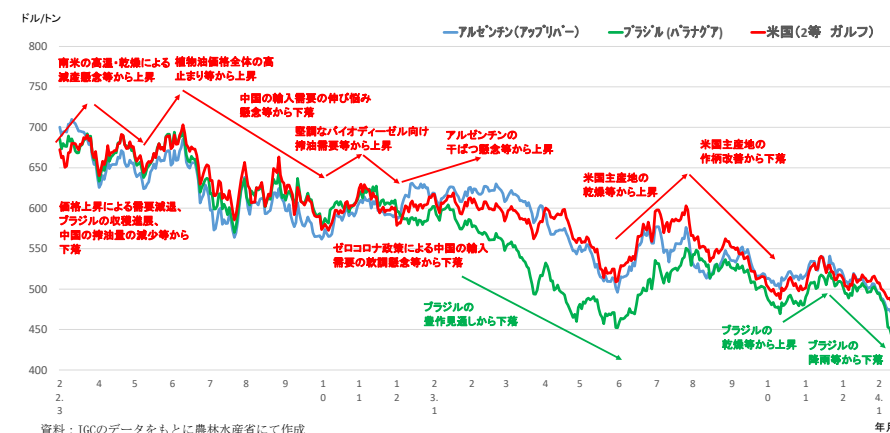
大豆－米国

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年 9 月～24年 8 月)		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	121.5	116.2	113.3	1.0	▲ 2.5
消 費 量	62.9	63.0	66.0	▲ 0.1	4.8
うち搾油用	60.0	60.2	62.6	－	4.0
輸 出 量	58.6	54.2	47.8	－	▲ 11.9
輸 入 量	0.4	0.7	0.8	－	22.4
期末在庫量	7.5	7.2	7.6	0.9	6.0
期末在庫率	6.2%	6.1%	6.7%	0.8	0.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	34.92	34.87	33.33	▲ 0.17	▲ 4.4
単収(t/ha)	3.48	3.33	3.40	0.05	2.1

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2024)

図：米国、ブラジル、アルゼンチンの大豆輸出価格（FOB）の推移



＜ ブラジル ＞ 2023/24 年度の生産量 (CONAB) は前年度より 0.4%増で史上最高

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、主要生産州の中西部マット・グロッソ州等における高温乾燥を受け前月予測から 4.0 百万トン下方修正され、157.0 百万トン。作付面積が史上最高となるものの単収が減少することから、生産量は史上最高の前年度より 1.9%減も、引き続き高水準を維持している。

ブラジル食料供給公社 (CONAB) の月例報告 (2024.1.10) によれば、2023/24 年度の実産量は、前年度より 0.4%増の 155.3 百万トンと史上最高の見通し。生産量の増加は、とうもろこし等から収益性が高い大豆に作付けがシフトすることによる。中西部における降雨不足と高温、南部での降雨過多による作付け遅れを受けて、前月予測から下方修正された。作付け進捗率は 12 月末時点で 97.9%であり、マット・グロッソ州等では既に収穫が開始されている。

USDA によれば、南部において、12 月にかけて降雨過多が続いている一方、中西部のマット・グロッソ州において 12 月下旬、高温乾燥を和らげる降雨があったものの、依然として高温が続いている。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、供給減を受け前月予測から 2.2 百万トン下方修正されたものの、飼料向けの大豆粕需要が増加することから、前年度より 1.1%増の 57.5 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量が 2 年連続で高水準を維持し、価格競争力が高まる見込みから、前年度より 4.2%増の 99.5 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2023 年 1～12 月の輸出量は 101.9 百万トンで、前年同期 (78.7 百万トン) に比べ 29.5%増となっている。輸出先は、中国 (74.5 百万トン)、アルゼンチン (4.0 百万トン)、スペイン (2.7 百万トン) の順。堅調な中国向け輸出に加え、干ばつにより減産したアルゼンチンへの搾油用需要を満たすための輸出が大幅に増加した。

2023 年 6 月、北部のマラニョン州イタキ港と南部のサンパウロ州サントス港を結ぶ南北鉄道が開通した。南北鉄道が稼働することで、最大生産州のマット・グロッソ州等の内陸部で生産された大豆及びとうもろこしを輸出港まで効率的に輸送できるようになった。さらに、マット・グロッソ州から南部サントス港まで輸送する鉄道の拡張工事も行われており、これらのアクセス改善が輸出のボトルネックを回避する一助になることが期待されている。

大豆ーブラジル

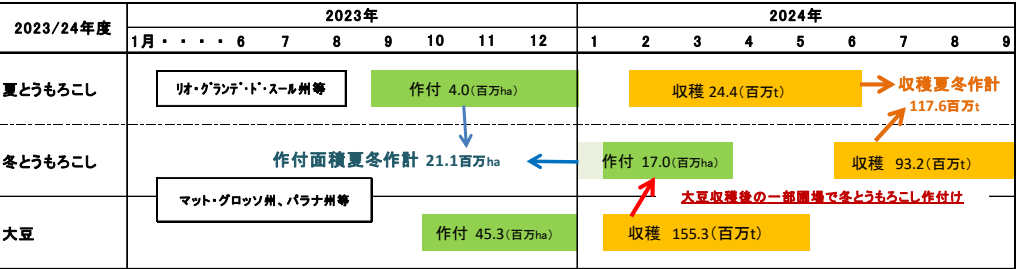
(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（23年10月～24年9月）		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	130.5	160.0	157.0（160.0）	▲ 4.0	▲ 1.9
消 費 量	54.0	56.9	57.5（58.6）	▲ 2.2	1.1
うち搾油用	50.7	53.1	53.8（56.3）	▲ 2.0	1.2
輸 出 量	79.1	95.5	99.5（100.2）	－	4.2
輸 入 量	0.5	0.2	0.5（0.4）	－	200.0
期末在庫量	27.6	35.4	35.8（3.5）	▲ 1.8	1.3
期末在庫率	20.7%	23.2%	22.8%（2.2%）	▲ 0.8	▲ 0.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	41.60	44.30	45.60（41.49）	－	2.9
単収(t/ha)	3.14	3.61	3.44（3.86）	▲ 0.09	▲ 4.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2024)
IGC「Grain Market Report」(16 November 2023)

ブラジルのクロップカレンダー(中部から南部)

2023/24年度大豆の作付けは、2023年9月以降、順次開始。
2024年2月以降、大豆の収穫が行われ、その後、一部の圃場で冬とうもろこしを栽培。



資料：CONAB穀物レポート (2024.1.10)

＜ アルゼンチン ＞ 2023/24 年度の生産量は、前年度より倍増

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実生産量は、12 月から 1 月上旬の降雨を受け単収が引き上げられたことため前月予測から 2.0 百万トン上方修正され、高温・乾燥の影響を強く受けた前年度から回復する見通しから、前年度の 2 倍の 50.0 百万トンの見込み。

アルゼンチン政府によれば、1 月 11 日現在、作付進捗率は 95%と、干ばつの影響を受けた前年同時期（93%）を上回っているものの、2021/22 年同時期並み。ブエノスアイレス取引所週報（2024.1.18）によれば、55%の大豆が「良～やや良」の作柄となっている。

USDA によれば、12 月から 1 月上旬にかけて、大部分の農業地域において降雨があり、土壌水分量は増加している。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、増産に伴い搾油量が回復することから、前年度比 16.9%増の 42.8 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】2023/24 年度の輸入量は、パラグアイ産の輸入増を受けて前月予測から 0.4 百万トン上方修正されたものの、国内生産量の増加に伴い輸入需要が減少することから、前年度より 32.7%減の 6.1 百万トンの見込み。

2023/24 年度の輸出量は、前月予測から変更はなく、干ばつにより減産し価格競争力が弱まった前年度から生産量が大きく回復する見込みから、前年度より 9.8%増の 4.6 百万トンの見込み。

なお、2023 年 1～11 月の輸出量は、前年度の干ばつによる減産を受けて 182.2 万トンで前年度（545.8 万トン）より 67%減。輸出先は、中国（160.6 万トン）、米国（7.5 万トン）、チリ（1.6 万トン）の順。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021 年 1 月以降、輸出税を大豆最大 33%、大豆油及び大豆粕 31%と設定。2022 年 3 月に、大豆油及び大豆粕の輸出税について 2022 年末まで 2%引き上げたが、2023 年 1 月からは 31%に戻している。

2023 年 12 月 10 日、新大統領に右派のミレイ氏が就任した。同 12 日、カブート経済相は通貨ペソの公式レートを現行の 1 ドル＝350 ペソから 50%以上切り下げ、1 ドル＝800 ペソにした。また、大豆の輸出税は引き続き最大 33%に設定すると発表した。なお、大豆油及び大豆粕の輸出税を 31%から 33%に引き上げると発表した。議会での承認手続等を今のところ経ておらず、今後の動向について注視が必要である。

大豆－アルゼンチン

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	43.9	25.0	50.0 (44.0)	2.0	100.0	
消 費 量	46.0	36.6	42.8 (42.7)	1.0	16.9	
うち搾油用	38.8	30.3	35.5 (38.9)	1.0	17.1	
輸 出 量	2.9	4.2	4.6 (5.1)	-	9.8	
輸 入 量	3.8	9.1	6.1 (5.7)	0.4	▲ 32.7	
期末在庫量	23.9	17.2	26.0 (3.9)	1.4	50.8	
期末在庫率	48.9%	42.2%	54.8% (8.1%)	1.8	12.6	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	15.90	14.40	16.50 (15.87)	0.10	14.6	
単収(t/ha)	2.76	1.74	3.03 (2.77)	0.10	74.1	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2024)
IGC「Grain Market Report」(16 November 2023)

写真：北部サンタフェ州の大豆の圃場風景
(2023 年 12 月 31 日撮影)



本圃場の大豆の生育ステージは開花期にある。
土壌の水分状態は良く、平年並みの穏やかな気温が記録されたことにより、全体的に作柄は極めて良好。
収穫作業は 3 月末を予定している。

＜ 中国 ＞ 2023/24 年度の生産量・消費量・輸入量は史上最高

【生産・生育状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、中国国家统计局による収穫面積及び単収の増加見込みを受けて前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、前年度より 2.8%増の 20.8 百万トンで史上最高の見込み。

中国国家统计局「2023 年糧食生産量データ」（2023.12.11）によれば、2023 年の生産量は前年より 2.8%増の 2,084 万トン。播種面積が前年より 2.2%増加し、単収も前年より 0.5%増加したことが要因。

中国政府は、2023 年、大豆生産の安定化に向け、大豆生産者への補助金の増額、大豆及びとうもろこしの複合栽培の促進、新規農業者への栽培指導等の政策パッケージを導入。なお、東北地区の一部で降雨過多の影響を受けたが、他の地域で天候に恵まれた。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、旺盛な食料需要に加え、国内の畜産物需要から大豆粕需要が増加することから、前年度より 3.4%増の 120.5 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、ブラジルからの輸入増により前年度より 1.1%増の 102.0 百万トンと史上最高の見込み。

農業農村部によれば、2023 年 1 ～11 月の輸入量は、前年同時期より 7.4%増の 9,190.1 万トン。内訳は、ブラジル（6,498.0 万トン）、米国（2,263.0 万トン）、アルゼンチン（160.3 万トン）の順となっている。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 11 月号」によれば、11 月の輸入価格（山東省の輸入大豆価格）は、前月（4,960 元/トン）から下落し、4,880 元/トンとなった。11 月の国内価格（山東省の国産大豆工場渡し価格）は、前月（5,720 元/トン）からわずかに下落し、5,700 元/トンとなった。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、増産による供給増を受けて前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、前年度より 6.6%増の 36.0 百万トンと史上最高の見込み。2023/24 年度の期末在庫率は、前月予測から 0.3 ポイント上方修正され、前年度より 0.9 ポイント増の 29.9%となる見込み。

大豆－中国

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（23年10月～24年9月）			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	16.4	20.3	20.8 (20.9)	0.3		2.8
消 費 量	108.4	116.5	120.5 (121.0)	-		3.4
うち搾油用	87.9	95.0	98.0 (100.5)	-		3.2
輸 出 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-		11.1
輸 入 量	90.5	100.9	102.0 (102.6)	-		1.1
期末在庫量	29.3	33.8	36.0 (41.2)	0.3		6.6
期末在庫率	27.0%	29.0%	29.9% (34.0%)	0.3		0.9

(参考)						
収穫面積(百万ha)	8.42	10.24	10.47 (8.40)		0.02	2.2
単収(t/ha)	1.95	1.98	1.99 (1.95)		0.03	0.5
資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、 「World Agricultural Production」(12 January 2024) IGC「Grain Market Report」(16 November 2023)						

表：中国の大豆輸入量と輸入先国

2023年11月			2023年 1 月～2023年11月		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
ブラジル	528.9	66.8	ブラジル	6,498.0	70.7
米国	229.5	29.0	米国	2,263.0	24.6
カナダ	14.4	1.8	アルゼンチン	160.3	1.7
ロシア	8.2	1.0	ロシア	119	1.3
アルゼンチン	5.4	0.7	カナダ	109.5	1.2
南アフリカ	3.9	0.5	エチオピア	11.1	0.1
その他	1.7	0.2	その他	29.2	0.3
計	792.0	100	計	9,190.1	100

資料：中国農業農村部資料をもとに農林水産省で作成

＜ カナダ ＞ 収穫面積増により、2023/24 年度の生産量は前年度から 6.7%増

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省（AAFC）「Outlook for Principal Field Crops」（2024.1.22）によれば、2023/24 年度の実生産量は、前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、前年度から 6.7%増、過去 5 年平均からも 6.8%増の 7.0 百万トンの見込み。単収が 3.09 トン/ヘクタールと、前年度並みの高水準となり、収穫面積が 2.26 百万ヘクタールと前年度より 6.6%増と大幅に増加することによる。

カナダ統計局「Production of principal field crops, November 2023」（2023.12.4）によれば、収穫が終了した 2023/24 年産について、カナダ東部では、温暖な気候と良好な水分状況により作柄は良好であった。

AAFC によれば、この春に作付けされる 2024/25 年度の実生産量は、収穫面積が前年より増加するものの、単収が前年より減少し、堅調な大豆粕需要と輸出から、前年度並みの 7.0 百万トンの見通し。大豆価格は前年より低下するものの、とうもろこし価格より高いため、農家は大豆の作付けを優先するとみられる。土壌水分は現時点で十分。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 12.2%増の 2.9 百万トンの見込み。バイオ燃料需要増による搾油の収益改善が見込まれていることによる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、増産による輸出余力の増大を受けて、前年度より 7.3%増の 4.6 百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会（Canadian Grain Commission）によれば、2023/24 年度（2023 年 8 月～2024 年 7 月）の 2023 年 8～11 月の輸出量は 171.8 万トンで、前年度（168.4 万トン）を上回っている。国別では、中国（89.5 万トン）が 50%以上のシェアを占め、次いでアルジェリア（24.9 万トン）、イラン（21.2 万トン）、スペイン（10.9 万トン）の順となっている。

なお、カナダ産大豆は、主産地がカナダ東部のため、主要な輸出ルートは、アジア向けは通常五大湖を通過してパナマ運河経由で輸出されるルートとなっており、春先まで続くとみられるパナマ運河の水位低下の影響を注視する必要がある。

AAFC によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、増産により前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、前年度から 26.3%増の 0.5 百万トンの見込み。

大豆－カナダ

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年8月～24年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	6.2	6.5	7.0 (7.0)	-	6.7
消 費 量	2.3	2.6	2.9 (2.4)	-	12.2
うち搾油用	1.8	1.8	1.9 (1.9)	-	6.4
輸 出 量	4.3	4.2	4.6 (4.9)	-	7.3
輸 入 量	0.5	0.5	0.5 (0.5)	-	-
期末在庫量	0.4	0.6	0.7 (0.5)	-	4.8
期末在庫率	6.5%	9.5%	9.1% (6.5%)	-	▲ 0.4

(参考)

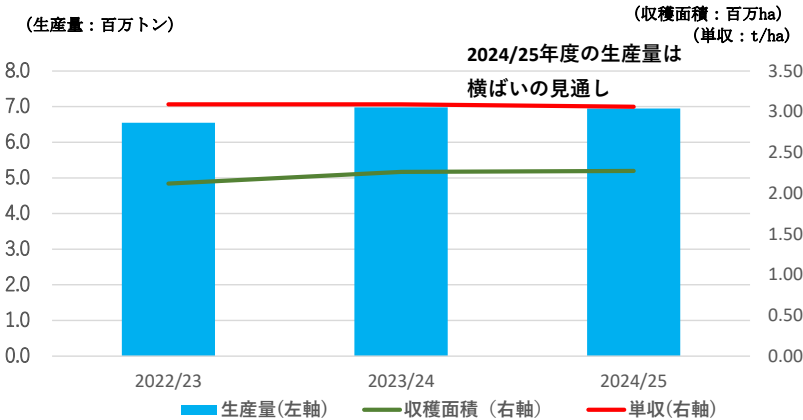
収穫面積(百万ha)	2.08	2.12	2.26 (2.26)	-	6.6
単収(t/ha)	2.99	3.09	3.09 (3.09)	-	-

資料：USDA「PS&D」

「World Agricultural Production」(12 January 2024)

AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(22 January 2024)

図：カナダの直近3か年の生産量等の推移



資料：AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(2024.1.22)をもとに農林水産省にて作成。

(参考1)本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2023/24年度)

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	23年6月～24年5月	23年9月～24年8月	23年8月～24年7月	23年9月～24年8月
カナダ	23年8月～24年7月			23年8月～24年7月
豪州	23年10月～24年9月		24年3月～25年2月	
EU	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		
中国	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月
ロシア	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		23年9月～24年8月
ウクライナ	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		
ブラジル		24年3月～25年2月	24年4月～25年3月	23年10月～24年9月
アルゼンチン	23年12月～24年11月	24年3月～25年2月		23年10月～24年9月
タイ			24年1月～12月	
インド	23年4月～24年3月		23年10月～24年9月	
ベトナム			24年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
 例えば、2023/24年度は、米国の小麦では2023年6月～2024年5月、ブラジルのとうもろこしでは2024年3月～2025年2月です。
 なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads> (「Reference Data」タブを参照)

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216	メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリックトン	大麦	
	0.025401	メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリックトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.40469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

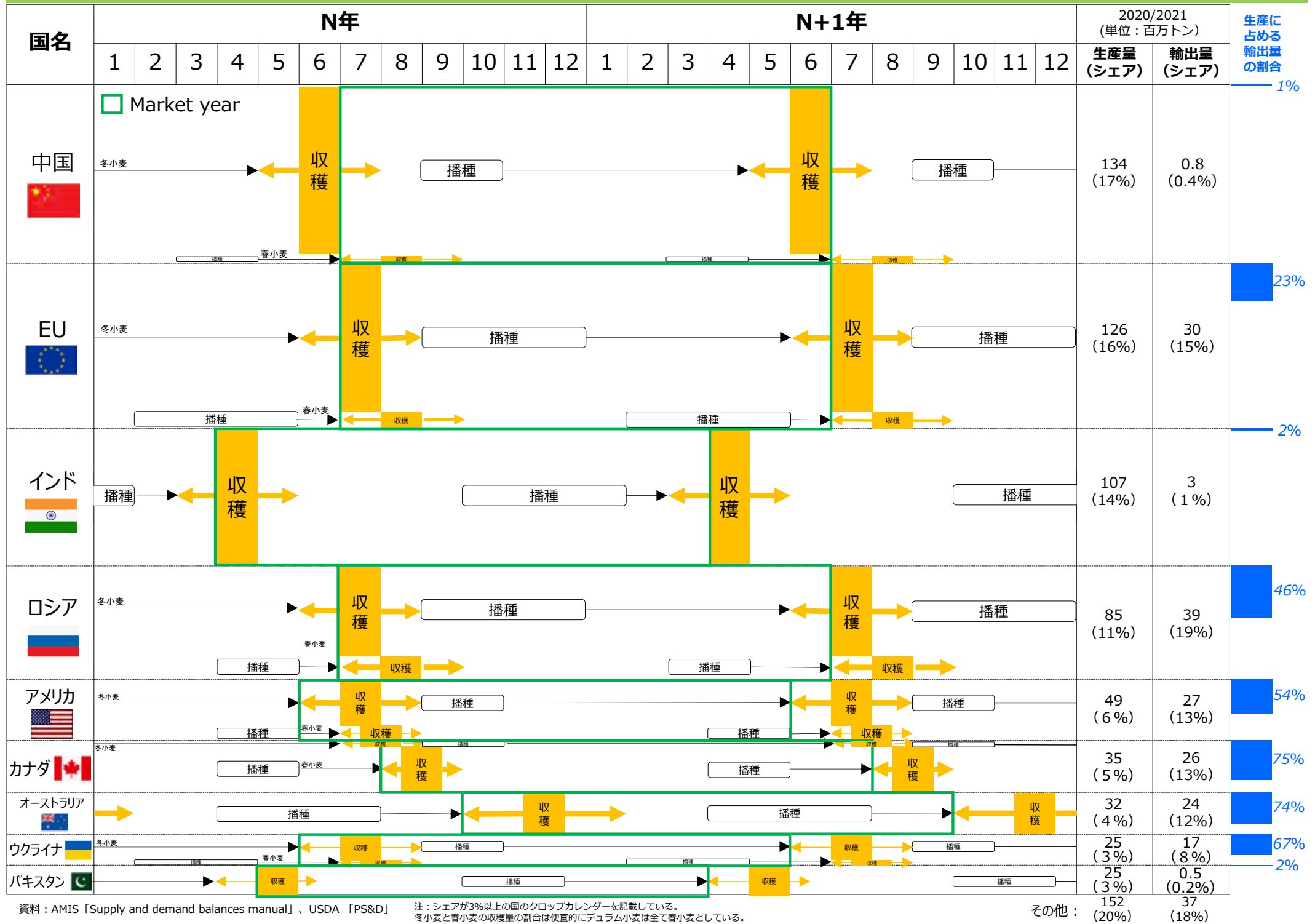
3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラーク)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏→摂氏 : $^{\circ}\text{C} = (^{\circ}\text{F} - 32) \div 1.8$			

(参考3)各国のクロップカレンダー一覧(主要品目毎)

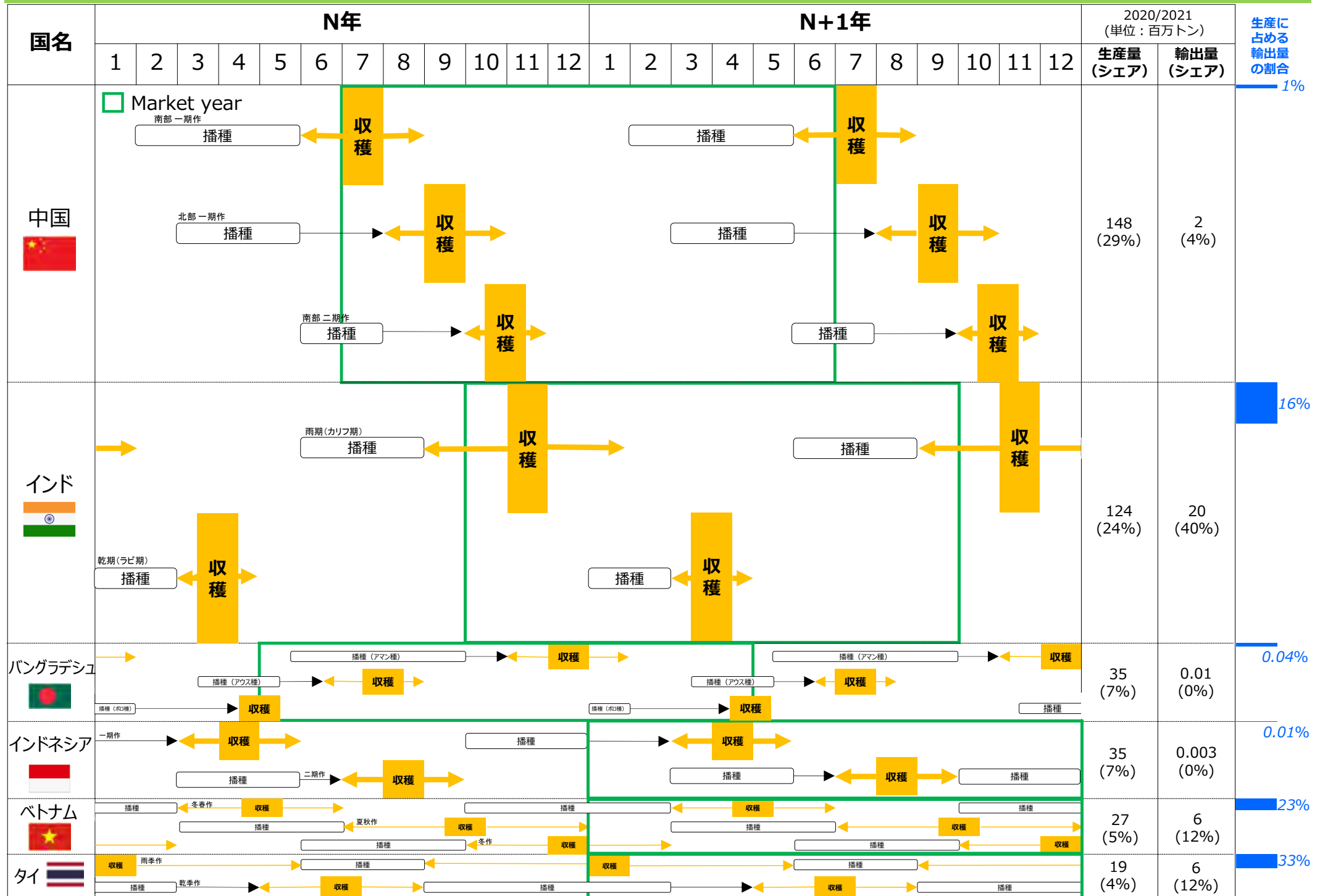
主要生産国のクロープカレンダー(小麦)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



主要生産国のクロップカレンダー(米)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」

注：シェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。

その他：

121
(24%)

16
(32%)

主要生産国のクロープカレンダー(とうもろこし)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

国名	N年												N+1年												2020/2021 (単位：百万トン)		生産に 占める 輸出品 の割合
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	生産量 (シェア)	輸出品 (シェア)	
アメリカ 	□ Market year								播種 → 収穫 播種 → 収穫																358 (32%)	70 (38%)	19%
中国 	播種 → 春作 → 収穫 播種 → 夏作 → 収穫												播種 → 収穫 播種 → 収穫												261 (23%)	0.004 (0%)	0.002%
ブラジル 	夏とうもろこし → 収穫 播種 → 冬とうもろこし → 収穫												播種 → 収穫 播種 → 収穫												87 (8%)	20 (12%)	24%
EU 	播種 → 収穫												播種 → 収穫												67 (6%)	4 (2%)	6%
アルゼンチン 	播種 → 収穫												播種 → 収穫												52 (5%)	40 (22%)	79%
インド 	乾期(ラビ期) → 播種 → 収穫 雨期(カリフ期) → 播種 → 収穫												播種 → 収穫 播種 → 収穫												31 (3%)	4 (2%)	11%
ウクライナ 	播種 → 収穫												播種 → 収穫												30 (3%)	23 (13.1%)	79%

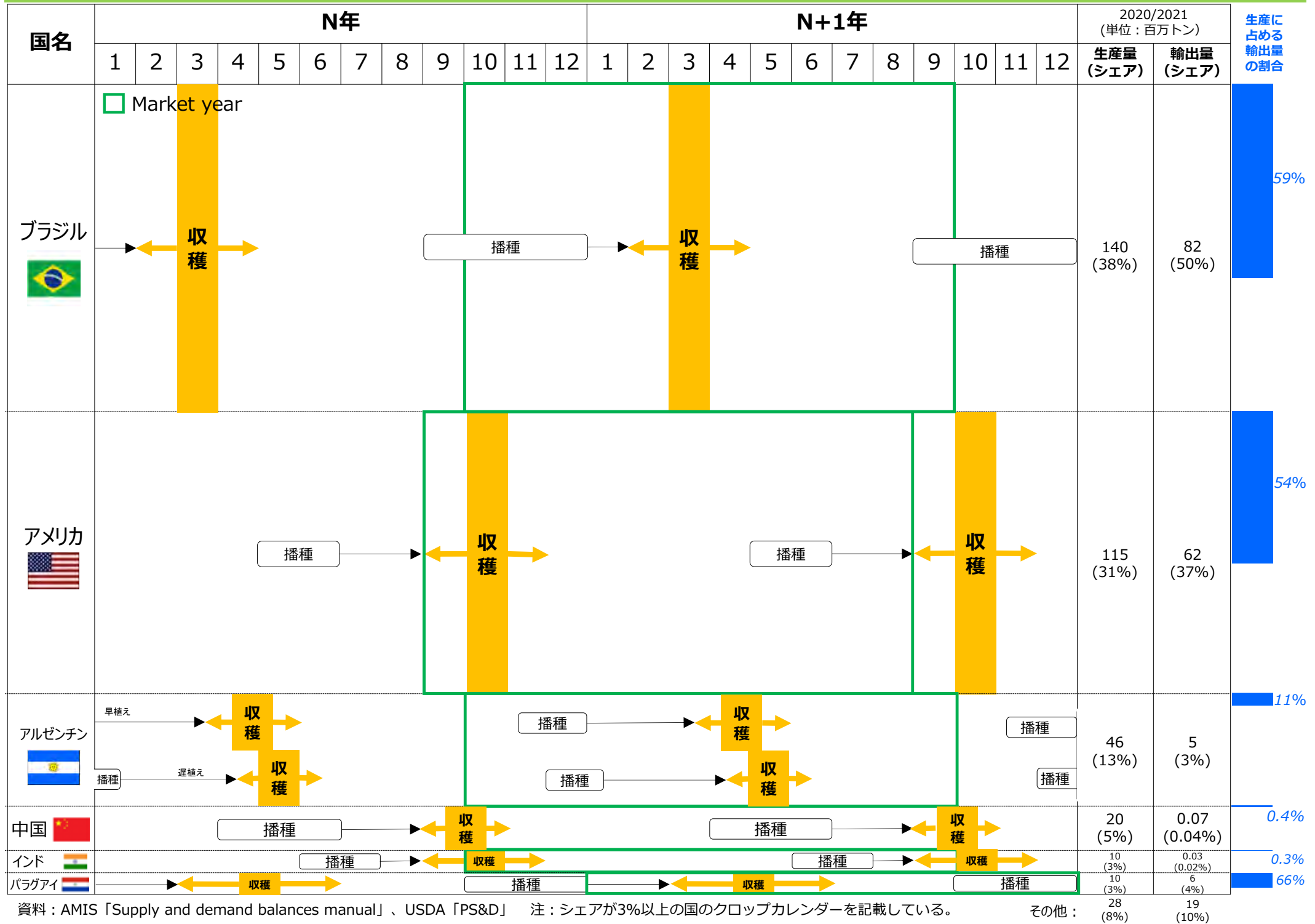
資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」

注：シェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。

その他：242
(19%) 21
(11%)

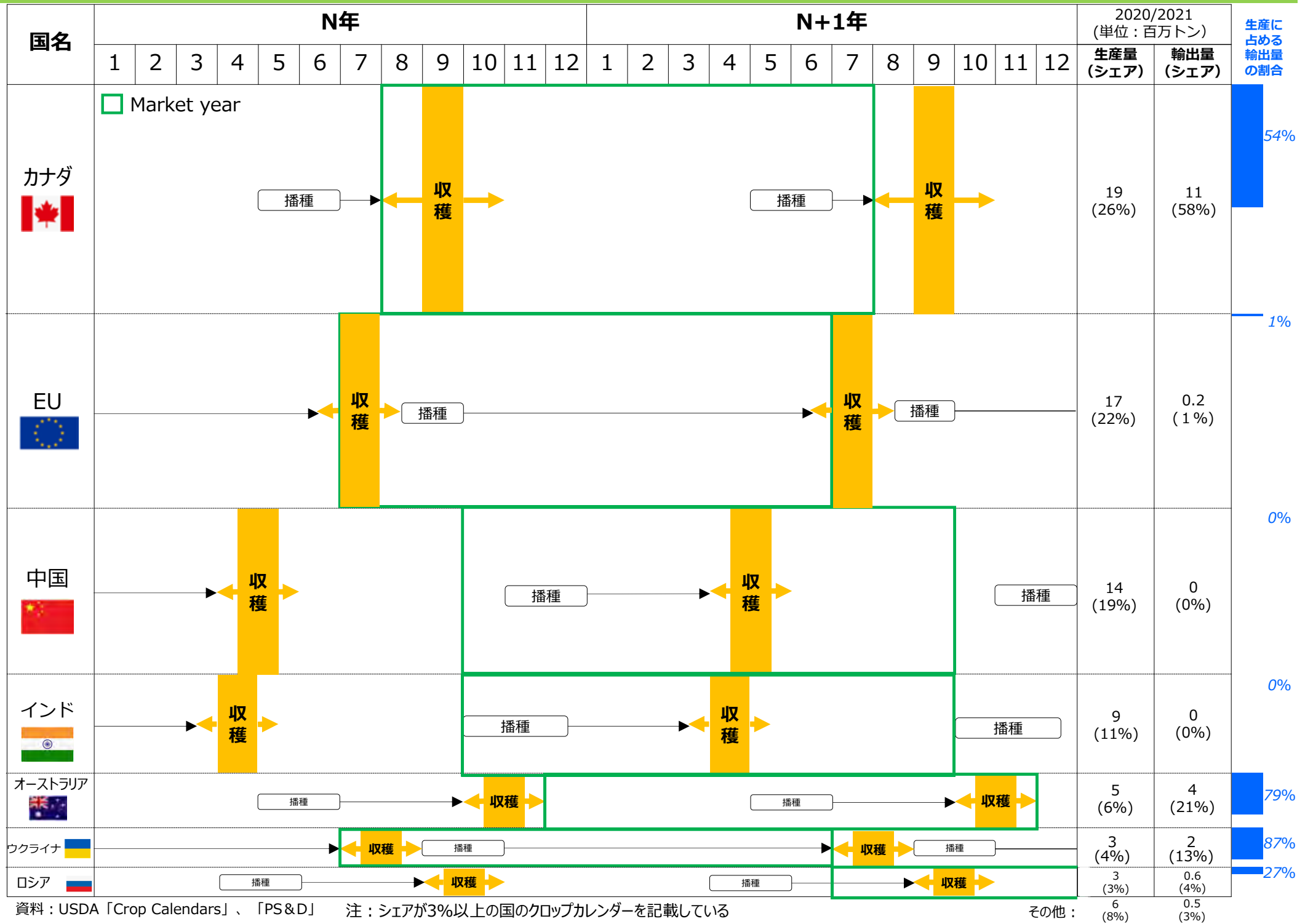
主要生産国のクロップカレンダー(大豆)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



主要生産国のクロップカレンダー(菜種)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



第31号特別分析トピック:FAO食料価格指数

FAO食料価格指数について

FAO食料価格指数(FFPI:FAO Food Price Index)とは

- ・国際農産物市場の動向を監視する食料価格指数として1996年から導入
- ・1961年～1989年までは年次指数、1990年1月以降は月次指数を公表
- ・毎月第1金曜(1日の場合は8日)に国連食糧農業機関(FAO)から公表
(<https://www.fao.org/worldfoodsituation/en/>)



FAO食料価格指数の算出方法→詳細な算出方法は参考2(p6)へ

FAO食料価格指数 (FFPI)

2014-2016年の平均価格を100とした時の農産物価格動向を輸出量(額)により加重平均した価格指数。

FAO食料価格指数 (FFPI) の構成 5 品目

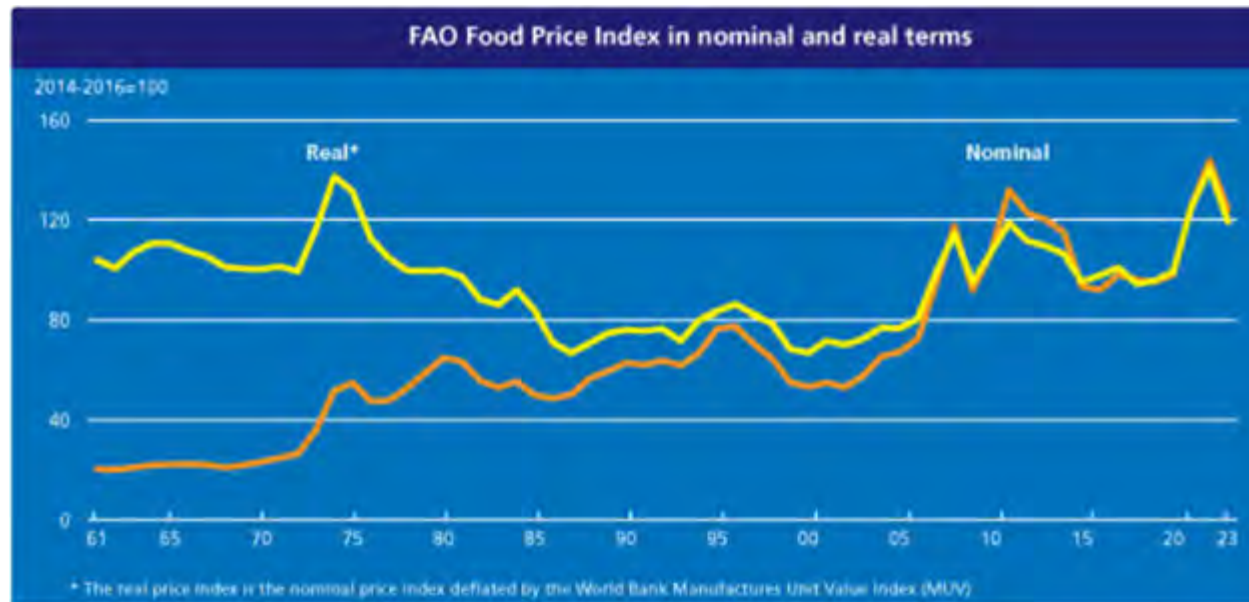
穀類 (29%)注	植物油 (17%)	乳製品 (14%)	肉類 (33%)	砂糖 (7%)
小麦、トウモロコシ、 大麦、ソルガム、コメ ※コメはインディカ、アロマティック、 ジャポニカ、もち米が含まれ、 FAO(FAO All Rice Price Index)より算出。	大豆、ヒマワリ、菜種、 落花生、綿実、 ココナツ、パーム核、 パーム、亜麻仁、 キャスター	バター チーズ 脱脂粉乳 全粉乳	牛肉 豚肉 家禽肉 羊肉	※国際砂糖協定 (International Sugar Agreement)に基づく。

注:括弧内の数字は貿易ウェイト(各品目輸出額の輸出総額に占める割合)

FAO食料価格指数の動向

1961年～2023年における動き

- 名目FFPI (Nominal)
- ・全期間を通して年間3.0%と長期的に上昇傾向。
 - ・特に2022年3月には歴史上最高水準の159.7ポイントを記録。
- 実質FFPI (Real)
- ・全期間を通して年間0.2%と長期的に微上昇の傾向。
 - ・他方で、直近2003-2023年では年間2.5%と上昇傾向に転じている。



Nominal：名目FFPI。月次公表ではインフレ・デフレの影響が小さいため公表の迅速性を優先し、名目FFPIを使用している。

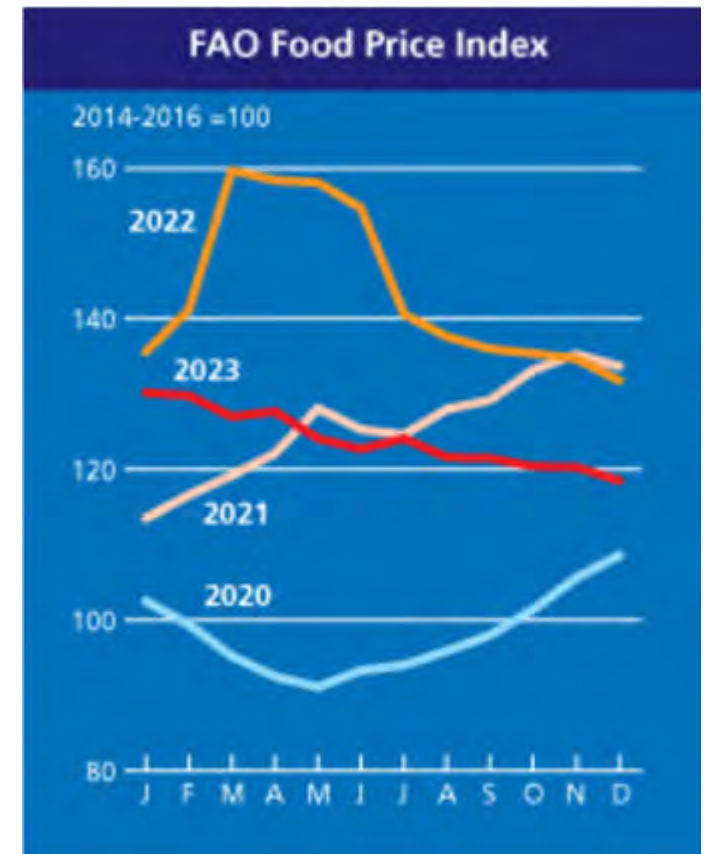
Real：実質FFPI。インフレ/デフレが物価に与える影響を排除するため名目FFPIに世界銀行指数(※)を用いて算出された数値。長期FFPIを公表する際に使用されている。

※ the World Bank's manufactures unit value(MUV) index。
実質FFPIの算出に用いる指数デフレーターの種類により、実質FFPIが変動しうることに留意。

2023年の動き

2023年平均は124.0ポイント
(2022年に比べ19.7ポイント低下)

- ・小麦、植物油等の価格指数の低下が、他の上昇分を相殺。



参照: <https://www.fao.org/worldfoodsituation/en/>
注: 数値は2024年1月公表時点のもの。
四捨五入の関係により公表数値と異なる場合がある。

2023年のFAO食料価格指数(品目別)

【穀物】 年平均130.9ポイント(前年に比べ23.8ポイント低下)

(小麦)

4カ月連続で下落した小麦の輸出価格は、堅調な需要の中、一部の主要輸出国における天候に起因する物流の混乱と黒海での緊張の影響を受け、12月に上昇。

(とうもろこし)

世界のトウモロコシ価格は、ブラジルのセカンド・クロップ作付けに対する懸念と、ウクライナからの出荷を妨げる物流上の制約の影響を受け、12月に上昇。

(コメ)

米指数によると、2023年の国際米価は年間21%の上昇を記録したが、これは主にエルニーニョによる米生産への影響への懸念と、インドによる輸出制限の余波による。

【植物油】 年平均126.3 ポイント(前年に比べ61.5ポイント低下)

価格指数の下落は、パーム油、大豆油、菜種油、ヒマワリ種子油の世界価格の下落を反映したものであり、主要生産国の季節的な減産にも関わらず、主要輸入国からの購入が控えめであったことが下支えとなった。

【乳製品】 年平均118.8ポイント(前年に比べ23.6ポイント低下)

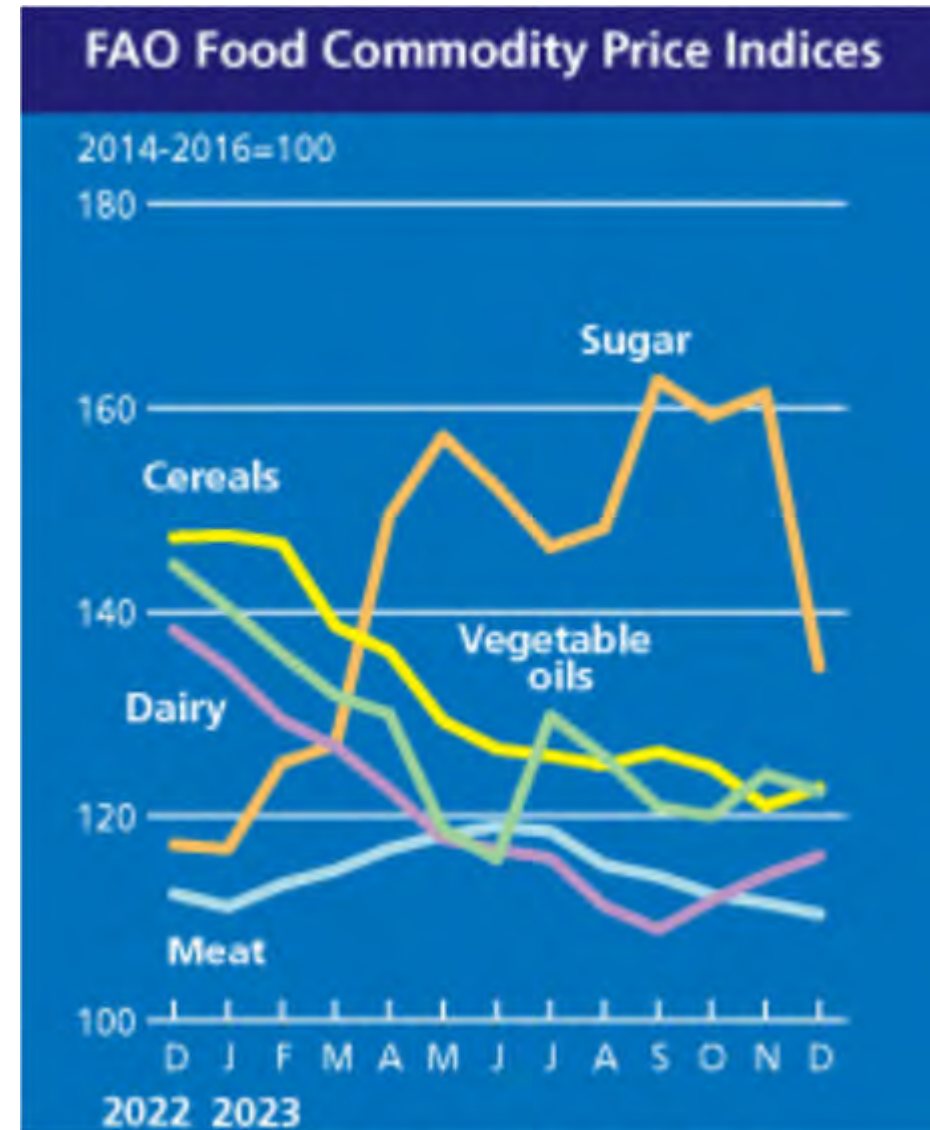
輸入国に十分な在庫がある中、輸入需要、特にスポット供給が冴えないことが下支えとなり、全ての乳製品で価格が下落したことを反映している。

【肉類】 年平均114.6ポイント(前年に比べ4.2ポイント低下)

主要な食肉輸入国による輸入需要が低迷する中、主要輸出地域からの輸出可能量が増加し、牛肉、鶏肉、羊肉の年間平均価格が低下したが、豚肉の平均価格の上昇により一部補われた。

【砂糖】 年平均145ポイント(前年に比べ30.6ポイント上昇)

12月の砂糖の国際価格相場の急落は、天候に恵まれたブラジルの生産が好調だったことが主因だが、ブラジルからの輸出が好調であったことに加え、エタノール販売からの利益が減少したことも、世界砂糖価格全体の下落に寄与した。加えて、インド政府が今シーズンのエタノール生産用サトウキビの使用を制限することを決定したことも、価格にさらなる下落圧力をかけた。



参照:<https://www.fao.org/worldfoodsituation/en/>
注:数値は2024年1月公表時点のもの。四捨五入の関係により公表数値と異なる場合がある。

(参考1) FAO食料価格指数の基準年の考え方

- 現在、過去10年間でほとんどの市場で最も代表的な期間と見なされた「**2014-2016年**」を**基準期間**として採用。
- 国際的に取引される価格と数量の両方の変動の影響を最小限に抑えるため**3年間の期間**を選択。
- 時間の経過とともに新しい条件(取引パターンの変動等)が有効性、代表性、適時性に影響を与えるため、**基準期間・品目要素を見直すことが不可欠**。

これまでの基準期間であった「2002-2004年」が、2008年以降の農産物価格の高騰を受け有効性・代表性を失ったことから、2020年7月に、新しい基準期間として「**2014-2016年**」へと見直し。
改定に合わせ過去のFFPIも全て更新。

基準期間改定前と現行の貿易ウエイト比較【表】

- ・改定前後で各品目の貿易ウエイトは大きな変化はない。
- ・とうもろこし等シェアの上昇により穀物のウエイトは1ポイント上昇。
- ・パーム油シェアの大幅な増加等により植物油は3ポイント上昇。
- ・豚肉シェアの減少等により肉類は2ポイント減少。
- ・脱脂粉乳・全粉乳のシェア減少により乳製品は2ポイント減少。

基準期間改定前と現行のFFPI比較(90年以降)【図】

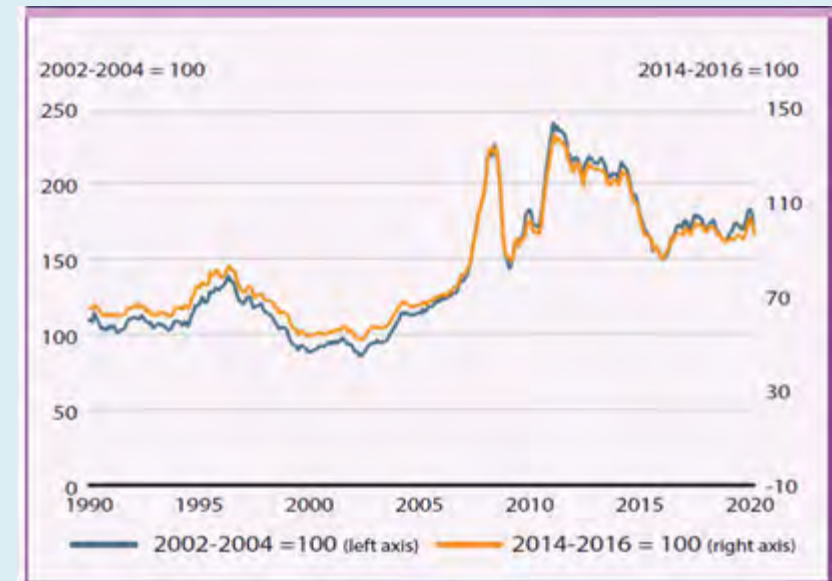
- ・改定前後で大きな変化はないが、現行のFFPIはやや低い上昇率を示す。これは肉類と乳製品の改定後の価格上昇率の減少と同品目の貿易ウエイトが低下がある程度相殺されたことによる。

【表】基準期間改定前と現行の貿易ウエイト比較

Base	Food	Cereals	Oils	Sugar	Meat	Diary
2002-04	1.00	0.28	0.14	0.07	0.35	0.16
2014-16	1.00	0.29	0.17	0.07	0.33	0.14

Note: Trade weights are calculated using average trade values from the FAOSTAT trade database.

【図】基準期間改定前と現行のFFPI比較



(参考2) FAO食料価格指数の算出方法

ラスパイレス物価指数・・・基準年を設定し、現在の平均価格で基準年と同じ物を同じ数量購入した場合に必要な金額はどれだけ変化するかを基準年を100として示した数値。

ラスパイレス物価指数は一般的に下記の通りにあらわせる。 ※ Σ は断りがない限り $\Sigma_{i=1}^n$

$$LI_t = 100 \times \frac{\Sigma P_{it} Q_{i0}}{\Sigma P_{i0} Q_{i0}} = 100 \times \Sigma \frac{P_{it}}{P_{i0}} \frac{P_{i0} Q_{i0}}{\Sigma P_{i0} Q_{i0}}$$

$$\left(100 \times \frac{\Sigma P_{it} Q_{i0}}{\Sigma P_{i0} Q_{i0}} = 100 \times \frac{P_{1t} Q_{10} + P_{2t} Q_{20} + \dots + P_{nt} Q_{n0}}{P_{10} Q_{10} + P_{20} Q_{20} + \dots + P_{n0} Q_{n0}} = 100 \times \left(\frac{P_{1t}}{P_{10}} \times \frac{P_{10} Q_{10}}{P_{10} Q_{10} + P_{20} Q_{20} + \dots + P_{n0} Q_{n0}} + \frac{P_{2t}}{P_{20}} \times \frac{P_{20} Q_{20}}{P_{10} Q_{10} + P_{20} Q_{20} + \dots + P_{n0} Q_{n0}} + \dots + \frac{P_{nt}}{P_{n0}} \times \frac{P_{n0} Q_{n0}}{P_{10} Q_{10} + P_{20} Q_{20} + \dots + P_{n0} Q_{n0}} \right) = 100 \times \Sigma \frac{P_{it}}{P_{i0}} \frac{P_{i0} Q_{i0}}{\Sigma P_{i0} Q_{i0}} \right)$$

LI_t : t年におけるラスパイレス物価指数(Laspeyres price index)

P_{it} : t年における品目iの価格、 P_{i0} : 基準年における品目iの価格

Q_{it} : t年における品目iの数量、 Q_{i0} : 基準年における品目iの数量

ここで $\frac{P_{i0} Q_{i0}}{\Sigma P_{i0} Q_{i0}}$ は基準年における品目iの貿易ウェイトだから、 S_{i0} とすると、

$$\text{FAO食料価格指数}(FFPI_t) = 100 \times LI_t = 100 \times \Sigma \frac{P_{it}}{P_{i0}} \underbrace{\frac{P_{i0} Q_{i0}}{\Sigma P_{i0} Q_{i0}}}_{S_{i0}} = 100 \times \Sigma S_{i0} \left(\frac{P_{it}}{P_{i0}} \right)$$

となり、基準年の価格に対するt年の価格比率 $\left(\frac{P_{it}}{P_{i0}}\right)$ を基準年の貿易ウェイト(S_{i0})で加重平均した指数であることがわかる。

(再掲)品目ごとの貿易ウェイト

FAO食料価格指数(FFPI)の構成5品目				
穀類 (29%) ^注	植物油 (17%)	乳製品 (14%)	肉類 (33%)	砂糖 (7%)

注:括弧内の数字は貿易ウェイト(各品目輸出額の輸出総額に占める割合)

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（１） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・ 食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・ 食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・ 米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・ 食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

（２） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・ 砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・ 野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・ 畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

（３） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・ 国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・ 国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・ 経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・ 農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・ 米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・ カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・ 豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2024 年 1 月中旬までに発表した情報を引用しています。（最新年度 2023/24 年度です）

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

ロシアが占領しているウクライナのクリミアの生産量については、米国農務省はウクライナとして集計しています。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先	農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)
------------	--

「食料安全保障月報」に関するアンケート

いつも食料安全保障月報（以下、「月報」）を御愛読いただきありがとうございます。
今後のより良い月報の作成に生かすため、皆様の声を是非お聞かせください。

- 1 あなたの所属を教えてください。（選択式）
商社、食品・飼料メーカー、食品卸・小売業、調査会社、自治体、大学・研究機関、大学生・高校生、その他
- 2 あなたの所属する会社・組織が所在する地域を教えてください。（選択式）
北海道、東北、関東（東京以外）、東京、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外
その他
- 3 月報をどこで知りましたか。（選択式）
口コミ、以前から（海外食料需給レポート時代から）、検索エンジン、農水省 HP、
書籍、その他
- 4 月報を書籍で知った場合、その書名が分かれば教えてください。
- 5 月報で一番関心／参考にしている項目は何ですか。（複数選択可）
概要編（今月の主な動き（穀物等の国際価格の動向）、今月の注目情報、今月のコラム、
その他）
品目別需給編（小麦、とうもろこし、コメ、油糧種子（大豆））
特別分析トピック
- 6 今後重点的に取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
テーマ例：世界的な異常気象（干ばつ、洪水など）の穀物生産への影響
地域別の穀物需給動向（米国、南米、豪州、東南アジア等）
ウクライナ情勢の生産・貿易への影響
中国の需要・輸入動向
世界的な人口増加による食料需要・貿易への影響
中長期（10 年先）、超長期（30 年先）的な食料需給見通し
- 7 今後月報に期待することはありますか。（自由記載）

ご回答は以下 URL または右の QR コードよりアクセス願います。



https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo_geppou_ankeeto.html